明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）

女子文壇

春期増刊



明治四十一年
四年第三號
二月十五日發行



初午

仁田棲陵女史筆

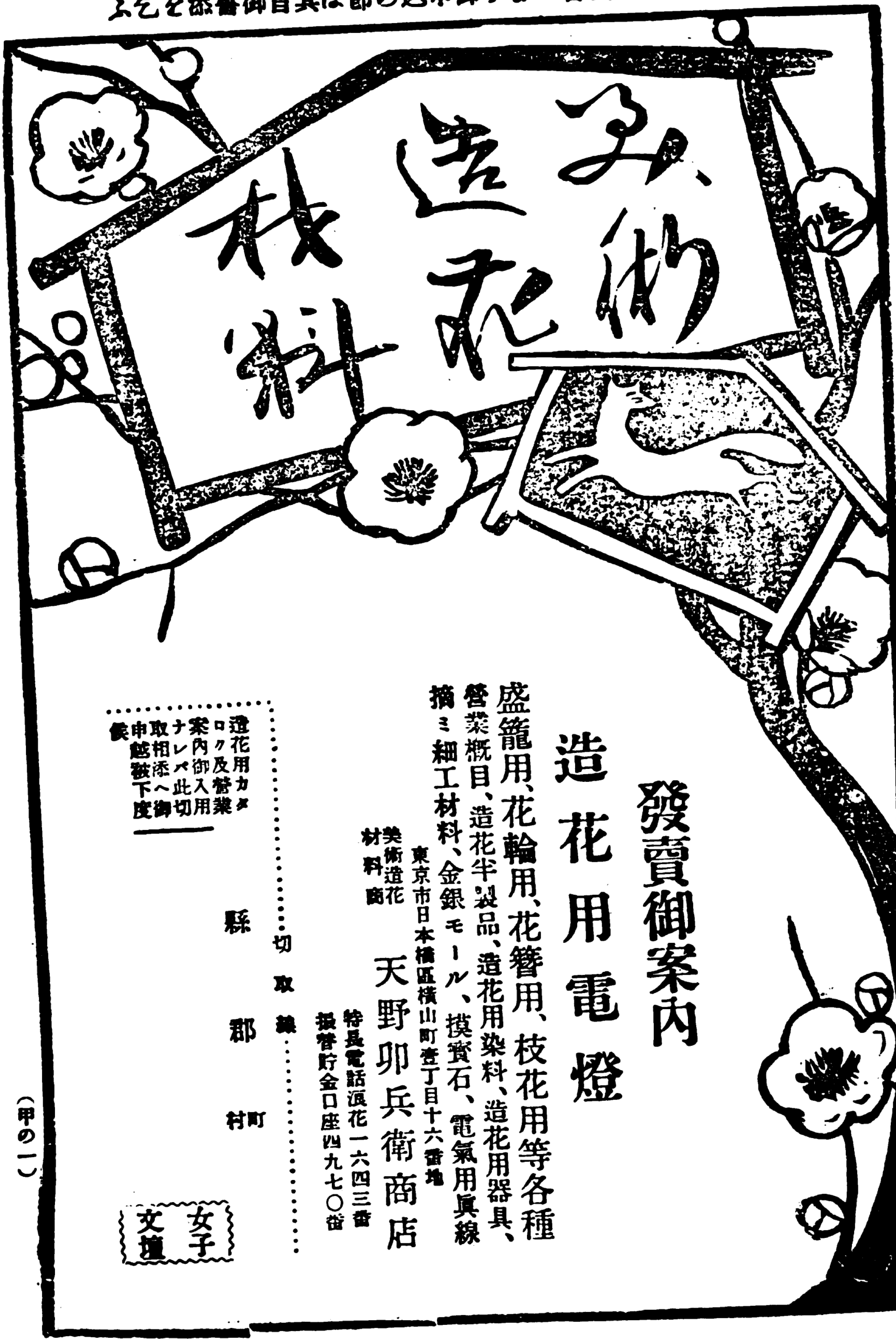
野の香



辻本天然色製版印刷

片山春帆筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



文壇の花大懸賞品

甲種	天賞	金貳拾圓	（正金を呈す）	一人
	地賞	金拾五圓	（正金を呈す）	一人
	人賞	金五圓	（正金を呈す）	一人
乙種	天賞	絹地袴	壹着（價格金七圓）	六人
	地賞	反物	壹反（價格金五圓）	六人
	人賞	懷中化粧道具	壹函（價格金參圓）	六人
丙種	天賞	帶地	壹本（價格金四圓）	三人
	地賞	縮緬帛紗	壹枚（價格金貳圓）	三人
	人賞	蒔繪硯箱	壹個（價格金壹圓）	三人

▲投稿者心得▼

○投稿は一人一章又は一首限りとし、題と文體とは各自の隨意とす。
○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限る、字體は楷書、假名は平假名を用ふること、但し和歌俳句は一首或は一句を半紙半枚に認むべし。
○投稿は各種類を異にするごとに必ず別の用紙に認め、題の上に各その種目を冠し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。
○投稿には句點を施すべし、圏點は決して附すべからず。
○投稿は女子文壇社編輯局宛にし、封筒には必ず『文壇の花原稿』の文字を朱書すべし、但し各種取交ぜ開封にて差出せば三十匁迄郵税二錢なり
○投稿中には他の用事の文句を記すべからず。
○投稿は必ず自家の作物たるべきこと、若し剽窃の疑あるものは當選無効とす。
○當選者の肖像は寫眞版にして挿入す。發表前に通知を受けたる者は差支なき限りは送付ありたし、用濟の上は返送すべし。
○投稿は一切返附せず、又不足、未納税のものは受取らざるべし。
○當選者へ懸賞品送付は發表一ヶ月後たること。

文壇の花は定期増刊にあらず臨時増刊なり即ち『四年第六號』として來る四月十五日發行す

●文壇の花 紙數二百五十頁（口繪挿畫澤山挿入）

▲定價金貳拾錢 郵税貳錢（凡て例號の倍數となる）

▲投稿及發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 女子文壇社

直接申込愛讀諸君へ謹告

『文壇の花』は來る四月十五日を期し號を逐ひ臨時增刊（是は年四回の定期增刊と異なるもの）の上例號に倣ひ送本致します、都て例號の倍數に相當する故定價も亦二冊分となります、假令ば第四卷十六號迄前金お拂込の分は夫が爲め第四卷十四號迄に繰上る譯ですから其御積て之に相當する分至急お拂込を願ます。

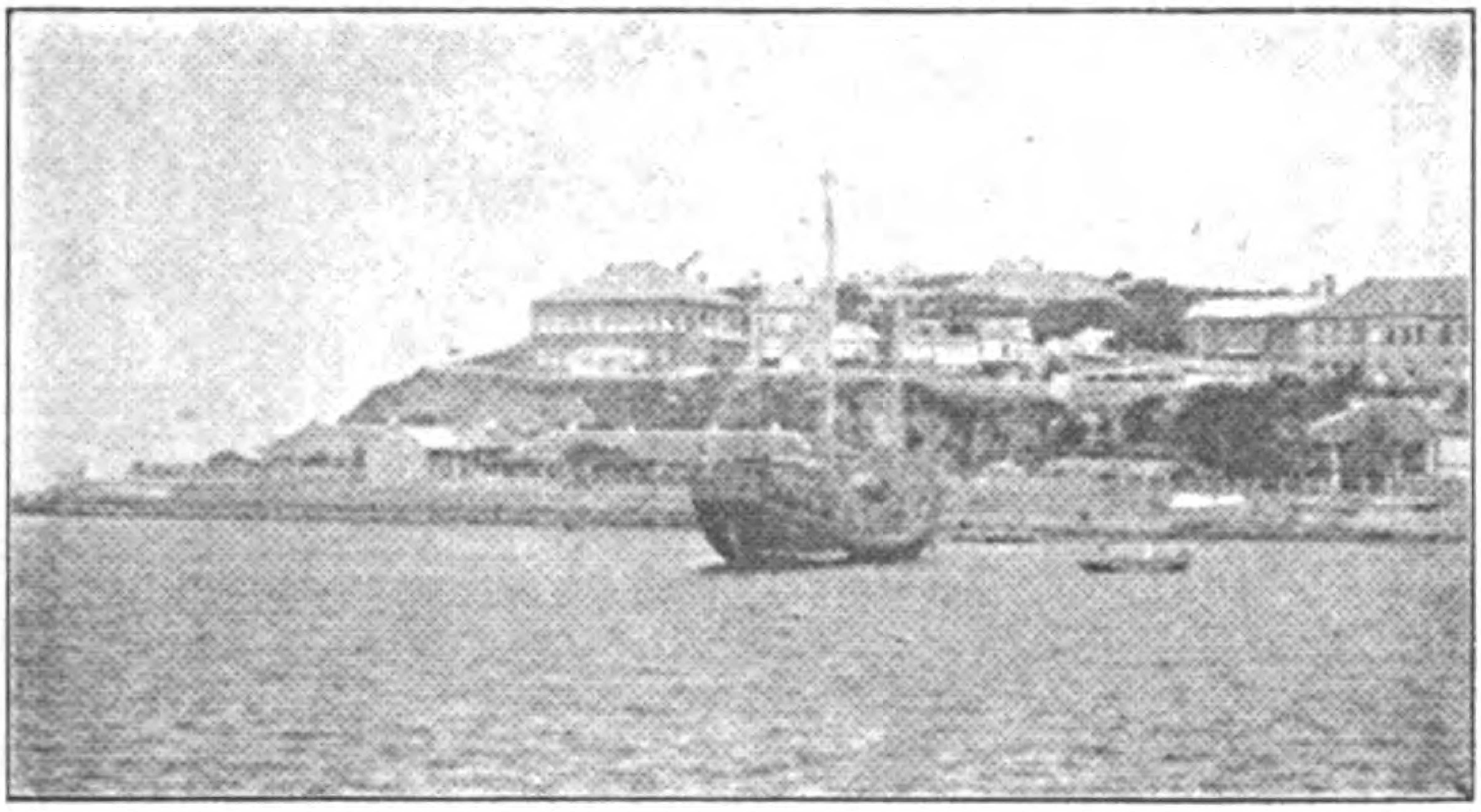
歐洲諸皇族の會合



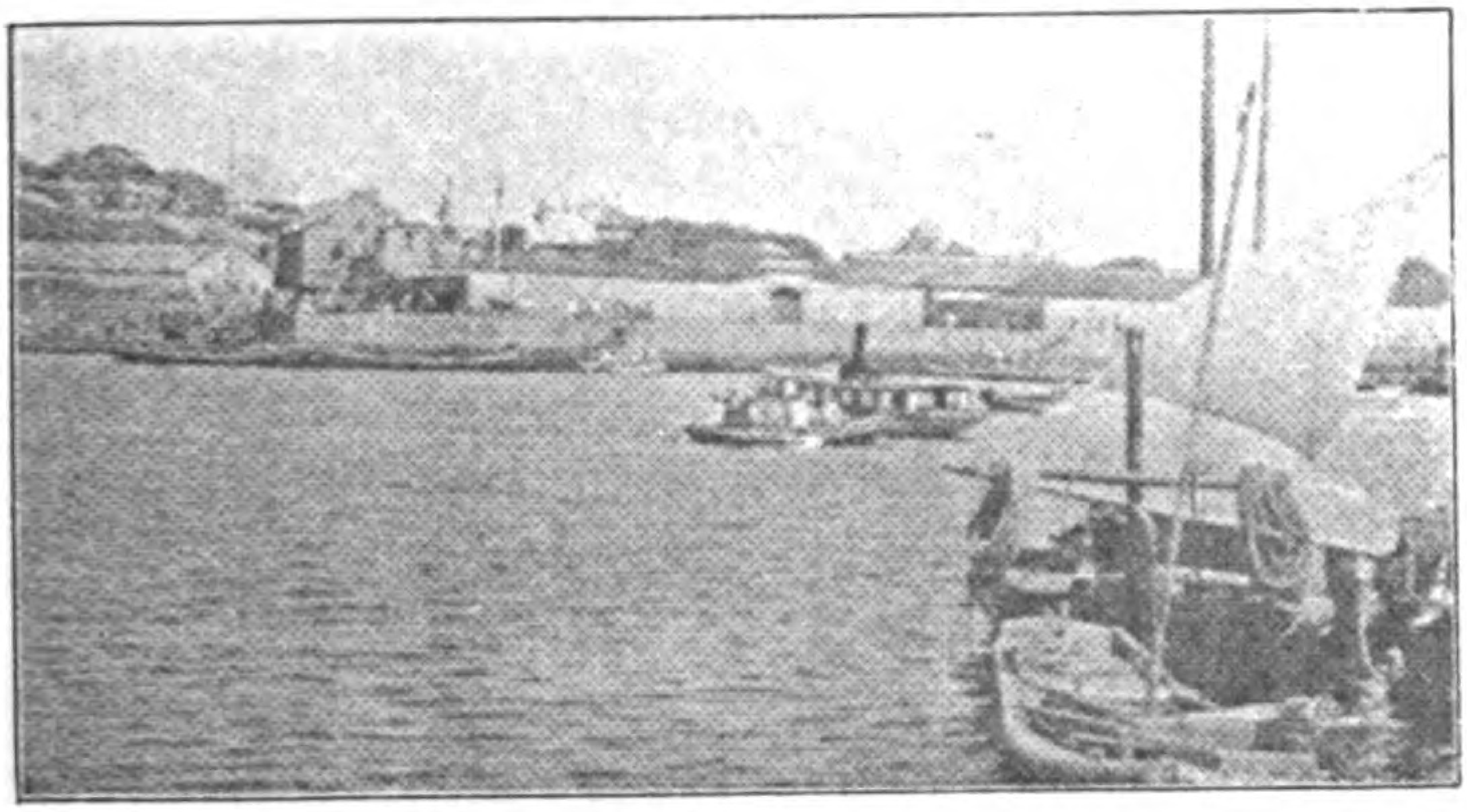
昨年末獨逸皇帝及び皇后が英國皇帝を英國のウインザー宮に訪問せられたるとき歐洲諸國の皇族同所に會せられたる者廿四人に及びたり、此の如きは實に稀有のことにして其寫眞は其際同宮の一室に於て撮影せられたるものなり

○向て左の端後列に起てるは諸威皇后○其次は獨逸皇帝○獨帝の前に坐せるは英國皇帝○後列の中央に起てる無髯の人は西班牙皇帝○其隣は英國皇太子○前列向つて右の端に坐せるは葡萄牙皇后○其右に起てるは英國皇后○西皇帝の左に起てるは獨逸皇后○葡萄牙皇后の後に起てるは西班牙皇后○其隣なる白髯の人は露のウラジミル大公

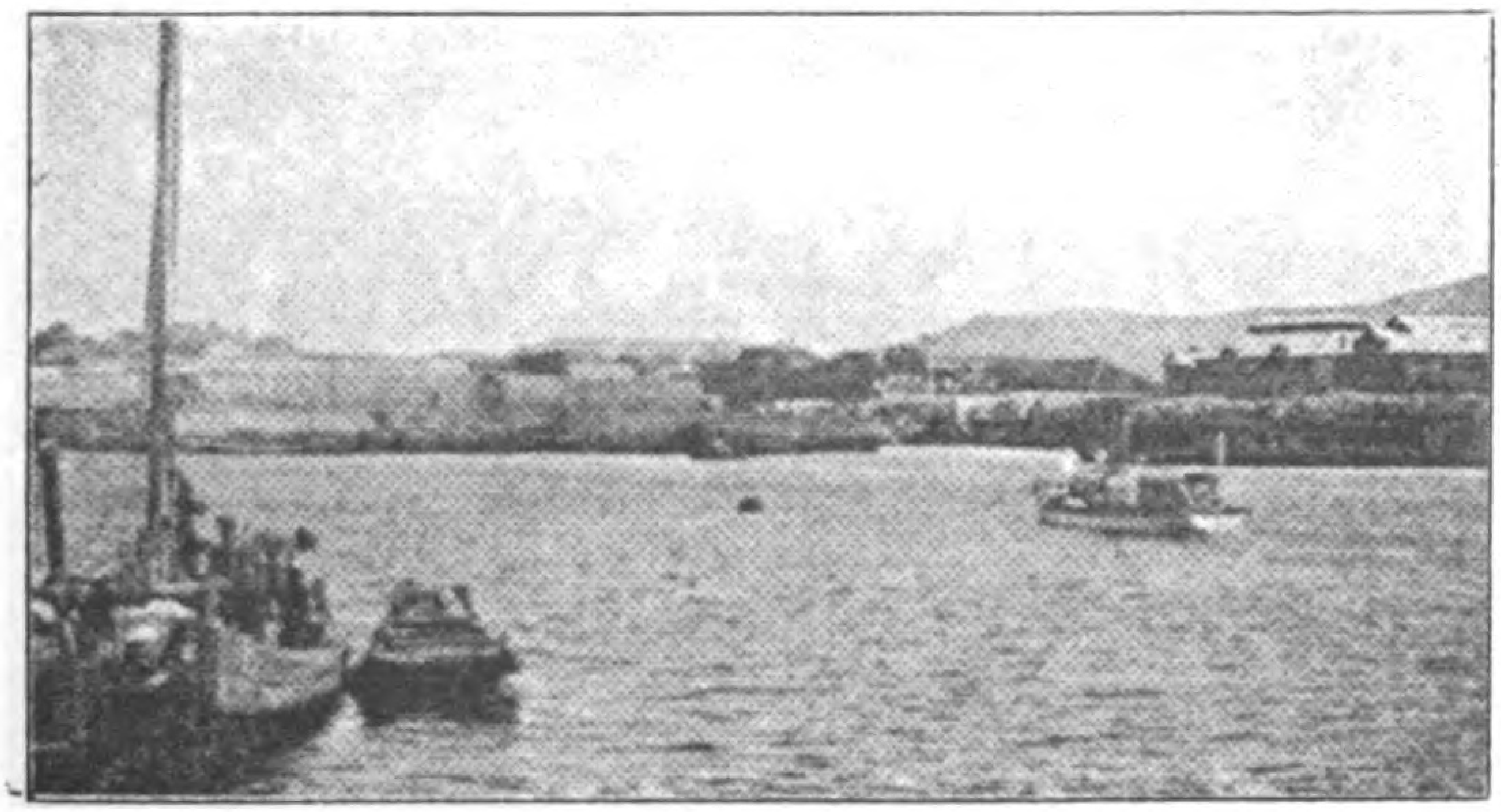
露領浦鹽斯德港



（其一）



（其二）



（其三）

「倉成彌生子寄」

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的皆式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても本より根治し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

誓って根治

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵劵代用貳割增し

新輸入 美容料 顔肉體色白新劑

本書は近時佛國パリス某新婦女の間に盛んに流行しつゝある如何程色黒き男女にても特別製式純白色に變化し驚嘆の容貌となる新藥を用ゆれば忽ち肉體色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に鮮明なる種々雜多の特効を現ゆ試に奇効發露の確證新劑價は壹劑金壹圓貳拾錢特別大劑壹圓入拾錢

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流**下する特効あり本劑壹劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る**惡血毒血**子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及を一掃することを確證す但し本劑は其發効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

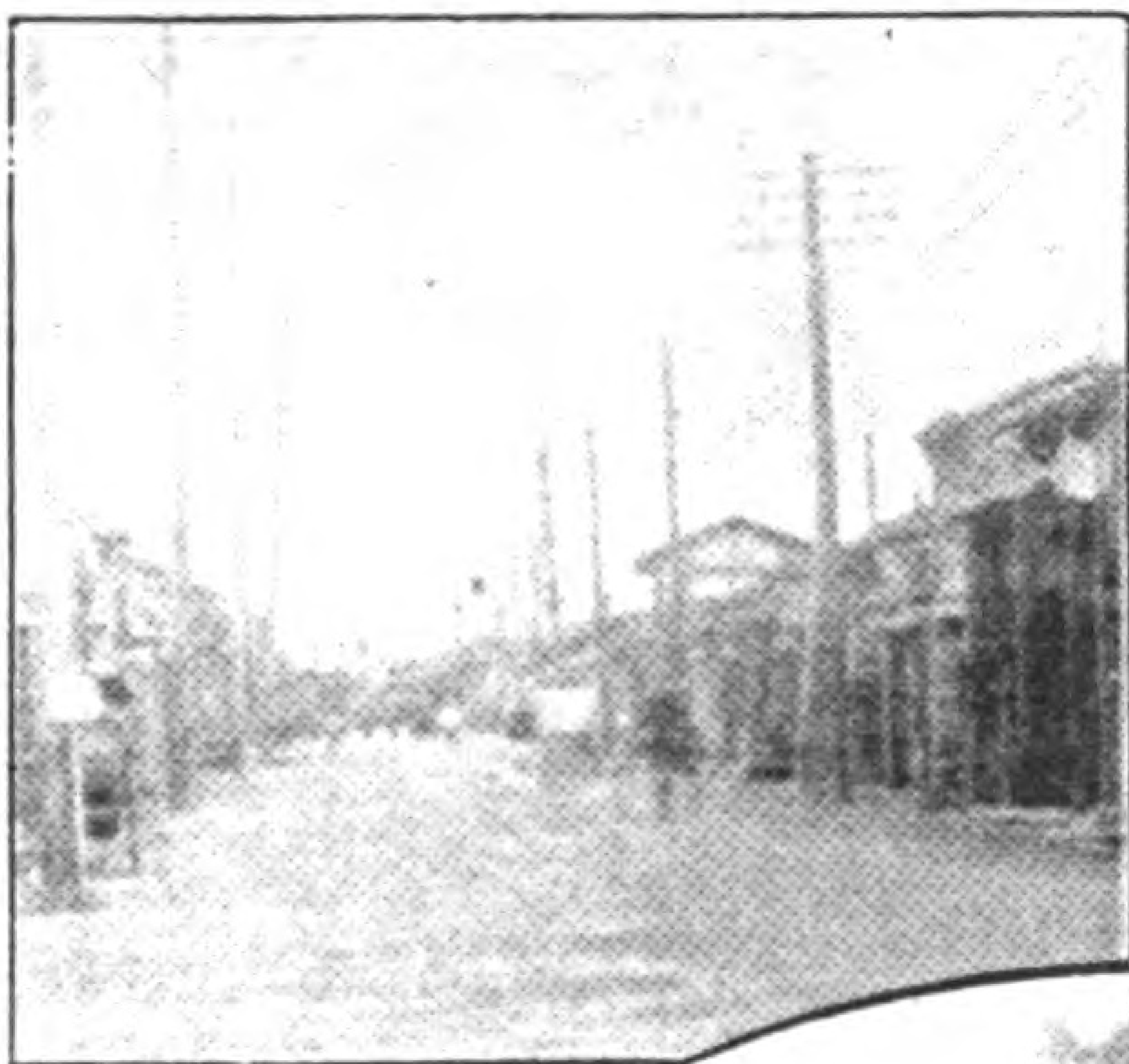


わきが 腋臭 根治確證 新發見藥

醫療的藥古方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢著金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町十九番地 日新館藥房（電話下谷五四六番）

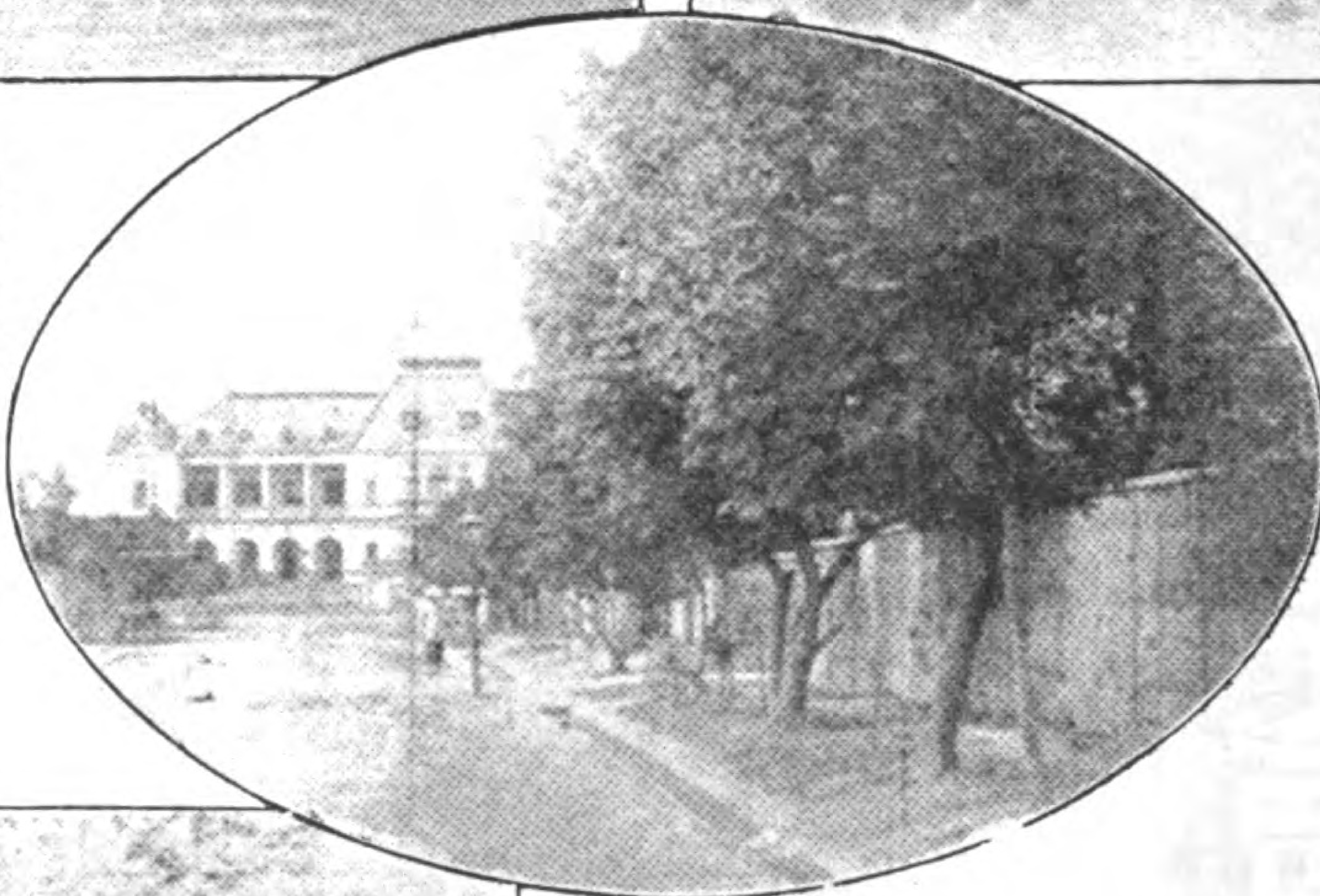
臺灣の風光



臺北市街（とみ子寄）



新高山（日本一の高山）（とみ子寄）



臺灣總督官邸（正面）（峽よし子寄）



臺灣の娘（とみ子寄）



耕作（水牛を使ふ）（黑澤とみ子寄）

誌友寫眞（四）



（奈良市）武林朝子

（岩代）岩田はま子
仝妹のぶ子



（茨城縣）杉山芳子



（尾張）溝口良子

（福島縣）高橋京子





（長野縣）小林伊津子
仝妹照子



大日本淑女學會

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる册子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子敎育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ケ年完結とす

◎詳しい規則書は申越次第差上げます

◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

坐ながら手數なく安心買入の最便法



買物安全輕便法

今般本社にては愛讀諸嬢の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具**其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て**定價の五分引**にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り屆けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及木板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

毎號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

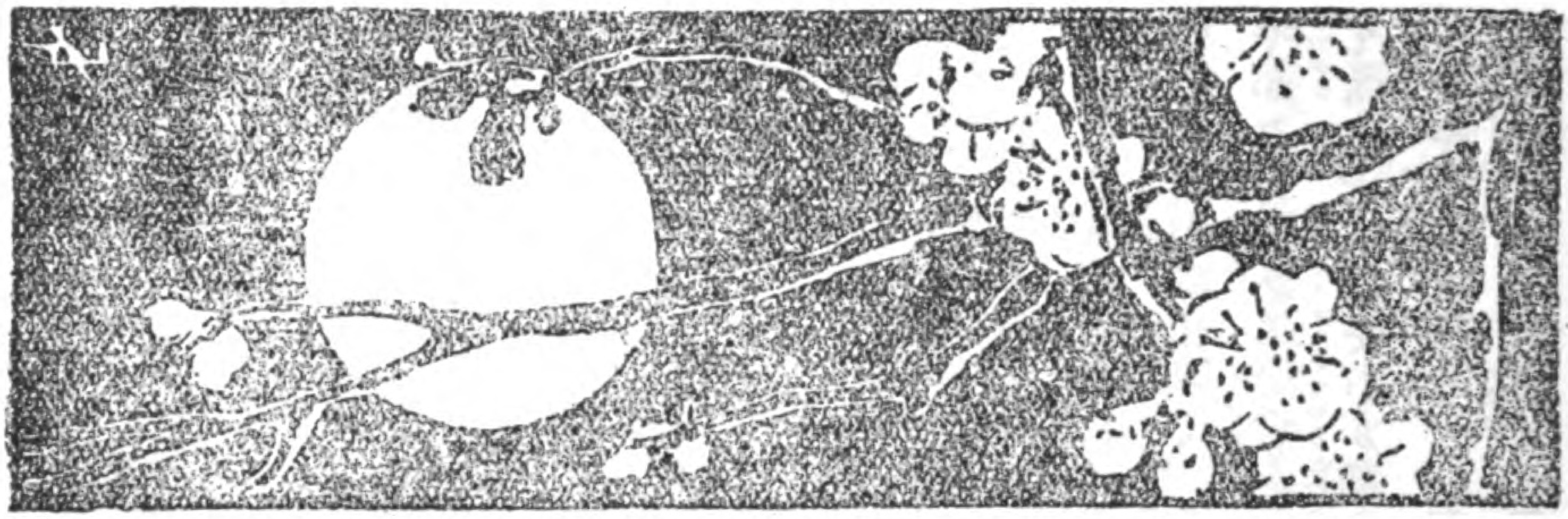
女子文壇

●臨時增刊「文壇の花」投稿大懸賞募集は廣告紙(甲の二、三)にあり

春期增刊　春日影　目次

(丙の四)

本號十一頁目に「女醫者」欄新設募集社告あり就て見よ



女子文壇　春日影　春期増刊

明治四十一年二月十五日發行

春日影

天才と人才

文章が幼稚てあらうが、言ひ表はし方が整はないてあらうが、天才がゝつた人の作物は何處か異つた光彩を放つてゐる、決して文字の美や、老巧な言廻しに迷はされてはならぬ、天才らしく見える人才が最も多い、殊に近頃はそれが多い、却てをさない文章の中に、眞の天才肌の作物を見かけるのてある。

文範と解釋

作法を讀んで作文が上手になると思つたのは一昔以前のことてある、藝術に秘傳や作法はない、只模範とすべき名文を讀み味はふことゝ名文の解釋を深く讀むことゝは、初歩の間は必要な修養てある。

摸倣の時代

詩文の作り初めには誰でも此摸倣時代がある、眞の天才なら此摸倣時代が極く僅少の間に終る、天才は獨創の才があるからてある、いつ迄も摸倣時代に止まつて人眞似ばかりしてゐる者は人才の證據てある、人格の缺乏した人間が此の摸倣時代に邪路へ外れると所謂剽窃をやるのてある。

家庭と文藝

今の家庭と今の文藝とは調和しない方が當然かも知れん、文藝は元來自由なものです、家庭には舊習あり、規範あり、歴史あつて然う若い者の思ふやうな自由の天地とはちがふ、單り文藝のことばかりでなく、家庭と靑年とは大分隔絶れて居る、家庭小說など云ふことは嘘てある、家庭は家庭、小說は小說て獨立したものてなければならぬ。

二月（閏）（小）

日曜　二日　九日　十六日　廿三日

祭日　紀元節　十一日

節分　四日

立春　五日

初午　九日

西曆 1908　　紀元二五六八年

その顏（小說）

眞山青果

「故鄕の山にも、最う春が來たらうな。」

一人の男が、今迄忙しなく働かして居たフォークをかちりと皿の上に投げた。大分醉が廻つて、つやつやと赤くなつた顏を擡げて、開け放した窓から恍惚外を眺めて居る。

「何？」

外の一人が絹のハンカチーフで口を拭きながら、其男の顏を凝と見る。

それは月は朧ろに、肅やかに深け行く春の一夜であつた。某町の出身で、在京の學士が毎月集つて開く小やかな會がある。會といつても簡單なもので、皆集つても六七人、それが種々な事故の爲めに缺席する者も一人や二人はある。四五人の鄕友が集つて、二三品の洋食にビールを傾けるぐらゐ、醉うて來ると何時でも、故鄕の話や、友の話や、元氣の好い中學時代の追懷談などがあつて、もう苦劇しい現在の生存競爭の苦鬪も何も忘れて了つて、恍惚と靑年時代の若々しい氣持になつて、多愛ない。

今宵も早稻田に程近いさる小料理屋の二階で、去年の夏から一年計り、北海道へ旅行して四五日前に歸京した、一會員の歡迎を兼ねて、此の美しい會は開かれたので。既に皿の物は大底荒されて、集つた六人の顏には十分醉が廻つて居る。て、一人が斯う云つて顏を上げると、急に皆言合せたやうにナイフやフォークをせかせかと働かして居た手を止めて、頭の後に手を組んで、反る者もあれば、ポケットから葉卷を出して喫し初める者もある。何時でも恁うした後に渠等の話は湧いて來るので……皆一樣に恁う感情の深い目をして、何か樂しい追懷の糸を得やうとして居る。一筋の糸の端を握ると、其糸を傳つて、それからそれへと果しなく樂しい思出は引き出されて來るので。

「故鄕にも、最う櫻が咲いたらうな——花の時分には

能く騒いだものだ
　先の男がシンミリ言つて、目を繁叩く。
「五月だからな――もう咲いたさ。あの寄宿舍の裏の竹藪で、毎朝藪鶯の美しい音色を聞いたのも丁度今頃だ。朝早く起きて井戸の冷たい水で顔を洗つて、新らしい朝の空氣を思ふさま吸つて、生々した景色の中に立つて居ると、氣持が晴々して實に……其處へあの鶯の音を聞く時の心持は、今でも忘れられんな。實際田舍の景色は、こんな塵臭い東京では見ることが出來んな。」
　向ひ合つて居た一人が恁う言つて、自分の言つたその終ひの言葉に感心したと云ふやうに、何がなし恍惚とする。
　皆これから語り合ふ各々の、その樂しい思に耽つて、何か追ひ求めるやうな目色をして、凝と空を見入つて居る者もあれば、何か知ら微かに笑む者もある。
「僕が東京へ歸る途中、三笠山といふ鳥渡した町に、四五日寄つた其時の事だがね。」

　先刻から太い話聲や、美やかな笑聲で一頻り賑かにどよめいたが、話の種が盡きたのと、口が疲れたので、それも大分靜になる。と、一人が今度歸つて來た今日の正賓とも云ふべき住野といふのに向つて、何か旅行中の面白い話をと、發議したので、皆一も二も無く贊成して、住野に何か話させる事にした。
　住野は感情の鋭い目元を稍伏目にして、今迄餘り多くを言はず、されば と言つて、別に人の話に耳を傾けるでもなく、何か獨りで深い物思に沈んで居たが、談をと迫まられて斯う前提はしたものゝ、後は言ひ得ずに、宛ら處女のやうに初々しく羞耻んで、何か言はうとして妙に口籠る。果は默つて何か深い物思ひに耽けるやうな目色をする。
　極めて、靜かな夜で、庭に植ゑ込んだ櫻や楓の若葉は、淡墨色に眠つたやうに一葉も搖がず、すれかゝつた八重や木蓮やが朧ろの中に白く匂えて、ふとするとそれ等の花の香が室の中に漂うて、幽かに鼻を衝く。
　住野が何を話すかと、皆闃寂として待つて居るのに、

少時しても考へ込んだまゝ、何も話出さんので。
和服を着た一人が、
「おい住野、何うしたんだ！早く話せ。」と、氣短かに催促する。
「え。」
住野は今初めて氣付いたやうに顔を擡げてドギマギしたが。
「あの人といふものは、ほんの鳥渡見たゞけて、もうそれで戀するものだらうか。」
と、付かぬことを眞面目て聞く。
「那樣馬鹿な事は何うでも可いから、早く話せ！」
と、繰返し言つたのは和服。
「住野は何うか爲てるぜ。」
他の一人が小聲に言つた。
「それは戀なんて云ふものは、數學や何かのやうに斯うしたら斯うなる、と規則的なものぢやないから、ほんの一目見た瞬間、最う其て戀してる事もあらうさ。」
と、一人が言ふ。
「然うかなあ。」
住野は深い太息を吐いて、又考込む。
「那樣に勿體振らんで早く話せよ。」
和服が性急に急く。
住野は少し躊躇つたが、
「ぢや話さう。」
と、言つて鳥渡額を押へ、
「その三笠山といふ鳥渡した町に寄つて、用事も殘り無く濟んだので、明日の朝は立たうといふ日の夕方であつた。
風呂から上つて、湯上りを……未だ飯にも早いので、獨りポツチンと火鉢の傍へ座つて、窓越に外の景色を見て居ると、町が奇麗なのと、美しい女が能く窓の下を通るので、不圖散歩して見やうと云ふ氣になり、羽織を引懸けてブラリと宿を出た。
何しても四月だらう、雪は消えても北海道は寒いさ、少し風のある日だと、迚も散歩どころではない、ストーブの傍が懐しいのだが、其日は丁度朝から好い天氣

て、風も無く、日が沒つてからも何となく晝の曖昧が冷めないやうな心持がして、未だ外套を着て歩く時分だが、綿入に羽織て別に寒さを感じなかつた。
外に出ると、遠くの高い山には未だ眞白に雪が見えるが、近くの低い山や、道や、畑には最う雪が消えて了つた、處々の日蔭にはそれでも殘つてゐる……半年ばかりの長い間、雪に沒つた北海道にも、これから春が來やうといふ時なんだ。けれども木の芽なんかは冬の儘で、まだ含らみは爲ない、其の景色の寂しい姿といふものは……人の心は何とも言へん寂寥の念ひに鎖されるね。實際松だの杉だのと云ふ常盤木ばかり見て居る内地人には。あゝした北海道の荒れ果てた冬の寂しさは、迚も想像にもつかんだらう。松だの、杉だのと云つたやうな木は植木にしてあるくらゐのもので、土臺北海道には常盤木なんていふものは無いと云つても可い。冬に成つたら最後、枯木林と雪の外、植物の青い葉は迚も見られないのだ。
尤も山の奥に行くと、少しは蝦夷松があるが――四月の末と言つても、唯雪が消えたゞけで、花もなければ、小鳥も雀より外見られない、淋しい眺めは冬と何の變りも無いのだ、それは淋しいものだよ、三笠山はその淋しい山の谷間にある小さい――けれども奇麗な町で、水が美しいのと、眺めが好いので、夏なら避暑などに實に好い處だ。僕はたゞ此の淋しい景色に包まれた、美しい町の夕暮を、恍惚として歩いた。歩けば必ず木があり、小さい流がある、流があれば必ず橋があつて、人が居る――人と云へば、三笠山の乙女は三笠山の自然が秀麗なやうに、姿が皆美しい、水が好いので色が白い、聲も好い、美しい自然の感化を受けた乙女の樣子が實に好い。僕は何の事はない、夢に見る現世を離れた樂しい國に來たやうな思がして、人と自然の美しさに憧れて歩いて居ると、小さい町なものだから、最う町外れまで來て了つた――話はこれからのだが……。」
と、凝と空を見入る。
「ふむ、北海道にも那樣に美しい乙女の居る町がある

かね。」
一人言葉を挿んで感心する。
住野は少し熱した面を、電氣の光に眩しげに反けて、
「それて、最うそれから先に行つても、田や畑だから充らんと思つて、踵をかへさうとした時、向ふの方で幽に、床しい琴の音が極めてゆるく聞えて來た。其時は最う日は落ちて、濕りを持つた春の夕の空氣は、淡い煙のやうに、シツトリ此の美しい町や、自然を包んで、道の兩側に植つた木蔭を透して、幽にちらつく火影を見ると、何となく心が、恁う深い暗に引入れられるやうに、深沈として來る。恁うした春の夕といふものは、妙に人の心を佗しいやうな、儚いやうな思に沈ませて、無上に人懐しい思に胸を顫はさせるものだ。恁うした時には、我々の心には、輕い春の哀愁を覺えて――殊に旅の空にあつては、故郷のことや、友人のことや、乃至は幼い時の悲しかつたことや、樂しかつたことが、唯譯も無くゴツチヤに思出されて、何となく深い悲しみに胸が迫る――今迄美しい町、美しい人に憧れて居た僕も、今この深く〱心の底に沁み入るやうな、淋しい琴の調を聞くと、心の底に深く潜んで居た、旅の淋しさ冷たさが、犇々と切實に感じられて悲しくなり、何がなし無上に人懐しくて耐らない……究りそのやうに寂寞を感じて來るといふのが、自分の情が熱して來るからだね。琴の音は矢張り幽に僕の胸に、謂知れぬ淋しさを濺ぎ込む。若し其時傍に人が居つたら、僕は誰でも關はず抱き締めたゞらう。」
と、其時を偲ぶやうに息を飲んで、
「少時すると、もう琴の音は聞えないやうになつたけれども、僕は少時ボンヤリそこに立つてゐた。併し歩みは何時の間にか、知らず〱琴の音のした方に向いて、やがて大きくはないが併し未だ新らしい綺麗な家の前に出た。
家の中はヒツソリとして、未だ燈火が付いて居ない。僕はその時疎らな落葉松の垣根越しに、窓に寄つてヂツと空を見入つた。そして若い美しい顔を見た。夕暮おぼろて好くは見分け難いが、その顔の中に美しい輝

いた二つの瞳、それは確かに何か深い〳〵思ひに憧れて居る目だ。僕はこれまで随分美しい女を見た。併しこの顔を見た時ぐらゐ、云ふ可らざる深い念ひに胸を打たれた事がない。實に、實に、己れを忘れるとはあの事だらう。女は直ぐ窓の中に隠れたけれども、僕はそこを去り得ないで、いろんな果てしもない空想に耽つて、果てはその女が今悲しい境遇に泣いて居るので、それを何しても僕が救はねばならんやうな氣がした。

さめた時には四邊はもう眞暗くなつて、家のうちには美しう燈火がついて、窓には白いカーテンが掛つて居た。

　歸りにはもう美しい自然も、町も、流れも、少女も自分の目へは入らなかつた。

　宿へ歸つてからも、その女に就いて、いろんなことを想像してその夜はマンヂリとも寢られず、その女は自分と何か深い因縁があるやうに思はれてならなかつた。

て、　翌朝早く起きて、しばらくそこの周圍をブラついたが、併し二度と女の姿は見る事が出來なかつた。て、どうしてもその朝、そこを立たねばならぬ時の僕の悲しみは、まアどんなであつたらう。もう、その女に一生合ふ事が出來んやうな氣がしたので。

　その後と云ふものは、汽車でも、船でも、家に歸つてからも、今でも、昨日も、あの白い顔、美しい瞳、チヨイと、ホンの些いと見たゞけの女の顔が、僕の目にチラついて、消さうと思つても中々消えない。若しホンの刹那に於て、女性の美が男性の心を捉へ得るものとしたなら、僕は正しく彼の女を戀してるのだ。」

　と、幽かな太息を吐いた。

　すると、傍から一人が、

「そして、それはヴアヂンかね。」と問ふ。

「處女？　そりや分らんさ、誰にだつて分かるものか、然し僕は處女でも人の細君でも、それは關はない。」

　と云つて、什野は屹と肩を反らしたが、顔は青春の若々しい、ある望深かい、男の色に染められて居た。

やさしき人

松原至文

先つ頃誰かの話に、日本の小說には、よく笑ふ人と、意志の人とが、主人公として稀てある、或は皆無てあるといふやうな事があつたが、余は又此處に、小說の中てはなく、現實の日本人全體を見わたして、誠に此の「やさしき人」といふもの丶、甚だ稀な事をあげ且つ痛告したいのてある。

「やさしき人」といふのは、英語の所謂 "Tender hearted man" をいふのてあつて、心もちから、手觸りから、顏かたち、物の言ひぶり、することと爲すこと、皆しとやかて親切て、德望の自らそなはつた柔和な人を指すのてある。

西洋人にはよく斯樣いふ人を見受けるけれども日本人には此の類の人が甚だめづらしい。妙に肝癪もちの、こせ／＼した、顳顬のあたりに肝すぢが青立つて、言ふことでも何だかつん／＼と角があつてどうかすると直ぐさまへチたがる所謂神經質の人てなければ、きツと口を結んで、眼がぎろりと光り、だんまりこんて人の裏腹を始終中さぐるやうな所謂膽汁質的の人か、若くは人の模範と言はれる人すら、磊落とか豪放とかいふのが特徴で、禮儀も作法も有つたものてなく、其の時の心まかせに出來放第やり放すといふやうな所謂東洋豪傑肌か、いづれにしても此の「やさしき人」といふものから見ると、妙に一風變つた、すぢつた人が多い。

考へても御覽なさい、斯う云つた風の人をお父樣として持ち、又はお母樣として育て丶頂き、又は師匠とか先生とか先輩とか、或は兄さん姉さん、若くは目上の人として禮を執るもの丶、どれくらゐの不幸て御坐いませうかを。斯ういふ人の御子供衆やお弟子達にロクな人が出ないといふのは無理もない事てあらう。

土井贅牙翁といふ人は、今から五十年も前の大儒者て、勢州津の城下、藤堂樣の御指南役てあつた、學問の宏い上に見識が高く、それに五目連べの名人て、將

棋も五段までは打つといふ匹儔稀な智者であつた、或るとき武田篤初といふ書生が、佐々木狂介といふ人の紹介で、初めて聱牙翁にお目通りを致し、爾後入門の贄を取りたしと頼み込んだとき、武田といふものゝ風采の恐ろしく亂暴なのを見て取つて、佐々木が

「これは武田と申すもので……」

と言ふが早いか、ぐッと反り身になつて、松籟潮音、破れよとばかりの聲を張り上げ、

「さうて御坐るか、吾輩は土井聱牙で御坐る!!!」

と怒鳴りつけた。武田も此の時は初めて世の中に恐ろしい人もあるものだと思つて、爾來翁の前には頭が擧らなかつたといふ事である。先年亡くなられた武田氏自身の話であるから事實てもあらうし、猶ほ徳川時代の儒者學者に之れと類似の逸話は大變多い。

かういふ風の人も偉いのかも知れない。然し後進としてかういつた風の人を先輩に持つのと、『やさしい人』を先輩に持つのと、どちらが幸福であらう。幸福といふのが、その時一時ぎりの心安さてなく、將來の人品人格に對して、どちらが幸福な結果を持ち來すてあらう。考一考するまでもなく善くわかるてあらうと思ふ。

日本人には、先輩として後輩に缺點や、疎相や、過ちなどのあつた際、どこまでもそれを優しく保護してやつて、とう〳〵その非を悔ゐさせ、一人前の青天白日の身に仕立あげるといふやうな風の人は無くて、一寸罪過あれば、聲を勵まして怒鳴りつける、まごまごして居れば、嵩にかゝつて叱責し放すといふ人のが多いやうである。

かういふ傾向といふものは、多分久しく佛道とか儒道とかいふものが國民精神を支配して居て、何か事があると『枯木寒巖による、三冬暖氣なし』と洒落て見たり、『女子と小人は養ひ難し』てな事を言つて敦圉いて見たり、普通凡常の人や、氣の弱いものや、婦人や小供では手がつけられなくなつたのであらう。見るからに引きつけられるやうな、春風が眉目を吹きわたつて居るやうな、心も貌もやさしくて、お父様か美しい

神様かと言つたやうな人は日本人には無くなつたのてあらう。誠に悲しむべき事ではあるまいか。

男子としてはまだ左程ても無いが、女子としたら如何てあらう。かういふ人がしみ〴〵文藝や美術や音樂やを味はひ得るてあらうか、かういふ人が母として、先生として、はた姉さんとしての、美しい圓滿な道を歩んて行く事が出來るてあらうか、啻に先輩としてのみてなく、人の妻として、人の妹として、はた人の弟子として、どれだけの務が出來るてあらう「やさしい人」が日本に澤山生れて來て、澤山の子弟を育てあげなかつたならば、國民の人文精神は決して完全圓滿の發達を爲すことが出來ないのてある。

始終いら〳〵とした氣短かな人や、物のなげやりな、ぞんざいな人に、しみ〴〵文藝や又は高尚な學問の味がわかるものてはない、かういふ人は決して母として小供を教育することの出來るものてはない。その外どの方面へ向けても決して完全圓滿な働きの出來るものてはない。

僕は日本の女流界にわけて此の "Tender hearted woman" の多い事がのぞましい。わが子ばかり可愛がつて、めし使ひや他人に對して酷く辛いやうな人は、決して「やさしい人」では無い。自分の好きなものにばかり、濃情で親切て思ひやりが深くても、他人に對して冷淡で、不親切で、怒りつぽいやうでは、決して「やさしい人」ではない。

「やさしい人」は、信仰誠實の人でなくてはならぬ。信仰と言つても何も佛敎とか耶蘇敎とかを信じなくてはならぬのてはない、人を疑ぐつたり、人の言ふ事する事をひがんだり、妙に人の裏を掻いたりするやうな事をせず、『誠』といふもの丶上に立つて、人を信じて言動するのてある。若松賤子女史の有名な「小公子」あの主人公のロード、フォントロイは、冷刻鐵の如き祖父の孫てあるが、ロード、フォントロイの母様は賢女てあつたから、祖父様の、冷刻な、鄙吝な、殘忍な人てある事をつげない、却て、お祖父様は、やさしい人、親切な人、思ひやりの深い人だと敎へた、ロード、フ

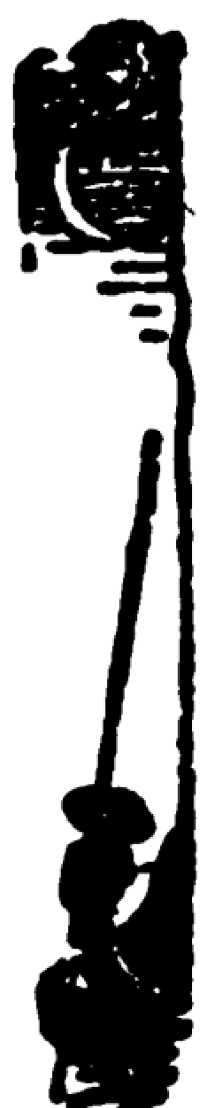
オントロイは未だ稚いけれども、その誠仰信仰の心から、決して之れを疑はない、やさしい人、親切な人として毎日々々お祖父様につかへる、遂に此のフォントロイの信の力は、冷刻な祖父の心をやわらげて、前とは打つて變つた、全くのやさしい、親切な心の人にしてしまつた。信ずる力といふものは斯の如く強いものてある。「柔能く剛を制す」やさしい人の誠實信仰は、よく頑強冷刻な人の心をも打ちくだくの力あるものてある。

余は日本の人文精神に取つて、此の「やさしい人」のないほど悲しい事はないと思ふ。殊に女子に於て然りと覺ゆる。女子の感情敎育、その中に第一として置いてもらひたいのは、此の「やさしい人」たらんとする事である。



女醫者（新欄の豫告）

新たに女醫者と云ふ欄を本誌の一部に置き、愛讀者諸孃の便宜を計らうと思ひます、健康なる身體には健康なる精神が宿る、何より彼より身體は健康でなければなりません、精神上の健康を計る本誌は、今又其一部を加へて、身體上の健康も計りたいと思ひます、扨て此欄は凡て問答躰で、諸孃が隨意に問ひを出して下さい、身の衛生のことなら何でも答へます、平常の衛生の事でも、病氣の心得ても、女子の身體に關する事なら懇切にお答へいたします、而して答案は凡て多年斯道に經驗ある女醫學校長鷲山彌生先生に答へて頂くことにいたします、確實にして信用あることは申すまでもありません、なほ「女醫者」の問は匿名でよろしい、原稿は成るべく簡單に半紙又はハガキに認め「女醫者」と朱書して本社へ送つて下さい、到着順に答へて行きます



山中古洞先生選

懸賞當選繪畫（其三）

(1)花さし（二等）
豐橋市松葉町字西仲藤城六三郎方　のぶへ

(2)姉妹（三等）
牛込區市ヶ谷富久町六〇藤澤方　佐野貞子

(3)銃獵家（四等）
豐橋市停車場前山中鐵太郎方　加藤芳子

(4)大工（五等）
府下南多摩郡恩方村　中島繼子

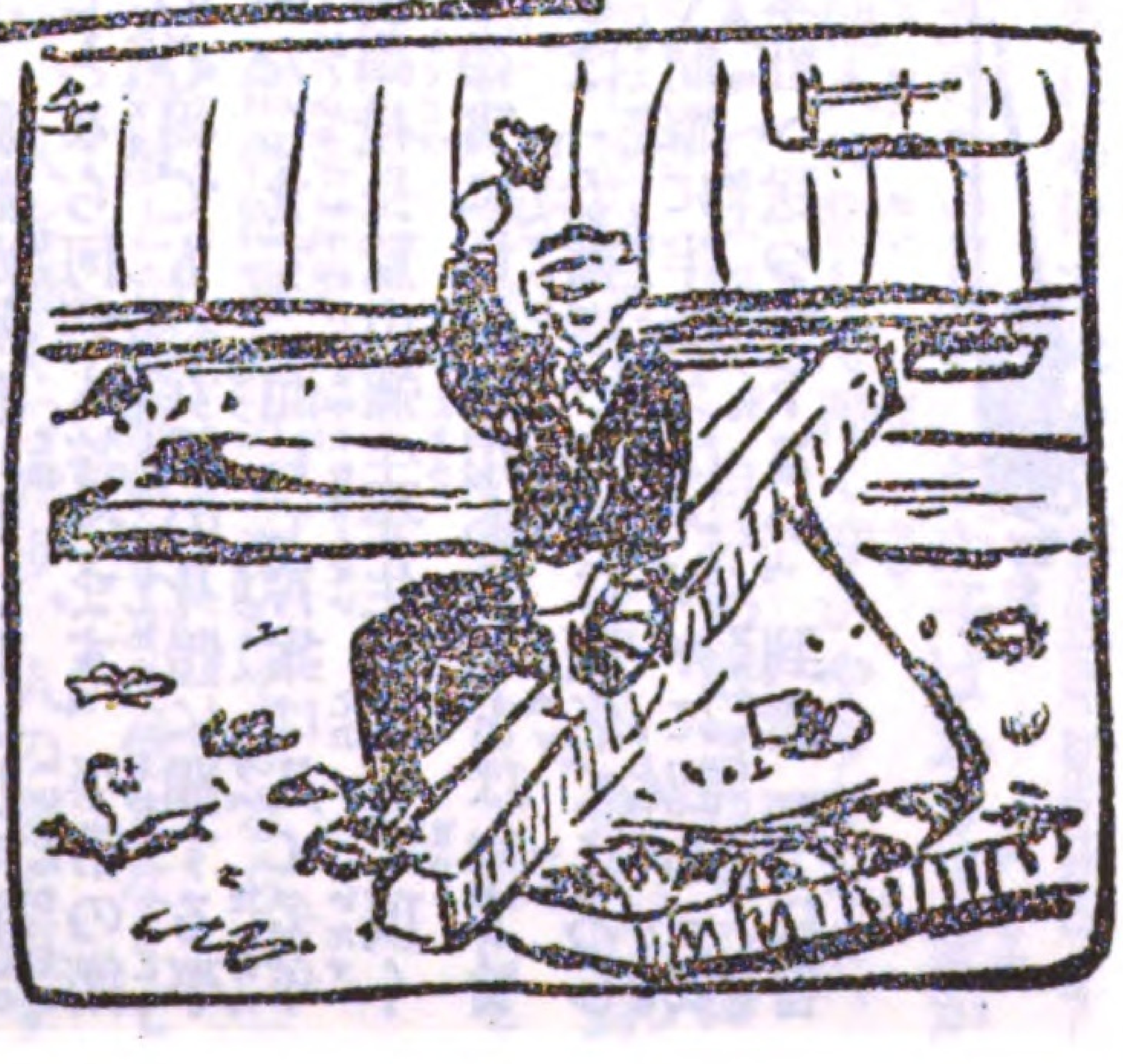
(5)菜市（五等）
牛込區高田町早稲田農園横　岩谷綠子



1


2


3


4


5

お伽噺

巖谷小波先生選



△規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據ろ。

三等

○銀の笛

備後神邊　井上年子

花ちゃんは可哀そうな孤兒です。三歳の時お父様に死別れ、七歳の時またお母様に死れて、只一人になつたのです。それに親類に惡い人達があつて、家や田地やお金を皆で掠てしまひ、そして花ちゃんは意地の惡いお叔母さんの所へ引取られて居るのです。それは〳〵毎日々々學校へも行かずに、御飯の支度や、お掃除やお使ひや、皆一人て、もう一寸の間も無い位働くのです。そして毎晩宅から四五町もある麓の井戸へ桶をかついて水を汲みに行きます。その度にあゝお父さんやお母さんが生存て居られたらと、思出しては泣いて居りました。

花ちゃんが九歳になつた年の春でした、村の花井の崎と云ふ所に大層ある櫻が眞盛て、大勢の人が毎日々々お辨當を持つてお花見に行くのです。花ちゃんも叔母さんに賴んてお暇を貰つて見に行きました。まあ美麗なことゝ云つたら、恰度京の縮緬をのべたやうて、何百本と云ふ櫻の木が枝を交へて、花又花と重り重つて咲いて居ります。皆は其下て、御馳走を開いて喰べたり唄つたり騷いで居ります。それに花ちゃんはお辨當も無く、お友達も無く、穢い着物を着て獨り淋く花を眺めて居りました。頓て日暮になりますと皆は重箱や瓢簞をさげて、歌など唄つて歸つてしまひました。さしも賑かであつた櫻畑も寂寞して、花ちゃんが一人になりました。永く居つてはまた叔母さんに叱られるから歸うと思ふて歩き出しましたが、餘り美麗な花だから一枝折つて歸ろうと思つて、櫻の枝に手を掛けますと花片がはら〳〵と散りました。すると不思議には、其花片が皆蝶々に成つて、赤い羽根をひろげてヒラヒラ舞ひ乍ら花ちゃんのぐるりを取卷きました。そして蝶々の云ふには「花ちゃん貴孃は不幸だと思つて悲んてばつかり居らつしやつては不可ません。是れからは私等が皆貴孃のお侍女に成つて、乾度幸福に守つて

上げますから安心なさいよ。さあ私等の行く方へついてお出、宜い所へつれて行つてあげますから」と云ひますから花ちやんは大層喜んで大勢の蝶々について行きました。山又山を越えてずーつと奥へ行きましたら、まあ大きな綺麗な恰度白雪を積んだやうなお城へ着きました。このお城を守る大將は太郎さんと云つて、親切な優しい強い男兒です。花ちやんは蝶々と共に案内につれられて奥の間へ通りました。頓て太郎さんは大勢の猿や、鹿や、兎や種種の家來共を從へて、出て來ました。そして花ちやんの身の上を聞いて、大層憐んで思はず貰ひ泣をしましたが、ねが親切な太郎さんのことですから「宜しい僕が屹度元のやうにして上げるから安心してお出なさい」と段々と慰めて呉



れて、そして種々の御馳走を出して賑やかな宴を開きました。猿が音樂をやる、蝶々が舞ふ、兎が餅搗きを踊つたり皆とり／＼に面白い歌等唄つて、毎日遊んで居りました。

ある日太郎さんは少さい銀の笛を持つて來て、花ちやんに云ひますには「花ちやん貴孃も何日まで茲に居らつしやつても駄目ですから一度元の村へお歸んなさいそして僕が此の笛を上げるから貴孃の元の屋敷で一度吹いて御らん、屹度元のやうな立派な家が出來ます」と云つて其の銀の笛を呉れましたから、花ちやんは大層喜んで、宜く太郎さんに御禮を云つて、多くの蝶々をつれて元の村へ歸りました。

早や秋の暮れ方てしたから木の葉は皆散つてしまつて

種々の秋草も既に半分から枯れて居ります。荒に荒て虫の聲さへ途絶え勝の哀な野屋敷と成つて居るのです
花ちやんは悲しさを堪えて、太郎さんから貰つた銀の笛をピユーツと一度吹きますと、不思議や、見る見る大きな家や土藏が澤山出來ました。
花ちやんは大層喜びました。
そして蝶々は皆前の枯木へ止つて、其まゝ永久も〳〵散らぬ櫻の花と成りました。

（評）あはれに美しく、嬉しく、而も面白し、惜らくは、文句の甚だ練れざる事な。

四等　○狐塚

播磨　翠嵐女

何處も同じ山間僻地の習とて、一寸隣村に行かうとしても雜作な山越になる、山路通ればつい路の一里もある、豆腐一つ買ふにも五十町も行かねばならぬ、大病人が出來てそれ醫者ぢや藥ぢやと騷いでも三里も行かねば醫者も藥舖もない、こんな時には生れたくないのは山間の僻地です。

しかし世が開けて來たお蔭で、やれ新道だの開通だのつて、こんな田舍にまでも有難い風が吹いて來た。

こゝ數年後から崖山をきり開いて、川づたひに新道をつけかけたが、今年の夏やう〳〵出來上つたのであつた工事中工夫が面白半分に狐の穴を青松葉て燻べて、とう〳〵一疋の親狐を打ち殺した。それからといふものは毎日毎晩其山で狐の氣味惡い泣き聲が聞えたのである。

そこで村の作兵衛爺が可愛さうに思つて、其死骸を新道から西に曲つた山添の燒ケ崎に埋めてやつて、捨石て形ばかりの塚を建てゝやつた、それから狐の泣聲もやんだのである。爺は其日亡靈を弔ふために、油上げ一枚と、賽錢一厘とを供へておいて歸つた、其翌日田に行つての歸るさ、そこを通つて見ると不思議や一厘の錢が二枚になつてをる、爺は別に何の疑もなく、誰かゞ參つてやつたのだと思つて、其日は其儘歸つて來ました、又其あけの日そこを通つて見ますと、又前に倍してゐました、そこで正直者の作兵衛爺も不思議でならない、こりやまあどうしたわけかと思つて、不思議に思ひながら歸つて來ました、ところが其日の夕方用事をすまして歸りがけに又そこを見ますと、又前に倍してゐます、爺は不思議でたまらない、こりやなんでも畜生にも報恩の心があつて、おれにかうしてくれてをるのだらうと思つて、そのあけの日は思ひきつて

物は試しと財布から二錢銅貨を出して墓の前においてきました、爺にすれば二錢がたいそうである。
そのあけの日どうかなくなつてゐなければよいにと思つて朝早くから起き出てゝ行つて見ますと、こはいかに、二錢銅貨が二枚になつてをる、そこで爺やも始めて合點し獨りほく／＼喜んでゐました。
もうかうなれば何も疑ふことは要らぬ、と思ひましたからその翌日人に知れない樣にこつそりと、ありだけあつめて五十三錢五厘を供へておきましたが又倍になつてゐました、爺は大さう喜びまして、それを資本にして毎日倍額にして貰つてゐました、かういふあんばいにして作兵衛爺さんは、とう／＼人知れず此村界隈の大金持になりました。
ところが隱すより顯るゝはなしとかて、いつの間にか作兵衛さんは、よく狐塚へ參つてゐたから、何でも狐塚に寶があるのに相違ない、といつて多勢の人が出かけましたが、もとより何のこともないのでつい／＼話は立ち消えの姿となつてをりました。
ところがこゝに同村に、八平爺といつて、極く意地の惡い心のゆがんだ惡だれ親父がありました。
どうかして作兵衛爺の樣に、うまい汁にありつきたいものぢやと思つて、なんでも作兵衛爺は狐塚に願をかけて寶をもらつたにちがひないと思つて、或夜狐塚の前にいつて、よく／＼願をかけ、狐の好物と思つて、狐ずしに賽錢を供へて歸つて來ました、其翌日行つて見るとこはいかにお金が殖えてをる、爺は飛びたつばかりに喜んで、こりやしめたと思つて、其晩十錢銀貨を供へておいて、あくる日人知れずにいつて見ると二枚になつてをる、こりやいよ／＼しめたと思つて慾ばり爺のことでありましたから、其次の日は一度にありだけの金を集めて持つて行きましたが、又又其倍となつてゐました、爺はます／＼悅に入りました、こんどは家財道具のこらず賣りとばしてその晩は墓のほとりに證をしてゐました、そのあけの朝早く行つて見ますとこはいかに、お金は一文もありません、八平爺はびつくり仰天うんといつて倒れましたので其子息が飛んで行つて、いろ／＼手當を施しましたが、とう／＼歸らぬ人となりました。
そこでその子息は、大聲を擧げて泣きました「あゝ、とう／＼狐の野郎奴に仇をうたれたか」と、よく見れば其人は此の狐を殺した工夫でありました、めでたし。

（評）大分馴れた書方です。

五等

○親ごゝろ

芝區三田四國町二ノ一三　池田壽女

花ちゃんは其は〳〵可愛らしい無邪氣なお子ですが、只つた一人のお子故お父さまやお母さまが餘りお愛しなさひますのでどちらかと申とあんまりお孝行の方ては、御座いませんてした。

花ちゃんの御家の「こま」と云ふ毛並の美しい猫が三匹の子を生みました、其の愛らしい事と云つたら、……花ちゃんは可愛くて〳〵毎日いゝお友達でしたが其内の二匹をお友だちの太郎さん處と美ちやんのお家とへ上げる事になりました、花ちやんはお別れするのが悲しくて、せめては美しい首わてもこしらへてお餞別にしようと思ひまして今しも四疊半のお部屋に美しい小切の箱を持ち出しました、心持のよい秋の御日樣は疊の上まで流れて氣も清々とお庭には楓が眞赤です、其にもまして花ちやんはもえ立つ樣な緋ぢりめんをもみぢの樣なお手々に針を運れました



無心　下野　入江靜子

すると今までおゑん側に日向ぼつこをして居りました「こま」は、三匹の子におちゝをのませながらお話しを始めました「こま」やはやさしい聲で、

「其ぢや仲ちやんに末ちやんは皆さんの云ふ事をよく聞くのですよ、あんまり御飯をいたゞきすぎて病氣になるといけないから氣をおつけよ、もしきいきいの惡い時は御主人がきいろいお藥をお口のまわりに付けて下さるから少し苦がくてもなめるのですよまたゝびと云つて、私たちの病氣にはすぐなほるのだよねわかつたかい」それから昨日もおはなししたやうにおねずを取るのですよ、もしたくさんとつたときは御近處のお友達に分けてお上げよ、そうしとくと皆んな仲よく遊んで下さるから、決してけんかなどしちやいけないよいゝかい」

と其は〳〵心切に、親と云ふものはあんなにまで子が可愛いものでしよか、ふかい〳〵お母さんの親ごゝろに二匹の子猫は涙をためながら、

「姉ちゃんはいゝな始中お母さんの側に居られるから」と羨しそうに云ふのです。

親ねこは可愛くてたまらない様にほゝずりをしてなめながら、

「時々はお坊ちゃんやお孃ちゃんにをねがいして連れて來ていたゞくから、其時はたくさんお母さんを大切にしておくれ」と申ますと子猫は「あい〳〵」とお返事をしてそして悲しい様な、心細い様な、顔をしてお母さんに抱きつきました。

花ちゃんはさつきからお話しを聞いて居りまして大變感心いたしまして、何んとなくはなすのが罪ふかい様ていつそ皆んなお家へ置きたいと思ひましたが、太郎さんや、美ちゃんにもう御約束をしてしまつたものですから、其れては日曜には必と連れて來ていたゞく様にするからと、猫の親子に申ますと、皆んな喜んだ事それは〳〵嬉しそうに、「にやん〳〵」とお禮申ました

花ちゃんはそれから丸て生れかわつた様に、お父さまや、お母さまをも大切になさいましたので御兩親はお驚きなさる位お喜びになりました。

そして日曜毎に、太郎さんや、美ちゃんが、大きくなつた、子猫を連れて入らつしやいますと「てま」ちゃんはお嫁にいつた娘が返つて來た様に、大喜びていろいろお話しやら遊んだりして一日樂しく暮しますとさ、めでたし〳〵。

（評）可愛らしいお話てはありませんか。

○グツ太郎

京都市　小笠原あき子

或日、太郎の學校に運動會が御座いましたが、足弱の太郎は、走れないから競走は嫌ひだと申して行かうとも致ませんでしたが、色々と母様に吩付て漸々家を出ました、思案仕て歩んて居る中に、道を間違へて平常遊びに來る、鎮守の森の、お池端へ出ました。すると、其池の中島に、一匹の大きな龜が、甲を干て居ましたのを見て、太郎は思はず、「ヤア大きな龜だな!」と云ました、龜は其聲を聞き付て、太郎の方へ泳いて參りましたが「ヤー太郎さん、お辨當など持て何所へお越に成んです?」と尋ねました、太郎は「僕は學校の運動會へ行くんだが、僕は走れないから運動會は嫌ひだと思つて歩て居る中に、知らず〳〵此所へ來たんだよ」と答へますと「アヽ左様てすか、太郎さんは眞實にお氣の毒です、私も生れ付が足弱爲に、兎に迄侮

られたり、唱歌にまで謠はれたり仕て口惜事許りてす太郎さん等は是から兵隊に成つてお國を護らねば成ませんのに、今から走れない樣では困ります、貴方は平時、パンや麩を投げて下さるから、其お禮に良物を差し上げますから一寸お待ちなさい」と云ひ殘して龜は池へ沈んで行きましたが、暫くすると、美しい、一足の靴を持つて參りました「太郎さん、大變お待せ仕ました、是は、私が餘に走れないのを殘念に思つて、此所のお宮の神樣にお願ひ申して製つて頂いた走靴です、是を穿けば自働車の樣にでも、滊車の樣にでも走れます、サ、是を差上ますから早く學校へお越しなさい」と云ひ乍ら龜は親切に走靴を太郎にはかせました、「サ、穿けました、夫では一度試しに走つて御覧」と勸めますから、太郎は「デハ龜さん、僕一寸、伯父さんの村まで驅つて見るよ」と云つて、太郎は生れてから初めて驅出ましたが、其速い事と云つたら、暴風の樣で、太郎の耳にはブーッと風を切る音がして目には草や、砂が千條の糸を曳た樣に見ゆる計で、直に、伯父樣の村へ着きました、太郎は非常に喜びまして、早



れんこよ　下谷　神崎雪子

く龜にお禮を仕樣と急いでお池まで來ましたがモー龜は居ません、仕方が無いから茫然と立つて居ると學校の方では樂隊や花火の音が致しますので、太郎は先刻の龜の言葉を思ひ出して、急いで、學校へ參りました先生は太郎が參りましたので大變嬉びました、「オ、太郎さん良く來ました是から撰手競走が始まりますから御覧なさい」と太郎の走れないのを同情て慰めましたが太郎は「先生、萬望、私も其の駈つこに出演て下さい」と云ましたので先生も非常に驚きましたが、太郎が色々と、熱心に願ひますから、先生は、其元氣に感じて、競走に加はる事を許しました運動會の中で一番晴の勝敗!。學校中の健脚の生徒等が、日頃から野や山を駈け廻つて、鍛え上ました小さい乍にも、丈夫な脚力を、此の競走に試めしまして、若し一番早く走つた時には、一年間、學校の撰手と成るので御座いますから、走れ相なものは皆我もわれもと、小さな脚を踏しめ、軟かい腕に、力を入れて、出發點に列びました中に、太郎も交つて居ますのを見た生徒等は「ヤア可笑いな、グヅ太郎が出演よ、自分で走れると思つて

居るのか知ら、あれは、グヅ太郎の上に、馬鹿太郎だ！と笑ひましたが、太郎は、平氣で、身構もせて、ツクチンと立つて居ました、やがて用意！の聲がかゝりまして、合圖の一發がドーンと鳴りますと、秋の木の葉が、嵐に散る樣に、バラ〳〵と皆が、駈け出しましたけれども太郎は、矢張グヅ太郎のまゝで、暫くヨボヨボと歩んで居ましたが、ヤツと聲をかけますや、こは如何に、絃を離れた矢の樣に、小砂利を蹴立て駈け出しました。

見物人が一同にアレ〳〵と驚いて居る中に、決勝の合圖が鳴りまして、太郎が一番の月桂冠を得ました。

其の後、グヅ太郎は常も學校の撰手で有りました、太郎は日頃のグヅに似ないて、競走ごとに、靴穿のまま勇しい、愛らしい、姿を、運動場に現はしました。

○珊瑚の樹

兵庫縣　森非せい子

こゝに波ちやんと云ふ身も心も美しい女の子がありました。ある日西宮の濱へ玉虫を探しに行きました。白い砂が一面に敷きつまつて海は遠淺なり沖には白帆が見えますし、それは〳〵美い砂濱で御座います。「玉虫出て來い。お乳母つれて來い〳〵」一鈴のやうな聲で歌ひながら可愛手てほつて居ますと、虫ではなうてほんとうの玉が出て參りました。波ちやんはびつくりして其玉をじつと眺めましたが、見れば見るほど美しい何とも例へようのないよい玉でご座います。まアどうしてこんな玉が出たのであらう？と、不思議に思ひましたが、こんな美しい玉を人も知らずに捨て置くのは惜しいから持つて歸つて父母と相談しようと漸く思案をして玉を自分の袂へ入れすた〳〵と小松のそばまで參りました。すると後から「もしもし」と呼ぶ聲が致します。「ハイ」と云ふてふり向くと、いつの間にか薄衣をふうはりと被つた、美しい天女が立つて居ます。

「あなたはもしや私の玉をお拾ひになりませんてしたか。」

波ちやんは直ぐに袂から先きの玉を出して「ハイ拾ひました、これてしよう。」

「オヽ、これにちがひありません」天女はにつこり笑ふて、「それてはお禮に此の實をあげましよう」、と懐から二ツの赤い實を出して、「これは珊瑚の實てこれをまいておくとよい珊瑚の木が出來ます。けども其家にもし惡人があつたら決して木は生えずに、却つて實は

なくなつて仕舞ますから大切にお育てなさい。」と云ふて、波ちやんに渡しました。そして天女はひら〱とどこへか行つて仕舞ました。

波ちやんは喜んで家に歸り父母にこの事を申しますと父母も不思議に思ひましたが兎に角綺麗な砂を敷いてその實をまきました。すると不思議にも美しい珊瑚の芽が出ました。そして波ちやんの內は皆善人ばかりでしたから、珊瑚の木はだん〱大きくなつて、仕舞には黃金の花が一ぱい咲いたと云ふ事であります。めでたし〱。

○白菊御殿

宮城縣　千葉　楓子

或る田舍に秋子さんと云ふそれはそれは優い少女が有りました秋子さんのお家は非常に貧しうご座いましたが秋子さんは大變菊の花を愛しまして毎日々々虫を取つたり水をやつたりして育てゝ居り升たが秋も半ば近く成りましたら香のいゝ白菊が大層美麗に咲き初め升たので秋子さんは朝から晩まで花ばかりながめては喜んで居り升た或日の事外へ立派



さる芝居　芝　伊藤敏子

な男が妙にニヤ〱笑つて立つてますので何となく恐ろしく成りましたから阿父様に話し升した阿父様は門口に行つて其人としばらく話してゐましたが、秋子やお前は菊に水をやれと云はれたので秋子さんはうれしがつて水を呉れてますと家では阿父さんと母様と今の男とが何かひそ〱相談を始めました一體阿父様と母様は極々悪い人なのですから秋子さんは又悪い事の相談ては有るまいかと心配して居りました其中先の男は「それては明日は必ず」と妙な挨拶を殘して立ち去りましたが秋子さんに取つては此の上もない不幸な事が湧たのです其晚常時になく阿父様も母様も秋子秋子と心切にするので何だか變だと思つてますと此處へ御出て御前に話す事が有ると云ふのです怖る〱すはると實はお前も知つての通り貧しくて明日食う物にも困るのだ故お前を一人前の人間に仕立てる事が出來ない幸ひお前をいゝ處へつれて行つて育てたいと云ふ伯父様が有る故明日は其人と一緒に行つて呉れと云ひ出した之を聞いた秋子さんは驚く

まい事か泣にも涙が出ません阿父樣は又モシお前が行くなら五年目には必ず向ひに行くそれにいくら親孝行に成るかしれないぞサア何とか返事をしろとせめ立てます秋子さんはア丶仕方がない家をはなれるのは悲しいが行かなければ又どんな目に會うかわからないそれに行けば孝行になると云ふから一思に行つて見樣かと健氣にも決心致しましてそれでは參りますと申しましたら二親は大喜び其夜は床に付き升たがさて秋子さんは今更の樣に悲しさがこみ上げて如何しても眠れません其中にウト／＼すると何とも云へぬよい菊の香がして秋子樣／＼と呼ぶ者が有る故フト目をさますと白菊の花がニコ／＼して立つてますやがて優しい聲で秋子樣其樣に御心配なさるな貴孃が明日御立の時どの花か一つ取つて行つて下さいそうしてあなたに大事の出來た時花瓣を三枚取つて撒けば御體に變りは有りません必ずおわすれ遊ばすな。云ふかと思ふと消えてなくなりました翌日は夢で教えられた通り大きい花を一つ取つて袂に入れ外の花にも別を告げて昨日の男の來るのを待つてますと間もなくお金澤山持つて來て阿父樣に渡しサア御出でと見返り勝の秋子さんを無理につれてトウ／＼村をはなれましたそれから船に乘つたり汽車に乘つたりしてヤウ／＼一月ばかりで或國につきましたがどの人を見ても洋服がけて髮の赤い目のみどり色の知らぬ人ばかり故アア私は遠い／＼外國とやらに來たのかと驚きましたが何に五年位は何でも無いと勇氣を出して命令通り羊の番をおこたりなくして居り今日も夕方頃淋しく歌つてますとうはさに聞て居る此國の王子がしほ／＼として牧場の方へ來ましたこの王子は此頃父上の王樣に死なれ惡い臣に寶を取られて城から追出されたのです秋子さんは元より優しいお子です故如何かして其寶を取り返してやり度いと思ひましたフト心付いたのは菊の花瓣ですそこで王子に其事を申しますと王子は大變喜びました早速牧場は王子に賴み其夜ひそかにお城へ忍びこみますと折わるく番人が目をさましたからこゝだと花瓣を三枚とつて撒きますと餘り香がよいので皆醉ふて眠て仕まひました秋子さんはメたつと尙ほずん／＼奥に行きトウ／＼寶を取り返しました王子の喜びはたとえ樣が有りません惡者の臣は寶をとられたので外の國へ逃げて行きました王子は秋子さんの恩に感じてお城の隣へ白菊御殿といふ立派な御殿を立ててその女皇とし御兄弟になつていつまても仲よく暮しましたとさ。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等

○ぬきがき

本所區龜澤町一丁目卅一番地秋山伊助方　秋山欣子

○不圖目覺めて、枕許なる時計を仰げば早四時、手を伸して圓窓の簾くり、寢ながら展望を恣にす。目もはるの筑波しげ山は左手に、紗もて包みし碧玉の如、足下に起伏する加波我國の連山紫に霞みて、霞湖まで弓なりに横はる、常陸國原、白霧深うこめ、神の世は未だ去りもやらず。いづくともなく聞ゆる鷄聲かすか、あゝ好景、獨り眺むるも心なき業と、美子樣の夢をたゝき、共に築山の亭にのぼる。水天彷彿たる霞湖の沖合、夢と靜けき空に、紅一抹のチャームなる光動きて、冷風颯々冷露團々、顧れば櫛形の月は御堀の松の頂に淡く落ちかゝれり。何鳥にやあらむ、月を掠めて斜に波上に浮びぬ。と見る、藍見崎のあたり、鉦の音波に響いて、鳥陰より白帆小さき舟悠々と現れしを、忽に紅龍躍りぬ。眩ゆき金色の光、ツツーと十里の浪を射て、萬物は蘇りぬ。白き舟、白き鳥、皆餘光をうけて美しう鏡の如き浪の上をすべり行く。

岩をうつ、浪の澁の末晴れて、美しや筑波根の倒影寫す霞が浦の春の曙。

ふとけたゝましき呼聲にふりむけば、下女は赤き顔して、御飯で御座い升、先刻から三度程御呼申しました。午前は此所にて裁縫にくらし．午後磯家へゆき、夕餉濟みて後、「自然と人生」をよむ。（土浦町叔父宅にて四月三日）

○小雨のあと、遠音に聞ゆる皷のよさ、續いて品よき聲、花を見捨つる雁の、夫は越路我はまた東へ返る名殘かなと、餘韻長う、誰が雅なる調、と庭に出てつ。苔の庭、露冷やかに、松の匂迫る許、薄き日は、れんげやうのうなじを越えて、ほてろびかけし海棠の頰に照るなり。小つゞみは絶えぬ。

咲きがての花を哀れと見ましけむ
置く白露に夕日幽しき

たそがれ頃、畑にて摘み來しすゞな、すゞしろなど取りまぜ、田舍料理拵へ、香丸町なる大伯父上招ぐ。春の夜を、美酒酌み交して、ざんざめき歸らせられしは十時すぐる頃なりき。其折「近日遊びに來よ、文晁の畫を手に入れたれば」と仰せらる。（故郷にて、四月六日）

○妹ども引つれて御陣屋なる春子樣訪ふ。「春の日をいかでたれてめらるゝや」と例の主義は忽出でゝ、懋瀨遊行と決す。

相率て畔道傳ひに行きぬ。繚亂の春の野に、嫁菜つまぐりつゝ、鳥の影を追ひ、あるかなきかのかぎろひの裡にあくがれ行きぬ。若草の露をふみ、雲に入る樣な思しつ、日は朧なり、上流には釣する人影も見えず、獨り見る蛇籠の小石、水にせかれて白う泡立つが可笑しと妹はいひぬ。

鈴が淵の早瀨に鮎逐ふ子のいそがしげなるが見えつ。見ゆる浪は淡霞打ちけぶりて、別所が原、天王森も、緑美しう春のけはひ眞盛なりき。

すみれたんぽゝ春菊や
かざしに召せよれんげ草

かすかながらも張あるよき聲、母思ふ優しの子が、朝月夜つゆふみて出てけむと、語り合ふ時、小さき妹の「姉樣、あれ御覧」といふ指ゝさき、麥生より湧出し如き月波根に、舞雲ふはりと綸にも似たり。

倦じぬ眺に强ひて別れしは、夕月の川柳にほのめき初めし頃なりき。

摘みきし菫のゆかりと白、塵箱のかたへの日當りに植ゑぬ。やがて春の世を飾れよとこそ。（故郷にて、四月二日）

（評）水埜の君が筆にもつぼすみれ、ゆかしきふしぞかつこもりたる。

秀逸

○銀行ゆき

京都　濱部風窓女

今日は月末なので、私は母の代理と云ふので、朝八時過ぎ銀行へ始めて行く事に成りましたが、馴れない私は何だか心配でたまりません、中立賣通りへ出ると、以前の小學校の先生と妹のお友達に遇ひました。車が勢よく走つて銀行に近くとゝもに、私の胸の動悸は增して行く樣な氣持がします。

未だ始まる迄には、十分程早いので、私は待合の腰掛の隅の方へソッと腰懸けましたが、早や待つてる人は七八人も居られます、皆男の方許りて、唯一人五十位なお品の好い奥樣が北の端に見えました。正面を觀ると、金網が一面に張つて有りまして、行員が七八人机に寄懸つて、帳面を見てる人や紙切を持つて歩いてる人が、多忙らしそうです。私は何だか動物園の猿の事が思はれて思はず微笑しましたが、偶然南の端の机の人を見ますと、眼鏡を懸けた若い方の人が私の兄にソックリです。

戸外では續々腕車が停る音がして、銀行の扉は多忙がしそうに開いたり閉つたりして、其の度每に冷い風が這入つて來ます、偶然振返つて戸口を觀ると、知らぬ間に、一つであつた自轉車が三つに成つて、主人を待

つてる樣な風に見えます。上を見上げると全國取引銀行の地名と行名が木札に書かれ、幾十と無く下つて讀むとは無しに見ると、私の頭腦には學校で習つた地理の記臆がそれからそれと出て來ます。不意に頭の上でチーンと時計が鳴つたので見上げると、丁度八時半、腰掛けて居た人は俄かに立つて受付口に集まるので、私も後からついていつて手形を出すと、四拾五番とした木札を渡されまして、「暫らくお待ち下さい」と丁寧に謂つて下さる。私は再び元の位置に腰掛けますと、

「松村さん」と行員の聲がしました、甚麽人が行かれるかと見て居ますと、十二三位の小僧さん。

「お幾何」と行員が聞くと、

「三百圓です」と答へる。渡す人は、幾度も讀直して窓へ出すと、小僧さんは五圓紙幣の一束を風呂敷に包んで、無造作らしく出て行かれる。私は心の裡で「マー彼麽年幼さい人が……」と自分が心配した事が耻かしく成りました。

六番目に奧樣が濟むと、

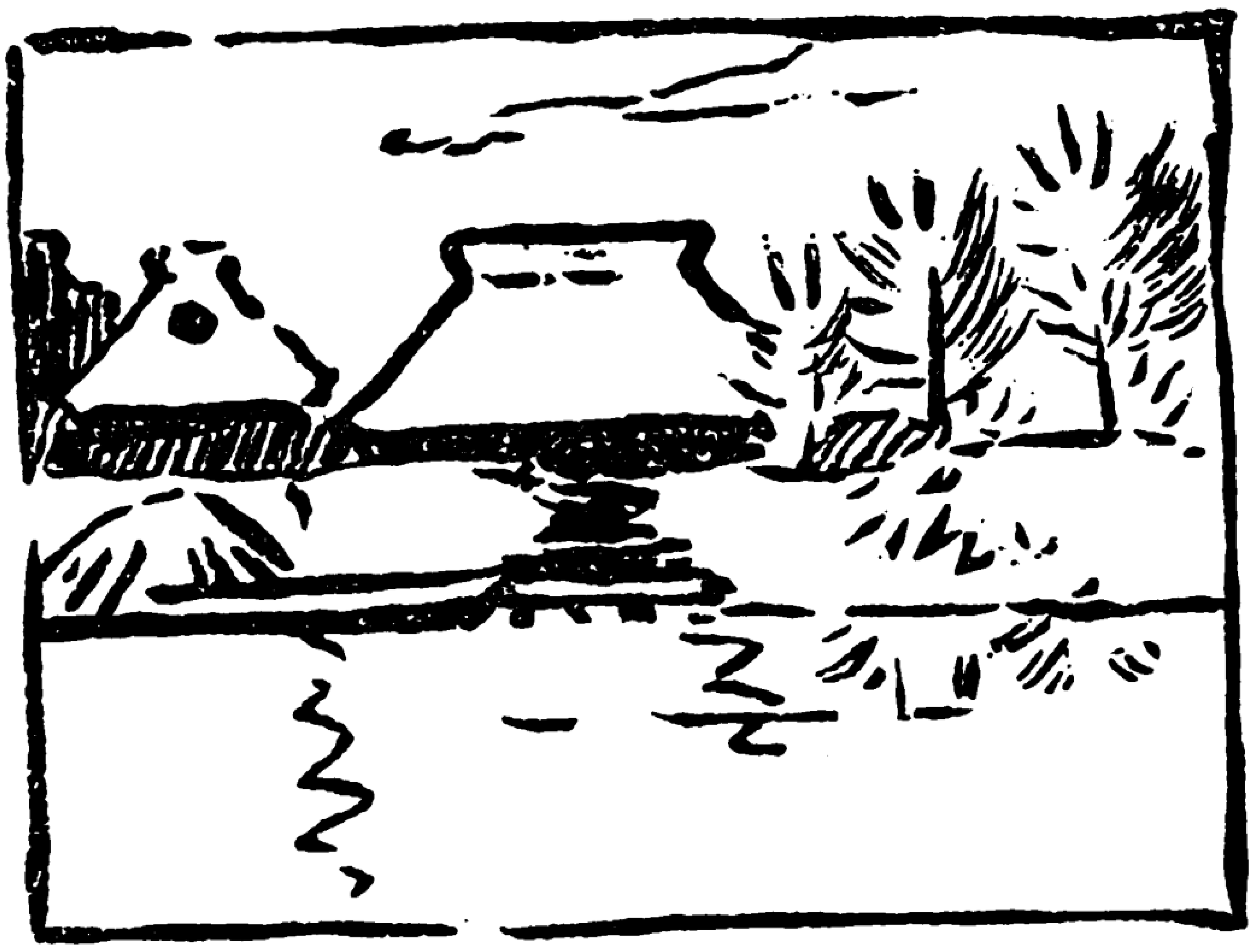
「○○さん」と私の名を呼ばれる、私は若しか間違ふと耻かしい思をしなければ無らないので、躊躇して居ますと、再び「○○さん」「ハイ」と出て行くと、

「お幾何」と聞かれるので、小さい聲で私は、

「○○圓」と答へると、幾度も數へた紙幣が窓へ出ます、受取つた私は、紙入に入れて、一寸會釋をして行きかけると、「貴女札を……」と云はれる。私は慌忙て出しましたが、人が見てる樣な氣がして、たゞもう無宙で表へ出ましたが、思はずホッと吐息が出ました。

（評）銀行の有樣よく寫されたり。好個の寫生文。

川岸　麴町　前田たみ子



○日曜日

小石川　奈美木翠子

廿七日。日曜日。晴。

昨夜から冷たい風が吹いて、急に冬が來たやう。

缺けた月が忘れた樣に高い空に殘つて、寂しく冷たそうに傾いてゐる。

踏み場もない程落ち散つた栗の葉を掃き寄せると、その後へ〳〵とばら〳〵散つてイクラ掃いてもきりがない。好い加減にしてお座敷に這入ると、母の叱る聲がするので、再び縁に出て見ると、勝郎が掃き寄せた落葉に火を點けてゐる。二三度お小言

を頂いたが却々止めそうにもしない、終々父のお聲が掛つたので此寒いのに御飯も喰べず外へ行つて仕舞た。如何して勝郎はあんなに謂ふ事も聽かない腕白になつたのだらう。

朝飯からお登迄何事もなく濟んだ。只冷たい風の空を百舌鳥が頻りにアチコチで烈しく啼いた計り。

晝御飯が濟んで縁に出ると、太陽は暖いが、風は未だ竭まず、庭はもう一ぱい落葉で埋つてゐる。

一時頃風が竭むと、靜枝さんが稲荷山のだと云つて、茸を澤山持つて來られた。菊には好い日であるが、風の故か、人はそんなに出ないとお仰る。一時間計り女子文壇へ出すのだといふ靜枝さんの俳句について種々お話をして、終ひに自分のをだして較べて見ると、全て句になつてゐない、靜枝さんは佳い句だとお仰るけれど、お世辭だから裂いて仕舞た。靜枝さんは呆れてゐらつしやる。何にも御馳走がないので柿でもと思つて、もいてゐると、何時來たのか直ぐ背後で『アラーツ姉さんが柿を』其聲の餘り大いので駭いたの何のつて、其容子が可笑かつたのでせう、靜枝さんは縁端でお腹を抱へて笑つてゐらつしやる。私は餘りだから『マア勝郎さん！い丶わ、あげないから』つて云ふと、『其麼物いらないや』つて木戸をピッシャリ、外へ出て行つた、マア何て兒てせう、靜枝さんと顔見合せて、私は情なく思つた。

（評）一わたり聞えたり。

○妾が日記の一節

茨城縣　仲田百合子

十一月十五日。土曜。曇。

お父さんは、御用を帶び、一番列車で上京する。妹の土産の注文は人形、さて、弟や妾には何を求めておかへりなさるであらうか。

學校て、英語のリーデングが、よかつたので、先生にほめられて、われながらうれしかつた。

うちへ歸つて見たら、姉さんはおかへりなされたといふこと、あゝ殘念。

夕方、菊の手入や、お庭の掃除をして、いそがしかつた、掃除したお庭て、妹がまりつきをしたと見えて、まりのあとが點々。

夜になつてから、水戸の梅子樣のところから葉書が來た。

弟のくつたびのあみかけといたのを、あみをへたのが來十時半。

妹は、今頃、定めて、人形の夢でも見てをるのであらう。

○夜日記

下谷　蕉雨子

一日。端居して燈火によりくる虫を捕ふる折しも、軒ばの葡萄の葉の、さと音して、涼しき風灯を消さんば

かりに吹き來りぬ。吹きてばら〳〵と木葉を打つ聲して、夕立の雲忽ち拭はれて、雨やみ、路は輝き渡りぬ、澄みゆくものは月と虫の音。

二日。月明にして虫の音淸し。燈火點じ談などすれば、夜靜にして、人訪ひ來らず、とひくるものは只火取虫のみ。

三日。雲月を蔽ひ、雨地に灑ぎ、愛宕の谷に梟叫び、庭の梢に風騷ぎて、何となく物淋しき夜の景色なり。

四日。月終夜枕に音づれ、氣晴晴して夢に入りがたし。

五日。灯つけざる前は、室は遠雷の如き蚊の聲にて充されたりしが、後には逃げ行きぬ、夜更くるまゝに、西瓜を四つに切りたる如き十日の月影、葡萄の蔓棚を壘に染め、蚊帳の内にさしこみ來る、いと興あり。

六日。一穗を便りとして歷史をよむ、夜はいたく更けたれども、あたり靜かに心すみ行く儘、いざや今暫しとよみ行けば、弘安の役のくだりなり。讀みをへて後われは獨り案を打て快と叫ぶこと三度。あゝ當時、時宗の勇斷なかりせば我國いかなりしならむ、はた千早振神風の吹き拂はずばなど感慨に沈むをりしも、はらはらと音するは雨にやと窓あけて見れば、既に月落て夜はくらく、山おろしの風のいと烈しう、庭の木の葉を吹きまく音すごし。前の海ははやあれぬらん、磯打波のおとたかくして、矢叫びの聲かとまがふも折からにや。仰げば滿天の星風に亂れて、海におつる二三點。

（評）夜の日記としては少しく物足らぬ心地す。

散歩　千葉縣　宮城よし子



○日記の一節

岡山縣　廣江壽子

西の空は閃々として、今しも入らんとしてゐる太陽に、染られた濃い紫色の細長い雲が、美い金色で緣取た樣になつてゐたが、一分一秒薄靄に罩められた時、私は此の大きい自然の景色にうたれて、恍惚としてたが、又自然に頭には大きな空想が泉の樣に湧いて來た。ゴーンと長い餘韻を引いて、諸行無常の鐘が、此處彼處の農夫等に歸りを知らすと、もうあたりは暗うなつて、萩が野も、松原山も、竹藪も、闇に包まれて仕舞た。ふと氣が付いたので、路を返してポツ〳〵歸て來ると、いつも絶間なう廻てゐる水車の音、その音をきいてふと胸に浮いたは、勞働の二字、妾の親しい友は

理想に憧れて、働きの手を休め、東の都へ行つた、名譽を羨て業を捨てた、吁親しい友よ、働け勞け、水車の樣に、そこにこそ神はあれ名譽はあれと、思はず知らず友を思ひ、亦妾自分も深かき感にうたれた。

（評）ゆかしき水車の響の一ふし。

○日記の一日　　福岡縣　石塚るい子

曇天。七時半起床、叔父樣はもうお役所に出られて居た。手の痛みは輕い樣だが、天氣の故か心地が勝れない。御飯をすましてからは、例の樣にお火鉢の番。叔母樣がお庭にでも出てお遊びと仰有つても、ハアといつた儘、出る心地もしない。折柄、太鼓の音と共にワーワーといふ小供の聲。何事か知らと心には思へど、それさへ病める身には振り返つて見たくもない。只々世の果敢なさをかこつ許り。二階では叔母樣が機を織られる音、お隣りでは米つく音、何れも忙しさうに聞える。あゝ私も達者であつたら……。斯くて短い日の早やかたむいて、叔父樣も歸られる、三人夕飯を了つた頃、お兄樣が被入つた、實に嬉しい、私はお兄樣と外へ出た、薄暗い田舍道、人の往來もとだえて淋しい許り、冷い風がサッサッと吹いて來る。お兄樣はつと立ち止ると、絹ハンカチを取り出して、私の咽喉に卷き、着て被居たインバネスをぬいて無理に着せ、嫌がるのに眼鏡をかけさせて、ヤアハイカラが出來たと、光のもれて居る家の前につれてきて、コリヤーいいとお笑ひなさる。そして其儘歸れと仰有る。戯れの樣だが、其中に夜風に吹かされて、此上私に風でもひかせまいとのみ情がありありとよまれて、思はず熱い涙がホロホロと、お情無にもされず、其儘宅に入れば、叔父樣叔母樣あきれた樣に見て居られたが、暫くするとお兄樣と三人ドッと手を打つての大笑ひ。それからお兄樣の快活な面白いお話しに、つい引き入れられて居ると、折しも柱時計が九時を報じた。お兄樣は奉公の御身、遲くなつてはと立たれる、門口まで見送ると、歸りがけの足をちよつと止めて、ホッ忘れて居た、ソラるいさんと私の好きなものをと、袂から二ッの林檎、私はもう溢るる悲しさにボンヤリ立つて居ると、早く宅へは入つてお休み、風ひくよと仰有るから、心配かけてはと名殘をしをし宅に入り、しばし話して後床に就いた、時は九時半。

○日記の一節　　徳島縣　紫濃子

二十日。日曜。天氣なれば來よと叔母樣の御傳言ありたれど、雨なれば行かず。母樣の袷縫ひ、夜は編物し、九時臥床。

二十一日。月曜。朝曇後晴。母樣に呼び起され寢過せしかと吃驚して飛起きしが、未だ暗きに胸なで下す。朝食澄まし、父樣はまだおよつて居られたけれど、御用聞けば、前田の稻刈せよと仰せられて、起き出られ、御膳あがらず其儘新屋に用あればと出られぬ。直ぐお

踊りかと待てど見えず。夕方お酒召された故か、御氣嫌よくお踊りになり、さえた口調て稲刈の早かりしを譽めて下さる。手は痛けれど嬉しい。勞れたればと夜業せず、九時臥床。

二十二日。火曜。晴。兄様も義姉様も歸りて、昨日迄の淋しさ何處へやら、兄様はお頼みの文壇のみなりしが、義姉様は女だけリボンと中細毛糸、非常に嬉しく御禮くりかへしくいふ。夜は彼地の話に思はず夜を深し、十一時臥床。

二十三日。水曜。朝雨後晴。新聞が來ると仕事が出來ずとは母様の小言なりしか、それかあらぬか今日て四日來ず。母様が止めしかと思ひ居たりしに、夕方今迄と殘りたる小供が、四枚一所に持ち來る。聞けば此小供は先日市より配人に來りしが、田舎の家とてよくわからず、延びしなりとて詫びぬ。かく知れて見ては、母様に對しやま敷心起し疑ひし罪の程恐ろしく、神様に謝した。

二十四日。土曜。晴。納屋にて姉様と二人、昨日取入れし稲こきす。義姉様は些もお口開かず沈み勝、私は何となく悲しい。母様はお部屋て煙草ふかしてゐられる様子。夜日記書きつつも涙がひとりで湧き出る。夜業せず。

二十五日。金曜。晴。今日も稲こき。義姉様は昨日に變りてさえた御様子。打ち見る私も嬉しく思ふ。夜業は柿むき。

二十六日。土曜。晴。今日背戸の畑の芋堀り。久しふ訪ひ參らせぬ操様よりの御手紙、嬉しくて幾度となく繰り返す。墨色美しい操様の御手紙見るにつけ、私も市に居たら、實の母さまさへ御存在なら、あゝあゝ思つて二階て泣いて居たら、宿直と思ひの兄様、後に立つてゝ「美喜又泣いてゐるのか、何も運だそんな氣の弱い事てどうする、さあ夕飯にせう」。兄様は私の心中すつかり讀んて居られる。然し眞の兄妹なればこそ、あゝ此一週は悲しみ勝て暮した、後の週からは喜び事ばかり書きたいもの、夜操様に御返事書き、十一時臥床。階下では義姉様が母様の肩打つ音、手に取る様、又しても私はないた。



豆腐屋

佐世保　いちじく女

◯日記抄

石狩　吉永豊子

十月十五日。晴。朝は四時二十分起く。今日は一里餘へだてる畑へ小豆打に行くとて揃つて出かけた。父母兄は一足先に。野

も山も紅葉て紅赤田畑は眞白。大霜は世界は我物の如く草木を困らしてゐる。自分等の吐く息は恰も煙草をすひ居る樣、見れば白たへの石狩山の頂より朝日は昇る。西にそびゆる増毛の山は、白き雪太陽に照らされてうす赤く見え得も云はれぬ眺め。あたりの景色を見渡すと、寒さも少しも感じなかつた。兄樣が寒い〳〵と手を吹きながら、側の豆がらに火を付けた。ゾロゾロと皆近よつて手をぬくめる、自分も共に手や足をぬくめる。父は今日の晴天を喜び、やがてノボッチの小豆を積し、ならべたむしろの上に投げる。秋の日の短かさ、晝飯もいつとなくすみ、淋しく聞ゆる野寺の鐘、日は西山に落ちんとする。母とやとひ人は歸つたが、父兄と妾は今日打つた小豆の番をしながら、畑のすみにあるあばら屋に泊る事となつた。妾は小屋のまはりを掃除し、兄は薪をあつめたり晩の用意をした。夕飯もすまして小窓より我家の方を見下した、星は空一面に閃めき、陰曆十日の月は増毛山の傍に少々光を發して居る。かすかに聞ゆる犬の遠吠、ゴー〳〵たえまなく鳴り渡るは、惠岱別川の水の音のみ。しーんとした靜な宵、父兄もつかれたればとて床に入る、何時しか月は山に入りあたりが暗くなつた。

十月十六日。曇天。

朝は早く起き御飯をこしらへた。皆したくせんとする中雨がバラ〳〵と降つて來た。心配して食事をすます中に雨はやむ、母とやとひ人來り、寒い〳〵と來るなり腰をかけて暖まる。と太陽は照り上つた。皆勇氣先程に百倍して一心に働きし甲斐あつて、目的丈けを正午すぎに終つた。馬上にて小豆何程、と聲をかけたは雜穀買、父は五十二俵と云つた。よし〳〵と馬を走らして去る。小屋のまはりを片付て居ると、間もなくガタンピシンと七頭の馬車が來て、皆俵を持つて行つた。家へ歸れば、時計は五時を報じた。六時入浴後食事、九時五分床に入つた。

○月末の記

留萌　細谷茂子

十月も早末日となりぬ、省れば此一ヶ月間の嚴禁嚴守果して守り果して禁じ得たりしか、行て歸らぬ貴き月日、大神の賜し此白布に、心の筆もて畫きたる繪や如何なりしぞ。天使は降りつゝ有り、繪帛卷つゝ有り、我胸は躍り我足は震ふ、如何にかせん此卷物。希望の光輝きて喜の香漲る中に、勇みてむかへし此月も、哀れ何斯てむなしく過ぎんとするか、如何なれば我斯迄に罪深く善にうときぞ。嗚呼されど泣けばとて嘆けばとて過ぎにし月日は廻り歸らず、畫きし其繪の消えんやうはあらじかし。嗚呼苦なる哉、此煩悶、過去となりぬとて徒らにその成行に任かすべしや、さあれおのが欲に勝得て遂にたのしく月末をむかふる時の喜や如何計りなるらん。いざ試みんわが力望ある新月は明日に迫れり新月いざやとく來よかし。

我胸の波靜に治りぬ春風の胸に通ふ思ひして平和の氣天地に滿ちぬいざや暫く畫の疲れをばやすめん。

和歌

佐々木信綱先生選



△規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く淸新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は每月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

秀逸

○　相模　鍋田美代子
あさ明やよき香つゝめるうす靄のはれて初日の淸らのぼりぬ

○　本所　田中久子
下町や油のごとき夜の河に筏うかびて月さしにけり

○　信濃　菊園女
戀ひ〱て君がみ名をば幾千度かきける灰に涙こぼしぬ

○　磐城　遠藤いさを
夜振りする川瀨の葦にとぶ鮎のひかりすゞしき初夏の月

○　鳥取市　孝子
野も山もみどりのきぬにつゝまれぬ木の間もる月かげ靑うして

○　福島　中川玉子
やわらかき風に吹かれて少女子は若菜つむなりさ綠の野に

○　工藤榮子
花多きわが山里の夕暮をいづこともなく歌きこえきぬ

○　羽前　白菊子
こがらしのおともたえ〲夜はふけてゆきはしづかに降りつもるらむ

○　福井縣　靑橋雲女
あなゆかし菩薩の如き御眼なり淚ほろ〱こぼれ落つかな

○　上毛　關口女
信濃路や小諸の宿のはたごやに父とやどりぬ柿の下の家

○　越後　五十嵐須賀子
昨日まで乳房握りてほゝ笑みしそのくちびるよ永久に開かぬ

○　若狹　早水その子
野より來て野に去り給ふ冬姫の呪ひし後の淋しらの夜よ

○　攝津　和久濱子
夕寒み小鳥もなかぬ山寺の寒紅梅に淡雪のする

○　尾張　成田石子
去年君と運命に泣きし欄に今宵はひとり秋の月見る

○　豐後　桃の家婉女
夢のごと鳰鳥浮ぶ山の池風なきに散る岸の黄ばみ葉

○　遠江　原木富美子
雨晴れて入り日の影の赤々と歌ふ歌人の聲にかゝれる

○　相樂郡　有野貞子
たのみある秋は次第に遠くなり空行く鳥の見事なるかな

○　千葉縣　輪多奈邊柳子
吹きすさぶみやまおろしにさそはれて川な横ぎる雁の一列

○　本所　三森ゆき

引き潮やわれ乗る小舟流し行け珊瑚あるてふ沖あひの島
○　淺草　山岸廣子
殘月のなほも浮かぶる河の邊に舟喚ぶ人の聲白きかな
○　佐賀市　伊原たもつ
荒磯邊の濱の眞砂か照る月も寄波毎に影をうつして
○　秋田　佐々木重子
飼ひおきし雛五つ軒の下にしくむその日を雪ふりしきる
○　大分縣　平田小春子
天つ神しばし大雨降らしてよ稀にとび來る友たゝさん
○　栃木縣　武井政子
もの云はぬ愛らし子供影障子胸は亂れぬ冬の夜の月
○　八王子　富本胡蝶子
君に送る歌に羽よわき蝶一つ舞ふ昨袖に春風吹きぬ
○　佐賀縣　橋口みゆき子
雨風にいとはず盡す案山子かな甲斐なく畑へなげ捨つるとは
○　羽前　小國けいとう
虫の音も絶えて聞えぬ枯野原かすかにひゞく入相のかね
○　奈良市　中西あさ子
あさぢけや木間々々に紅葉していづくともなく鹿の音ぞする
○　島根　野の白百合
まてど〳〵便りはあらで今日もくれぬふく風寒う秋深うして
○　丹波　齋藤笑子
月影は水にゆらぎて野の末に白帆のかげのうごきはじめぬ
○　豊橋市　伊藤りき
暗き灯は破れし家に病む人の面を照らしぬ秋の夜の雨
○　羽前　杉葉女
山鬼如何なる癡屋をあさるらん木がらし強き十月の夜
○　京都　片破月
春風の持ちくる香り深ければ花の在かは問はて知らるゝ
○　神戸市　久野のゑ子
遠近にこぎ行く舟のかずさへもさやかに見ゆる秋の夜の月
○　本所　礒野すみ
晴衣にも勝りて惜しゝ寶船見果てぬさきに夢さめにけり
○　紀伊　宗多津英子
何せんに人は知らずもみ山櫻其香をあげよ霞の空に
○　沼津　長井とら
大海に御國を守るいくさ人艦の中にて年迎ふらん
○　大阪　眞田芳子
古井に沙彌の水汲む春の寺眞晝靜かに桃の花ちる
○　京都　歌子
千代萬祝ひ樂しむつるかめは長き命を祈りこそする
○　下總　秋山よし子
菜畑の側の藁屋に梅咲きて可愛ゆき少女一人花摘む
○　越中　秋山つた子
なつかしき君が姿のうれしくも胡蝶となりて我が夢に入る
○　山形縣　長南白濱女
月ふみて友おくりきし里橋の柳のかげに遠砧きく
○　土佐　岡村一菊
明星の二つ並びて明けし夜の谷間に咲きぬ白百合の花
○　天鹽　小林秋露
立ち寄れば虫の音絶えん手折なば露やみだれん糸萩の花
○　京都　濱子
なんとなく心長閑けき新春の今朝門毎にかざる松竹
○　南豐　藤の家瑠璃子
物凄く木枯すさぶ夕まぐれ亡き友偲ぶ埋火のもと
○　秋田縣　藤島さき子
山々は紅く染りて雪がふる山出の月も寒く見ける
○　近江　太田靜花
夕霧をもれてはひびく鐘の音の共に消え行く牛童のこゑ
○　長崎市　一瀬みどり
わが戀の涙のたきにおよぶまじやみなき雨の水嵩ますとも
○　東京府　霧山のぶ子

しみ〳〵と身にしむ夜なり遠國へあす行く君と萩の雨きく　長崎市　山口蝶子
○
寒き夜を埋火かこみ賤の男の昔を話す渡場の小屋　岩手縣　伊藤宗枝子
○
白妙につもれる庭の雪の上に咲ける寒菊いと美しき　大阪市　大村花子
○
四人の車よぎりぬ雪のよべたゞ二筋の轍のこして　西多摩　粕谷雛子
○
月の夜に機音やめて聞きをれば庭のおもてに落葉ちるなり　遠江　鈴木三樂子
○
岩間瀨つゝじ色して春姫の乘るらむ小舟水亂しゆく　美濃　芳野紫水
○
夕日さす賤が伏屋の小柴垣蜻蛉さまよう日廻の花　熊本縣　前田ひろき
○
筆そめて何を書かむのたゆたひに籬垣の菊に蝶うれり飛ぶ　岐阜縣　山田はき子
○
柴車後おし登る三四人が坂路につゞく朝の飛彈道　北多摩　原よし子
○
弓矢持ち狩衣まとふ武者ぶりの野面に淋し秋の夜の月　澁谷村　田中若菜子
○
昔おもふ五條の擬寶珠月更けて加茂ゆくひとり春寒かりき　周防　谷瑞枝
○
つま木折り磯のべ焚けば磯松の花の香くゆる伊豆の浦り　茨城縣　中山道江
○
月に日に都の方ぞ戀しき我姉君のおはすと思へば　熊本縣　藤村おき
○

ぬき菜　三重縣　加藤つたへ



吹からに露もみだれて秋風にしほれにけりな野邊の八千草　東京　とき子
○
白衣着て袴は黑く頭には紅き冠をかむる鶴かな　靜岡縣　増田糸女
○
色かへぬ久能の松に年立ちて猶も色添ふ初日子の影　羽前　笑花賤女
○
絶え間なく細き雨降る夜の更けて枕邊淋し初旅の床　芝　ひさし
○
遠山の雪氣は未だ去られどもかすみがくれに梅の花みゆ　神奈川　岩澤玉江
○
とほ〳〵と山門くゞる巡禮の小笠に散りぬ銀杏落葉は　富山　安田崎子
○
秋暮れてつめたき風にそよ雨は今ぞ冬をば知らせけるらむ　名古屋　東富美子
○
光る夜に見節り橋の欄干に月の歌詠むなみだ人かな　京都府　村田まさ子
○
只しばし月をめでてむとうかれきてかへるさ忘る梅のこの下　臺灣　映よし子
○
病みなやむ旅寢の床の枕邊を通ふは戀ひしふるさとのゆめ　上總　北田のぶ子
○
秋の夜や月の光りに影見えて山の端過る初雁の聲　磐城　遠藤きさ子
○
櫻貝花にゆかりの歌そめて流してやらん君住む島へ　宮城縣　千葉よし子
○
さらば君別れの一曲奏でなん調ぶる琴に白萩ぞ散る　はる子
○

和歌

秋くれて野寺の庭のつたかづら夜半のしぐれに色づきにけり
○ 後志 橋本千草子

今宵たれ月を友としゝらぶらむふし面白き箭竹の聲
○ 靜岡縣 靜山宏

鶯の初音ききしと人づてにきくさへ春の心地こそすれ
○ 土佐 梶原翠美

かげうつす鏡曇らば心まで曇ると母はさとし玉ひぬ
○ 備前 堀内香園

刈り取りし稲の束數やむ母に語りて今宵はなぐさめむかな
○ 下總 大矢喜久代

冬の日の東の方の山つゞき雄松女松に白雲かゝる
○ 中津町 やま川

我たどる道はとこよの暗の中やがてはよみの冷たき跡とよ
○ 新潟縣 藤村三枝

深山路の木かげに住みし鶯も初音つぐべき春は來にけり
○ のり子

霜枯れの野原を過ぎてある家の夕影うつす冬の川づら
○ 筑前 綠葉女

輪をなして湖の上に鳶の鳴く小春の空の暖きかな
○ 埼玉縣 中村路子

團のまどひ限りなく昵れだりてし妹はなくておぼえ甲斐なき
○ 丹波 齋藤笑子

未だ見ぬ花の名所の吉野山したゆく川に其の一ひらを
○ 青森縣 中村仙子

のりの舟さしてわたらばかの岸にいたらぬ人はあらじとぞおもふ
○ 青森 孫葉

梅の香も胸の思ひも埋もれてうらみや里に積る白雪
○ 下野 山口溪泉

病みませる母をみとりて夜もすがらひとり火かげに文を読むかな
○ 日向 加藤すま子

聞く學の今はその音もかなしくて泪せしむるかみをしのべば
○ 遠江 新井せき子

物思ふ秋の寢ざめの手枕にひびく砧の音の淋しさ
○ 筑前 位地むつ代

紫なる雲たなびくわたりうすひゞて初日出ましぬ高千穂の峯
○ 紀伊 操子

うら若き女男の順禮打過ぎて刈萱堂に夕日輝く
○ 佐世保 淺田克子

霜柱ましろに立ちし古井の邊餌あさる雀影寒むげなり
○ 信濃 那波子

さなきだにまとゐ淋しきこの夕戀しき君の遠く嫁しぬ
○ 土佐 深瀬ます子

夕月夜野路つみ／＼歩みしがまたもや君が門にいてぬれ
○ 近江 土岐尾のぶ

秋の月小舍の窓より白挽ける四人が面と手とを照しぬ
○ 茨城縣 齋藤すみ子

早咲きの梅は園生に咲き初めて魁の香を愛づるうぐひす
○ 豊後 工藤たまき

戀を守る女神のみ顯現じては春ときめきの緋牡丹の花
○ 岩代 角田秀齋

衆止めてこのめを煮ればかまの沙に友まつ風の音かよふなり
○ 下野 三品榮子

弟の昨日にまさる心もて書きて飾りし年ほぎの文
○ 沼津 渡邊とよを

山添ひの一村淡く紅梅に霞おすみする春の家かな
○ 山形 幸女

神さびし鎮守の森に夜はふけて淋しく響くかしは手のおと
○ 福岡 村園

過ぎぬれば踊らぬ事とは思へども早く來れよ新玉の年
○ 德島縣 野すみれ

よる窓に雪の白菊香や高く氣もはれ／＼と小春日の空
○ 岡山縣 廣江壽子

時雨るれば秋のあはれもまさりけり紅葉見にこむ人しなければ
○ 土佐 門田[illegible]
うぐひすのうたふしらべのゆかしさに梅の花さへゑみそめにけり
○ 京都府 菊の花
栄しきや學びの道に相老の松踏共に久しかりけり
○ 名古屋 みどり法師女
頂きの神の御座にある心地山より五百つ村々を見る
○ 紀伊 尾上子
夕鳥ねぐらに歸る山松のこずゑかすみて春雨のふる
○ 秋田縣 木村はな
秋といへまだ霜ふらぬ山里にけさめずらしき雁の初聲
○ 熊本縣 杉みつえ女
閨を出て香にそみしわが袖に香ひをのこす梅の花かな
○ 群馬縣 森下うばら
白牡丹君が來るべき夜を思ひ香たく室にほろほろとちる
○ 兵庫縣 福原志納婦
秋風に吹かれて飛べる雁見えてふる雪白き比良の嶺かな
○ 張津 綱すゑ
さな風よ窓かけ搖りそ我夢のつらきなごりを奪ふとかや
○ 府下 鵜澤喜[illegible]
漁船とも見えて美し春の月朧に見ゆる三保の松原
○ 千葉縣 宍倉てい子
人乘せし舟は東へ馬乘せし舟は南へ春の湖
○ 茨城縣 川上代賀子
嬉しくも年立つ今朝は病む妹も笑顏かしげぬしばらくにして
○ 牛込 澤田すま子
しや深き霞やく里のほの見えて吹く春風に煙たなびく
○ 横濱 中村桂子
初日の出濱は靜かに風なぎて磯地に長き松の影かな
○ 日本橋 牧野愛子
思ふ本意さずてたゞに歸るべきひくや眞弓のやまとだましひ

○ やよ子
ほそ道は秋草咲ける野をすぎて節目正しき社につきぬ
○ 横濱 清水千秋子
初日の出うらうら上る朝には富士の高根も猶長う見えて
○ 宮城縣 佐藤しげ子
たゞ一人何とはなしに數へ見ぬ南に走る夕空の雲
○ 神戸 安達絹枝
常磐木の松のこずえに末かけて千代萬代と祝ふはつ春
○ 近江 土岐尾信子
初日すや東近江の群峯ふまへ伊吹の猛者は狹霧に立ちぬ
○ 名古屋 原田季子
忘られてよるにさびしきおばしまにものはかなげの漂雲を見る
○ 日本橋 吉田さく女
そよそよと吹く春風も奥深く晴れの小袖に梅の花ちる
○ 米澤 相田とく子
遠山の月眺めつゝ秋の夜をきみまつ虫のいかに淋しき
○ 長崎 天ケ瀬さだ子
圓窓や花の香かをる朧夜を君の圖畫の夢あたゝかき
○ 小室のぶ子
祖父君がいくさ談りの奥ふかみ火桶に集ふ子等の靜さ
○ 本郷 ちづ子
君と別る夕恨の月影に野路の萩原露深みかも
○ 鳥取 佰笑子
初日影紫の海を天使のやうに遊びぬ鷗二つは
○ 大和 栗山英子
朱雀路やふけゆく夜半を御車にかつぎの上臈いづこをさして
○ 土佐 岡村春榮
よき少女二人並びておもはゆのさましてありぬ黄菊白菊
○ 沼津 飛奈久枝
門毎に年をむかふる松竹にかゞやき昇る初朝日かな
○ 高知 清[illegible]子

庭無花の笠の小笠に日は落ちて秋風寒し川添ひの道
○ 伊賀　山村すみれ子

其昔はやりしものと祖母君のふしおもしろき手毬唄かな
○ 本郷　三ッ森富士子

秋の夜の風の間に〳〵あしの間の鬼火に似たる灯火ゆらぐ
○ 豐能郡　寺部君子

みつふたつのこりし柿に日毎來し鳥も來なかて冬は來にけり
○ 奈良縣　天舞女史

ふるさとは無花果老いし板朋毋にすがりて夕鐘きゝぬ
○ 下野　栗原くに子

明け行く世は治まりて四十の一とせ明ける今朝を祝はゝむ
○ 新潟縣　尾島隆子

宵月やたま〳〵逢ひて二とせの離情語らふ銀杏樹の下
○ 仙臺　白菊子

霧をもて築きあげたる山の如白衣をまとふ新年の富士
○ 越後　きよの子

日の御旗高くかゝげて君が代を榮へいませと祝ふ今日かな
○ 熊本縣　富野美惠子

小春日の朗かなるや山寺にやならいれむる少女床しき
○ 奈良縣　濱田せつ子

道は今鹿も鳴くなる深山路に入りぬ散りしく紅葉ふみつゝ
○ 備中　林ふみ子

秋の夜のみ空にすめる月のごとあらまほしきは心なりけり
○ 榛原郡　後藤光子

わか竹の亂れぬ程に風たちて簾かけ涼しく月のさしたる
○ 北海道　ちぐさ子

雨晴れて岸部の松の木の間より見ゆるも消き秋の夜の月
○ 讃岐　笑月

うば玉のやみにもそれと知られけりまがきに匂ふしら菊のはな
○ 福岡縣　角銅露枝

龍宮に旅族どもが酒宴すと集ひ來れる新年の旅
○ 富山市　小林芳枝子

宮人の心もゆらぐ梅の花初音をいつと鶯やまつ
○ 神戸　ひさ子

紅葉散る峠の茶屋に腰かけて馬子の唄きく秋の夕暮
○ 土佐　深瀬ます子

夕されば君をまちつゝ門の外の菊や咲きしと幾度か見し
○ 静岡縣　しらぎく

門ごとに平和の神のましますか實にしづかなる新玉の年
○ 下総　高木美代子

花とのみ常にも見ゆる白雲の春の梢にかゝりけるかな
○ 横須賀　柏原美奈子

金色の日影匂ひて紫の雲美しき初み空かな
○ 石狩　愛花操子

たまはりし夏の日數のいとまあれどいたづらにのみ今日もくらしつ
○ 伊豆　上原露子

雲のとぶ間をもるゝ宵月夜風の行くへをほのかに照らす
○ 鹿兒島　鶴丸智満子

虫の音のいとも悲しき夕まぐれわがよをほころ秋の七草
○ 宮城縣　孤舟女

なき母の墓に手向けし紫花枯れて虫の音細く秋の雨降る
○ 大阪　日原富代

彩雲の沈みはてたる夕まぐれナイルの河面たゞ秋の風
○ 東京府　入澤有子

立ち別れ四年の春はめぐり來ぬ友なつかしき故郷の空
○ 大阪府　辰井花子

花吹雪たへぬつゞきぬあらゝぎの見えぬかくれぬ京の行く春
○ 濱田　三明千鳥子

白狐なくさびしき枯野月戀ひて一人さすらふ桔梗花かな
○ 對馬　倉成彌生子

花咲かばないかならんみよしのゝおぼろ月夜の曙のそら
○ 奈良縣　喜多尾白衣

何時までもかくてあらましもみぢ葉の色もあせずにちりも果てずに
○　神戸市　大谷百枝

進み行く世と新年はことほげど吾れは取るとし何の効なき
○　大阪　中川芙江

若水に赤き心を染めいだす　朝日こゝろをしる人ぞしる
○　奈良縣　喜多尾愛子

山姫がたくみに染めし紅葉ばの錦とまがう秋の山々
○　安井ふさえ

くさぐさの菊のそのふを今朝見れば　花みなしろう初霜のおく
○　廣島縣　笑岡萩村

辿り行く枯野に武士の墓ありて　手向の香に夕霞する
○　岡山　田鶴子

み戰に召されし兄はかへりまさて今日三年ぶり春のさびしき
○　陸前　小野寺みさを子

人魂の飛ぶてふうはさ立ちしより　ひとしほ淋し冬枯の空
○　本所　篠原英子

夜もすがら心のゆくへ尋ぬれば　露うむ草や野路の曉
○　埼玉縣　關貞子

云ひしらず美くしかりきしばし世は　師走の空を迷ひゆくわれ
○　上野　三浦花香

一年の昔戀しう齢とればそゞろに戀し小雀の聲
○　栃木縣　千葉奈津子

天神の石段高し日あたりて遠祖戀ふ姉妹かな

流船　　三河　近藤道江



○　京都　今泉園千鳥

新年や屠蘇強ひられし花嫁の紅さしぬ日の出るころ
○　名古屋　榊原竹子

亡き母の愛でにし梅の花咲きて世にありし昔偲ばるゝ哉
○　沼津　入代美代子

いつまでも變らぬ御代を示すなる　日枝のやしろの松ぞ色よき
○　筑前　八千代子

花咲かぬ小笹も今日は初春の情けか美しう淡雪のして
○　伊勢　佐々木らく子

尼君が昔語りをともに泣きぬ　花乞ひ入りし白萩の寺
○　信濃　鹽島喜久代

深山路はいつしか秋もすぎはてゝ　紅葉尋ぬる鹿の音ぞする
○　麻布　福谷以智子

我魂はいかになるらん白露の　花にやどれる如くきゆらん
○　京都　田中文月

曉に雲に聳えて雪をかざり　朝日待つかな元旦の富士
○　佐賀　西君子

母ゐます空は彼方と仰ぎ見るこゝろ汲みてか鳴く時鳥
○　筑前　わかば

そばの花さける野末に巡禮の　うたあはれなり風寒くして
○　筑後　深山女

旭さす松の上になくあしたづの千代をことほぐこゑもさやかに
○　宮城縣　沼倉ふく

門まつにふり積りたる白雪はあさ日と共にかゞやきにけり
○　神奈川　大矢百合子
百舌鳥の聲雉子の聲に夜はあけて向つ岳越う出づる朝日かな
○　京都　小笠原あき子
二人して汲む一と桶の水なれば梅紅白の春を咲き出ぬ
○　陸奥　加藤美枝
其のかざす玉の村菊たまたまもしもに枯れせぬみさを忘るな
○　小石川　吉田ひさ子
露のたま運れて秋は飾りしな霜に老いけり冬枯の蘆
○　大分縣　やま川
降りなく彼の走る雲と身をなして行きても見たし我想ふ國
○　大島町　吉田たつ子
地に永うふたりの影をうつしけり木の間をもるゝ月低うして
○　高岡市　梶川[illegible]子
いと淡く殘る夕日に柿紅葉ちるしきりなり行秋の家
○　信濃　瀧澤白妙
色深く咲きそめにけり赤萩の池のおもはの月に懸りて
○　廣島　松月子
降り積る佐田のわたりに駒とめて向ふやあかぬ雪の夕暮
○　京都　森岡[illegible]子
いとせめて匂をのみやつとにせん手折るも惜しき野邊の白菊
○　飛驒　道子
たえ／＼にうつゝや少女のさ夜砧少さき胸になにもだゆらん
○　秋葉婦美子
病みませる君が姿に似てありと窓の楠に時雨する時
○　京都　月島花月
春風に細とく梅の花蔭に春を告げてぞ鶯の鳴く
○　信濃　時子
靜やかにみぞれ降る夜は灯細めて君の發句きく山茶花の宿
○　下野　和田正子
眼を病める母は如何にと思ふ夜涙をさそふ秋雨の降る

朝霧の幅一重にみ社は見へてまたゝく燈火の影
○　丹後　國見千代子
いれられて山にひそめる詩人を訪はむの小徑野菊みだれ咲く
○　伊豆　杉山野[illegible]
女男浪おいつおはれつ磯の邊に聲うちよせて鳴く千鳥かな
○　羽後　佐藤なつ子
故郷をそゞろしのばるこの夕ちぎれ／＼の雲西に飛ぶ
○　秋波ひて子
尾花散る野末の庵の秋のくれ月まつ窓にうずらなきけり
○　丹後　阪井せん
亡き父の形見眺めつ淋しげに軒端流るゝ秋雨ぞ聞く
○　和歌山　津田久枝
空渡る雁の涙か月影のまがきの黄菊露の玉しく
○　美濃　茂子
染め出し紅葉は人の春の色何れも同じ朝の淡ゆき
○　群馬縣　新井すみ子
故里のいとゞこひしき旅の空さすらふ今はいやまさりけり
○　臺灣　よし子
あらためし日記にしるさんけふの宴君と相見し三とせ振りかな
○　四谷　孤[illegible]女
おぼろ月島のひとつ家ともし見へて障子のあかり人かげゆらぐ
○　波島　浴花[illegible]子
麗はしき花の巴里の旅がたり兄をかこみて聞く宵の春
○　近江　北川つや子
誰里もかゝらん物を身一つに眺め詫びぬる秋の夕暮
○　神戸市　東川艶子
枯芦の音のさやぎて風寒み入江の小舟波にゆらるゝ
○　石川縣　木原遊舟
初日の出よき山影の賤が家の江の南よ君が代の春
○　神戸市　高橋紫峰
○　下谷　工藤[illegible]子

香貝山に黒き霧する夕より大和國原夜白うあけぬ
○ 横濱 長谷川花子
秋詠みてつかれしまゝに手枕のかりねの夢のいと面白き
○ 白葵子
鮮かに初霜おけるみ園生のまがきに白く菊の花さく
○ 高知縣 岡田繁子
さし昇る初日の影はうらゝかに富士の裾野に霞たなびく
○ 熊本縣 富丸わか子
大楠の森に天地の精あびて島巣をなす寂しき夕
○ 佐賀 田中よを
起き出てゝ朝扉明ればつゆ晴の眺め涼しや黍の風
○ 佐渡 谷川桂月子
はかなくも戀しき友にあひにけり鈴虫なくなる初秋の夕
○ 本鄕 泉千秋子
微笑みて聞かず語らず君は行きぬ鐘にくれゆく寒き秋の日
○ 愛知縣 渡邊かせき
短檠の灯火ほそく寫經するわが手つめたし水仙のはな
○ 奈良縣 中富よしみ
見送りぬ秋をのせ行夕雲の奇しき一むら雁に追はるを
○ 倭文子
まとはしの霜かとばかり眺めしを消ゆるにおそき白菊の花
○ 雅濱好子
こみどりの海うつくしき朝あけに神代をみたり年の初空
○ 丹後 愛蓋子
月影の玉らぬ里はなけれどもたゞ澄む人の心にぞ照る
○ 東京 服部春子



老媼の裁縫　千葉縣　松ヶ枝富士枝

落葉して稍淋しく見し木々に花とつもれるけさのしら雪
○ 大分縣 飯田都瀬子
八千草の花の名殘をおしみてや空はしぐれの涙ぐみけり
○ 東京 飛奈玄子
めかれたる庭の芝生も春風のひと日〳〵にみどりおぞ見る
○ 筑後 靜子
やれがきにかゝる白菊二つ三つあたり靜けき秋の夜半かな
○ 京都 堀野てふ
おき出てゝ白らむ東の空見れば海原遠し八丈ヶ島
○ 岐阜 篠田とみ子
枝柳の影もの凄く水にうきて人ひとりなき橋の上の月
○ 新潟縣 村山茜子
九重の雲井に春やたちぬらん大内山の松の初風
○ 大阪 村山理
初霜や紅葉榮えある朝明けを木曾の杣人馬曳き來る
○ 麹町 淺井ゆき子
冬枯れの丘にし立てば烏瓜只赤らかに遠ち方に見ゆ
○ 大阪市 服部浪子
山寺訪ふ旅のみ僧の脱おきし草鞋の上に山茶花の散る
○ 福島縣 三浦八重子
おく霜に木々の梢は紅葉して蔭間の池も錦なりけり
○ 下毛 吉子
磯村の砧にぎはし春の月かすみのまゝに暮うつる頃
○ 青山 野菊
空たかくかたわれの月ひやゝかにまがきの菊のいとしろきかな
○ 仙臺 河原榮子
鶏なく紅葉の色は黄昏れて靜に淋し夕暮の雨
○ 越後 水谷睦子
妹と薹つみにし野は枯れて草葉の末に虫細う鳴く
○ 豐後 加納豐子

和歌

朧夜や梅が香しきるをばしまに絲匂ふ長袖の人

○下谷　わかば

美しき君がゑなれど白菊のわがうたならて夜ぞふけにける

○赤坂　東紅娘

天地に二なしとほむる顔も今日あれましぬ北風吹く日

○小樽　紅星子

折々は古塔掠むる銀杏葉の行方見送る眸美き君よ

○赤坂　森英子

初日かげかゞやきそめし九重の雲井を高くつるなき渡る

○岩　富士根小枝子

たがしらべ琴の音ゆかし今宵しも梅が香清う月[illegible]

○北海道　湯淺すみれ

月見れば君ますみ空しのばるゝゆく雁がれよ文あつらへむ

○本郷　保延七草子

木の葉集め木の葉の道を少女ひとり箱の楓に朝日てるなり

○北海道　錚女

山寺に暮れゆく秋を眺むれば白萩手にし尼かへりきぬ

○横濱　中村かず枝

門松の二もとうれし同胞の持つ手鞠げに羽根をつくなる

○深川　牧野はん女

遼東の原に消にしはらからを思ひ出して忍びれに泣く

○麻布　磯部しげ子

さらしなもすまもれがはずなつかしきふるやまざとの月ながむれば

○若狹　梅花

夫を戀ふ鹿の音あはれ秋雨ふるわれは黄泉の友を想ふて

○下總　三橋げん子

夜の霧に幔幕うちぬ様をして秋の月照る川添の村

○靜岡縣　大石かと子

秋行きて山らあらはに木の葉降り御堂の屋根やたそがるゝらん

○柏崎町　勢伊子

さすらひの我みいたはる母君のおもてやつれて見るぞ悲しき

○駿河　樋澤よれ子

琴とりて笛と合せしことあれど其笛あれど其主はなし

○紀伊　桐一葉

鮭とりてかへる夕の月にしてアイヌの髮にえぞ菊匂ふ

○常陸　植田とし子

永き日のつかれにねむるひざの子の夢に友呼ぶ笑ましげの顔

○徳島縣　若槻淑子

あらたなる春を迎へて嬉しげにほゝ笑みそめぬ庭の白梅

○茨城縣　永井まこと

春日和ゆるく廻はりし水車朝霧晴れて初日長閑に

○淺草　とみ子

御母君が昔がたりの綺まき物紅きを指してほゝ笑みぬ我

○山梨　窪田美津子

人もあらば打明けましをうき袖の濡れにし宿はもみぢのみにて

○埼玉縣　小宮光江

叩く音君かと思ひ戸によれば寒月さえて風くるひ吹く

○四谷　河野槇子

寒さむと挿したる菊も枯れ果てゝ我壺は威らず秋は徂くかな

○宮城　齋藤惠津子

明らけく治まる御世の大空に鶴まひ遊ぶ君が世の春

○上毛　柳澤元枝

みほとけの香の煙の消えうせて香爐に灰の積りけるかな

○駿河　ゆきえ

うす雪は春日にとけて鶯の鳴く音のどかに春立にけり

○飛驒　千代子

山里の雪の夜がたり更たけて昔をかへす埋火のもと

○越後　山口しげ子

北風のつよくすさみて玉霰いたく降り來ぬいてや別れん

○筑前　鈴木たけ

木枯しに殘り葉二つ吹き散りて梢に染めし白銀の花

○遠江　木下ふゆ子

淡雪の御庭の石にはかなくも消ゆるを梅の散ると見しかな　下総　成田濱女

○市に出ずる牛のひとむれすぎ行きて森の鳥のきりさめに泣く　奈良縣　中富よしみ

○君と別るかたき誓ひの言の葉も胸の小琴をかきならしつゝ　兵庫縣　坂田秀乃

○さゝやきの聲やいづこと分いれば谷間に野菊泉ながれて　茨城縣　みどり

○虫の音も只嬉しくぞひゞくなりたり穂ほす家の秋の夕暮　日向　右松琴子

○朧夜の月影ふみて野路行けば花の香ゆかし糸川の里　横濱　佐藤若葉子

○過ぎゆかば花やこぼれむ露の萩ゆかれば今日の粜はなるまじ　茨城縣　すみ子

○小夜更けて文よむ窓をそと押せば庭の落葉に時雨音する　尾張　内山文子

○枯尾花木枯すさぶ夕暮をたらちれ墓ふ吾れを招ぐか　德島縣　吉田棠花

○かまきりの斧振りわげてたゆたひぬあまりにやせし其身を責めて　鎌倉　紫子

○立ち歸る春のしるしはなけれども霞立つれに雪の群消え　飛驒　千代子

○月いづれば笛ふき給へ野にいてゝわれはうたはん人戀ふる歌　兵庫縣　中島八重子

○つゞき行く川舟一つまた一つ葉柳けぶる淀の川づら　紀伊　三宅水仙


寒き日　習作　村林矢須子

山下りて鐘の音長しうらぶれの身にふりかゝる蟬しぐれかな　岩代　芳舟女

○霜枯れの野邊に淋しく佇みぬ折しも聞ゆかりがれの聲　水戸市　岡井たつ子

○新らしき朝日のひかりうららかに我が文窓は春立ちにけり　長崎市　北尾季子

○梅林花未だ咲かぬ此頃を霞棚引く初春の空　芝　貝子

亡き父が手植し白菊咲きにけり今宵もそれに月宿るらん　鳥取市　上山千重子

○何となう若き心のときめきて摘みても見たき紅の初花　長崎市　浮き雲

○門毎に立ちし門松色深く朝風そよぎ七五三のゆらるゝ　三河　じつ子

○朝顔の枯れしまがきに咲きにけり日影まつまの雪の初花　京都市　羽倉信子

○咲しより秋の日數をかされても匂ひぞ清き庭の白菊　近江　木津羅子

○天の原降りける雪や身にぞしむ椿の上を照す月かな　福井縣　片山千里

○あまさかる鄙も都も門毎に松竹立てゝ年迎へけり　四谷　林白菊

○つれなしと風をうらむな山羊行きて歸らぬ旅にあるまじ　熊本縣　池邊しづ子

○この秋は妹病みて母まさず吹く秋風のことに冷たき　越後　伊與部千草

和歌

汐めぐる礎七村は灯も更けて月に謡したる波の音さむき

○

静岡縣　川井茂子

此頃は問ふも語るも一人にて二つ連れだつ雁ぞ戀しき

○

山梨縣　田中ふゑ子

蟲の音の細る頃こそ忍ばるれおいたる母や如何にいますと

○

長野縣　内山静子

小夜更けてあんまの笛もいや細り雲井に白き冬の夜の月

○

栃木縣　加藤もり子

月に倚りて夕べの雲を眺めやる人うらわかし那須の白嶺

○

越後　早津作子

大楠に白羽の矢たつ噂して村やすからぬ年の暮かな

○

越前　永宮こよれ

常に聞く聲にてあれど今朝のみは待たれ心地の初鶏かな

○

大阪市　武田とし子

月清し空に連る茅渟の海漁り火消えて夜は更けんとす

○

長野縣　藤波子

織姫の機梭の音も消えゆきて今たそがれの鐘なり渡る

○

伊豆　静枝女

物すごき山寺の鐘の忍ばるゝかりがね渡る朝月夜哉

○

下總　野々宮くに子

目閉ずれば七色彩のそのをちに花のやうなる人おはします

○

四谷　入重子

今日の日記かきをへたりし霜の夜に生きのこりたるこうろぎのなく

○

山形縣　高橋きくよ

佐保姫のかもす若水露となりて繪筆洗へる君が野流れぬ

○

佐柄木輝子

詩をしたひ夢追ふてたつ草の戸に白梅清しあけがたの月

○

羽前　白萩子

朗詠の聲はとだえて花園に人影清し春の夜の月

○

廣島　緑子

いざり火の影も涼しき海の上は月の行方に舟をまかせん

○

相摸　鈴崎礎子

夕焼の雲淡くきへてひとり野路さびしさまさる入相の鐘

○

丹波　しげ子

萬條の金箭暗をつらぬきて小さき家にも初日影しぬ

○

美濃　笹島みゆき子

子供等はたか足つくる竹きりぬ片側街の初雪の朝

○

福井縣　野田しげ

赤き實の梢たわゝに雪つみて眺めよろしき山里の庭

○

備中　大西好子

薔薇の花香ゆかしき黄昏を風渡るなり月のぼるとき

○

上總　板倉きよ子

時あらず語る友あらず慰藉あらず枯野の秋を唯月に泣く

○

美濃　後藤よしゑ

かはりなき御代をことほぐときは木に千代のとも鶴なきわたるなり

○

熊本　金子かたえ

夢の如うつゝとなりぬ此の思ひ思ひ君かも思ひわれかも

○

小石川　小笹千代子

夕ぐものいづこか雁の聲のして西に東に星うつくしき

○

備中　篠原しげ子

幾年かたゆまずうまずいさゝ川初日の今朝の水の清けさ

○

船穂村　平川澄江子

歌姫が小さき薫りをひそめたる夜の室清し水仙の花

○

徳島縣　ます子

しほらしく糸萩の花うなだれぬ柱つめたき夕小雨かな

○

大和　我妻紫子

彼の君と別れて吾れはたゞひとり日夜思ひに沈むなりけり

○

大阪府　金田紫露

手洗の鉢にきらめく月影をうつしゝまへに水凍るかな

○

岩代國　水上まさき

寂びさしいとう朽ちては母まさぬ秋をなげきぬ涙もろくも



美文

編輯局選

◆規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

三等

○冬の川邊

長野縣下諏訪　山田くに子

ザア／＼と冷い淋しい音を立てゝ流れてゆく冬の川、其両側に何の木か、葉少なの木があつて、物憂げに川に向つて垂れてゐる。

翼の破れた様な鳥が一羽、すつとゝんですつと返つて川の面ひくゝゆきゝして居るが、其折々におこる風にガサリ／＼と木と木がふれ合つて、何か呼て居る様に聞きとられてならない。

此堤に腰をおろして、思ふともなく思ふ人の上に思は走る、自分の足に咽びよる川水の、それの如くに……垂れて憂しづむ木の枝は、長く短く川に影を描く、枝はすぐ其水面とすれ／＼にまで垂れて居るが、影はまぼろし枝は現、有るか無きかにせきよる水の、此まぼろしと現の境を流れては、二つのものをまとめ様としてつとめるけれども、いづこに何の力がひそんで居るのか、現は現まぼろしはまぼろし、近く有つてとこしえにふれず、水は向へ流れてしまふ。

何か深く／＼心はそこにおどまつてしまふ。あゝ私の戀人、それは永久にまぼろしの人と成つてしまつたのだもの。今其人は私の近くにさ迷ふて居るかも知れない、けれど、人はつひにまぼろしの人、私はこゝに現てはないか、互の魂がふれ様とつとめて居るらしい、然し其間には死てふ一重まくがはられて、ふれ様とする想像の川水をば、ついにむなしく流れ去らしてしまふ。私は孤り、人もひとり、かくて両者は相思ふて居るのである。

日は曇つて光の一尖をも出さない、私の心は重い、ああなぜ私の戀はかくはなれて近くふれんとしてふれずに沈んで行くのであらうか。涙がやせた頬をこぼれる川風が一しきり肌を冷して、あれ又影と形とが……鳥はまだ去りやらず低く／＼行き來してをる。

なつかしき人、面影はたへず目の底に住んで……。

二人は淋しい孤兒であつた。二人の作つた戀の色は、紅のもえたつ様なそれでは無かつた、あの曇日の空に重なる、灰色雲のそれの如く……、世の冷い風に痛んだ胸を抱いて、私が泣けば彼の人も泣く、泣て涙が結び合つて、そこに出來たのが二人の戀てあつたのだ。花にも見られはせぬ、蝶にも聞れはせぬ、二人の戀の

さゝやきは……丁度今日の様な曇り日の、立枯れた冬の林に成つた戀てあつたもの——。

冥想的悲痛の聲あるは、其詩と同じやうであるが、少し理窟つぽくなりかけた、感情に脆きこと、崩るゝ砂のやうであつても、彼女は論理性を失はぬ、能く現代の若き女性を表はしてゐる(野)

四等

萩のお寺

本所區外手町六十一番地　田中久子

さつき薪を積んで通つた小僧が空の荷車を引いて戻つて行くのに未だ初えさんは出て入被らない。潜戸のあいたご門の中を覗くと、靴脱に紅緒のお草履が揃へてあるぎり。どうしたのだらうと思ひ乍ら狭い道を向側へこえる。綺麗に揃へて刈られた要垣に行秋の寂しい日影がさして上迄延びたコスモスが畯かさうに仰向いてゐる。要の葉裏へ蓑虫が大儀さうにからだを動かして隠れたので、腰をかゞめてそれを覗かうとすると恰度其處に破れ目が在て中のお庭がよく見えるさ程廣くもないらしく縁日で買つた如な黄菊が三鉢許り眞中の踏石の上に並べられてあつて、竹椽には白い着物の和尚樣が立てかけた黒塗の障子わくの前に膝をついてあちら向に成てゐる、傍には朱塗のお盆にとかした糊が白く、朝の日に映えて、疊の上には縫ひかけの緋絹が丸く片よせられて燃え立つ許りに輝いてゐる軒の目白が啼いたと思ふと何處かて寂しい鉦の音がした。御本堂の方だらうと思つて垣について儘二三間行くと、丹塗の寂びた大きな門が在つて少し斜に御本堂迄の敷石は、兩側から首垂れた萩の葉に踏む所さへない位。其幾重にも〳〵に重り合ひかぶさり合つてゐる葉の中から白い着物に草鞋ばきの秋は寂しい御道者が二人、露をわけ小聲に御詠歌を唱ひ乍ら前にさげた鉦をたゝいて出て來たのである、御門から直ぐ左へ出て堤の上を眞直に二人ならんて歩いて行く。鉦の音が漸々かすかに成つた……。暗い本堂の奥の方にはお蠟燭の火が五つ小さく紅く燃えてうら寂しい思を胸に浮ばせる。うら枯れた萩の根元に風が起ると鉦の音が全く聞えなく成た。ガラ〳〵と八百屋の車が私を見乍ら通ると其うしろから白い顔に笑を含み乍ら手套をはめ〳〵初えさんが出て入らしつた。これから二人はあのお道者のあとを追つて堤の上を南へ〳〵紫苑の花の美しい友の家をたゝくのです。

文章は手に入つたもの、見た通りを思ふやうに書いてある、殆んど非難すべき點がない(評)

五等

○店番

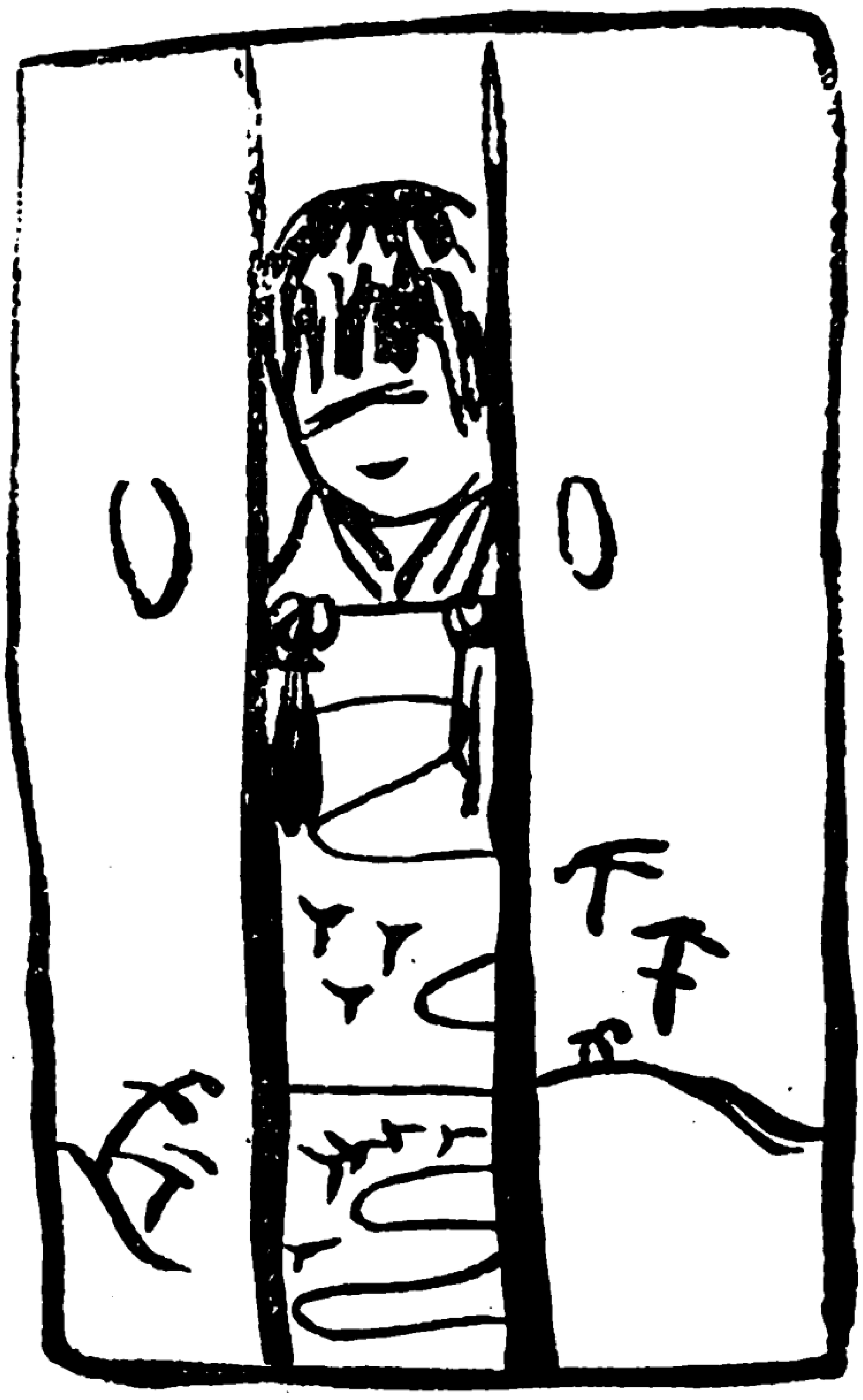
青森市米町　村林矢須子

今しがた、絹半巾を買つて行つた奥樣の、御品のよい事そう〳〵御向ひの雪樣にそつくり……。バイオレ

ツトの香を匂はせて、美しい令嬢がつといらしつて、アノ極い丶香水がありますか、私はあはて丶ハイ此れは如何ですか、そうネ此方がい丶わ、後で下女を取りによこしますから、承知致しましたさようなら、マア何處の嬢樣かしら？價を問はぬ處を見ても並々の御家じやないらしい、可愛い下駄の音を立て丶、町方の娘さんが二人、赤い絹レースに琴の爪箱下さいな、ハイ赤でしたネ、云ひながら角いのや丸のやいろ／＼並べるとひそひそさ丶やき合つた末じやこれにしましよう、新形の浪に千鳥の御揃ひを求めて、いくらハイ皆で二十四錢づ丶、さうきつぱり價を拂つて、紅の半巾に仲よく包み、さよならさようなら、上町の方へ話しながら行く。ピー／＼！オヤもう四時、工場の方の横町からドヤ／＼、毛糸のショールに首をつ丶めたの、辨當さげたの、ベチャ／＼話合つてるの、思ひ／＼に上町の方や下町の方へ行く、とてつぷりしたのが此方へやつて來て見てる間に家にはいつて、すみれ白粉と乙女はだ下さい、ハイこれですネ、まあこれは古いんだよまけるでしよう、い丶えそれは新しいので御氣の毒ですが引けません、きつぱり云ふとブツ／＼云ひながら、ゴチャ／＼銅貨がありながら五十錢銀貨をカチンと音さして御釣り！ハイ有難うさようなら、猶ブツブツ云ひながら下町の方へ去つた。

小間物も賣らればならず、奨文も考へればならず、忙しい店番（評）

お學う　赤坂　成瀬靜江



秀逸

〇夜の病床

神奈川縣　木村はる

私は如何しても命が無いのかしら、其れて無ければ何故此麼だろう、如何して始終體ばかり惡いのだろう、いつか父樣が「此れの體は生れ付き粗略に出來て居るのでせうか」つてお醫者樣にお問ひになつたが、ほんとにさうなのかしら、ずゐぶん不幸だ、否私より御兩親の方が不幸なんだ、折角快つたに又風引いて其上に昨日からは咳嗽が出て來たが五六日寢れば快るだろうか、例の肋膜腹膜が發して二三月も病みはしまいか、此間までの病には私が眠りからさめるといつも母樣は心配そうなお顏して、枕元

てジッと私の顔を見て居らつしやるので、驚かされる樣な事が有つたが、此頃では命拾ひを仕たと喜んで居らつしやるに、又此麽に成つて、其れ北家の方向ても いやそうては無い、先生が其麽事決して無いと有仰つたから、矢張運なのだわ、私の級の人等は幾ら時候變りでも病氣で休んだと言ふ事は聞いた事が無い、其れてこそ其人達の御兩親は御滿足なんだけど、私の父樣母樣は情け無く思し召すだろうね、神樣は私を助けて下さらぬのかしら、如何し樣と思はずハラ〳〵と譯知れぬ熱い涙に坊主枕を濕ほした、込み上げる咳嗽は一つや二つて止まらぬ、折しも母樣が「サ藥をお呑みなさい」と食後の水藥にパンを添へて持つて來て下すつた、オヽ神樣は有難いのだ、ソーツお醫者樣もそう重くは無いと、どれ藥を呑みませう、吁いつも呑みにくい事、弟のいびきが何だか虫が鳴く樣、母樣は私が眠つたと思し召してか、だまつてお仕事を仕て居らつしやる、邊りはシンとしてかすかにドチャン〳〵と米のつく音のみする早く眠り度い。

病氣になると神經が興奮する、從つて名文名作も出來る（評）

○嵯峨の秋の曲をきゝて

美濃　八重子

藤紫の幔は開かれぬけたゝましき聲はとみにしづまりぬ、横たへたる蒔繪の琴ついゐたまふは二人の君爍き たる華燭は美しき姿を照す、前なるは齡の程二十を三つ四つこへ給ひけんと覺ゆ、品よき丸髷に結びすをう色の被布をきたまひ眞白なる面に薄墨の眉ながく愛らしき口元にはこぼるゝ許りの笑みを見せ給へり。後なるは齡の程やゝおくれ給ひけん、高髷島田つや〳〵しくかざしの金銀きらめき、黑紋付を裙ながく着なし、縮珍の帶を脊高にしめ給へり薄紅の頰いとふくやかに鼻筋とほり少しはぢらひゐたまふさま、またなくあはれにて實に開きし花の色香なつかしう覺えぬ、人々のさゝめきあふことを耳にしよく姿かたちのあへ給ふを見れば同胞の君ならん。細きおゆびに爪はめて靜かに、清ゐやつくりしらべそめられし其が爪音ゆるやかに、清く强からねど遠く響き渡りて、其の妙なるは玉をまろばすが如し、澄みたる聲にて歌ひ出て給ひしは……「小鹿なくこの山里」と心の底にしみ渡り、思ひの泉湧き出てゝ古き事ども浮び出てぬ、こは平家物語の一節よ、彼の文をよみそがさまの偲ばれ時しもあらば妙なる琴の音にて、この樣を聽かばやと久しき月日思ひつるに、今しもこの曲を眼のあたり聞く事の嬉しくて一しほ耳を傾けぬ。
大紋小紋、曲はいよ〳〵佳境に入り、聲高らかに「峯の嵐か松風かそれかあらぬか」と歌ひ出づる、あはれこゝよかの文の魄なり其聲一しほ麗しく響きぬ。

歌のこゑ／＼きゝつれば澄み渡る大空の月を仰ぎつゝ駒の跡の音たかく七草の咲き乱れたる中を馳せめぐりやう／＼に見あたりたる片折戸わびしく庭もあれて、虫の音に交りてきこゆる想夫戀、仲國の君のそが心地横笛取り出て吹き合せ給ひしそがみやび、實に今は昔の事なれど目のあたりに見えてゆかしともゆかしけれ爪音も低うなりゆき聲も細りしは小督の君の御物語かと偲ばれやう／＼強う高うなり行くは有明の月薄き月に送られて仲國の君の歸る姿かとしたはれぬ。あはれ曲はやめぬ聲はなくなりぬ、爪音も絶えぬ、されどいひしらぬ響は心に殘りぬ。

ゆかり濃きとばかりは下りぬ、心も身も我にかへりて、あたりの人の言葉耳に入りぬ、二人の君は物の明も見え給はぬとか、されどまなこ開き給へばさしてかはりたる事なく見えぬ。

あなけだかき姉ぎみの姿、あな美しき妹君のかんばせかたみに其姿其かんばせを眺むる事もかなはず、妙なる調にて其が心を通はし給ふか……神もつれなしや二人の君のすゞしきまなこを蔽ひしとは……されどかくなり給はずばいかてかゝる調を奏て得べき。

主意は寧ろ陳腐な方て、此種の文章は幾度も見たが、然し幾度見ても興を惹く（評）

○今日　　　　清子

今日は樂しみにして待つて居た日てあります、先日文子樣から、東京の兄さまがお歸省りになつたから、今度の冬の御祭には、是非歌留多とりに入らつしやい、といふお手紙戴いて、樂みにして居た日てあります。それに今朝になつて見たらば、何の事てせう、前のお山も後のお山も昨夜の初雪て、白銀の衣をつけた樣になつてしまひました、私はハタと當惑いたしました然しまだ初雪のとて、少ししか積らず、それにもう降つては居ず、雲もだん／＼淡くなりますし、折角樂しみにしてゐたのですから參らふと思ひました。

それて、何か斯やお仕事を終へて家を出ましたのが、十時頃てありました、雲は益々淡くなつて、時々きれめからお日樣がお顔を出される、雪は少ないから人の通つた跡はもう無くなつてゐる、それから少し行つて渡し場につきました。

片科川の淸流蒼う澄みて、上流に見ゆる絕壁の黑うたちたるに雪の斑につきたる、そが上に生へたる松の黑きまて蒼きに雪のつもりたる、絕壁に橫に生へたる靑き熊笹の紺碧の淵に映りたる、私は只、山姫が冬の化粧の美はしきに見とれて、恍惚となつてしまひましたオ、お粧飾（めか）して何所へ行かつしやるだ、といはれて氣が付いて見ると、渡し守のお爺さんが、向ふ岸から梠を手繰りながら來るのてした、顏を赤くしながら、一

すと隣村までといつて舟にのると、やがて岸をはなれました。

先日の雨あがりの晩でございました、丁度お前樣の樣な美しい娘が一人、是非渡してくれと賴みましたが、水は增してる夜ではあるし、斷つて仕まつたゞ、そしてお前樣其の次の朝になつて見たらば舟が無えだ、おつ魂消げて下流の方まで見に行つたゞが、一里も下の方の岩の間でその女の屍を見付け、たゞ、それから大騷になつたが、後でよくきいて見るてえと、あんてもはあ隣村の物持の娘だが、思ふ男があるのに無理に嫁さやられるので、その晩逃げ出して、その男の所さ行くべいと思つて來たゞと、そこで俺通さねえもんだから一人で舟をやつて、流れにまけておつ死んだゞ、戀ちうものは恐ろしいもんだとお爺さんが櫂を手繰りながら質樸な口調で話しました、私もおもはず涙を落しました。

舟からあがると道は大そうよくなつて來ました、お日樣にあてられて、木の枝につもつてゐた雪が、ポタリポタリと音を立てゝ落ち、雀も嬉しそうに鳴きはじめました、私は道々、渡し守のお爺さんの話の娘さんの不幸を思ひつゞけて、同情の涙にくれました、それにつけても、私は何といふ幸福だらうと思つて勿躰ない樣な氣がしました、それからやつと正午少し前頃になつて、文子樣のお家につきました。

○美くしき家庭

山梨縣　中村殿子

夕靄淡く立こもる田舍道を我が家へ急ぐ裁縫歸り卒然目に入りし傍への賤が家前を流る清き小川離に匂ふ白菊枝も撓む計りの柿の枝垣越へたる眞紅燃立つ楓二葉三葉と散る紅葉の淸けき池の面に訪るなど得も言えぬ風趣我に籠持つ手在らばかかる家を「秋の山家」として寫さまし物をと我知らず足を止めぬ平和らしき此の家如何なる人の住むてあらうと思入たる時親子らしき二人の農夫其の家の前に來りし時五六才計の少女かけ寄りて父ちやん兄ちやん御歸り其の際に出て來りじは此家の主婦ならん四十位にて髮は無造作の束ね髮身しまり甲斐甲斐しく滿面に慈愛溢るゝ優婦人二人の許に來りて夫ならん年上なる人に向ひ「遲ふ御座んしたね御疲てしよ御風呂が上加減てす御入り成さいまし」「あゝ左樣か」と長者は家に入れり此度は小川に鍬洗ふ若者に向ひ「御前も疲たて在ろう私が洗ふて上るからさあさあ御休み」「何に宜ふ御座んす御母樣こそ御疲てしよ御休なさい淸ちやんも今日はおとなしかつたかねと少女に言葉かくればいゝと眞面目顏して「私今日は一度も泣なくつてよ母ちやまに御手傳してよねえ母ちやん」と母の顏見上れば「そふそふ今日は淸ちやんの御手傳て御甘味御馳走が出來てゐますよ」「其は御馳走てすね」と洗し鍬持ちて立上れば少女は取すがり「兄ちやま御柿もいて下さいね」と云ひながら我が立方眺め我と顏見合せて羞しげに俯向く可愛らしさ噫美しき家庭かかる家に住む人は世の荒浪などは知ぬて在らう幸福

な人達嘸暗く成て來た母樣が待て居らつしやるて在らう急がう。

○朝　　豐後　桃の家賤女

起きて見ると雨はやんだが鬱陶しい。庭先きの蜂屋柿が一つ落ちてたのを、そつと積藁の中に入れて金茸採りに行く。風はないに灰色の雲は西から東に押寄せて行くが、次第にぬるいのはどうやら行き詰つたやうに見られる。お寺の本堂の裏の柿畑が赤い實のみになつた美くしさ、竹林を門の公孫樹も黃くなつた。村人が靑莚を後ろにした川向うの村人が靑莚を擔いて橋を渡る。牛乳配りが車を曳て道を行く、犬が堤を走る。村の家からは鷄が啼き交す。どんより靜かな海の面には陸近う漁舟が二つ三つ浮んで、伊豫の連山は雲に蔽はれてゐる。野末の山は黃紅欅靑などに彩られて麓に抱く藁家の三五、さては緩ふ曲つた流れの畔に水車のめぐるなど畵とも詩とも。林に入れば小鳥がチヽと啼く、するとそこでもこゝでも落葉をあせる音がする。榊の葉に宿つた雫がうしろ首にぽと〳〵かゝるのは五月蠅いが、そこに五つかしこに七つ松葉かぶつて雨にうるんだ、黃い茸のあるのは嬉しい。やがて籠て半分採りました。ま少し採りたいと思つて探つてゐると吃驚した。直ぐ前から雉子が羽音高く飛び立つたので、胸はどき〳〵して、淋しいと思ふとうす氣味が惡い。こそ〳〵林を出て坂を下ると左りの平地は墓場。籠を石の上に置いて綾子のお墓に參る。綾子、そは妾しの亡妹で十三の秋死んだのです。野菊と樒の枝を手向けて石塔の落葉を除けて居ると喇叭の聲が聞える。おゝもう小供が學校へ行くのです。海老茶袴も三三五五。大の學校好きだつた綾子のみ靈はこの丘の上から、樂しげに通學する生徒を何と見るだらう、と思ふとそれが緒になつて二年前の悲しい記憶――死ぬ前夜しかと妾しの手を握つて「姉さんあしたが始業式だな行きたいなあ、といつては黑目勝ちの霑んだ眼に涙を一ぱい泛べ、すや〳〵眠つてゐながら「雪さんと樋田先生がおいてたわ、母さんお禮せんかえ」と叫んだことなど――を續々思ひ出す天にも地にも只一人の、可愛いゝ妹を失つた悲しさ、あゝいつの日にか忘れられやう。名もわびし時雨月、椎の梢がざわ〳〵戰ぐと銀糸のやうなのがしめやかに降りだした。



下女　　京都　片破月

○硫黃山　　臺灣　志波梅子

我々は今日の天長の佳節をトして大屯山脈中にある硫

黄山の奇を探るべくまだきに出發して、圓山、士林を過ぎ北投に着したのが午前十時、それから爪先上りの細道を辿ること廿五六町、ともすると單衣の背は丸で絞るよふ、丁度小高い丘の上に棕子樹が繁て居るのであたりの石を集めて腰を下した。見下す前面は廣濶たる原野で二度目の稻は美事に實つて、大方刈干してある棕子樹や竹垣の中に散在して居る土人の家々に、旭旗のひらめいて居るには大君のみいづがかゝる邊土まで遍輝いて居るかと驚かれた、單衣の汗を絞りはするものゝ、さすが臺灣でも十一月となると何處となく秋めいて、風の音ばかりではなく、そこらに藤袴もぬぎかけてあれば、尾花も招で居る、大きなバナヽは垂れ下つて重そうに、そうして其大きな葉は四つ五つ、或はそつと細かにさけて居るのも、巻葉の生々したのに比べていとゞ物あはれてある、

忽天地が薄暗くなつたと思ふと、大屯山には半白雲かかり、霧か雨かチラ〱ふり出し、日光は俄に浮雲に閉されて荒き風は病みて幾程もなき我髮を散々に亂し其上硫黄の惡臭は鼻をつくのである、山鳥が一羽鳴て過た、丁度稚子の母戀ふる如き聲して……我胸はあやしく騷ぎぬ、去年の秋亡せし愛兒の、この深山の靈となりて今し我等を慕ひ來たのではあるまいかと、アヽ鬼氣天地に充つるとは此瞬間の光景であらう、忽雲はれ日は前より一際ヂリ〱と照り出した、輝く光に力を得て水筒の水に渇を醫して再硫黄山へと向つた、

十町ばかりではや彼方此方に白い煙が見える、近いて見ると口徑は五六尺より七八尺で黄濁の熱湯沸りつ涌きつ漲りつゴー〱と恐ろしい音をたてゝ、それが又谿に響く物すごさ、新しき魔風一陣大屯山は又しても白雲に包まれ立のぼる湯けぶりの末も分らずなつたと思ふと、美しい虹の橋は辿らば渡らるゝような近くにかゝつた。

○山の秋

朝

越後　瀧澤としこ

馬屋の傍の鳥籠の中で、鷄が羽搏して鳴いた。いつもの樣に庭へ出た、冷たく身に侵む樣な秋風は、ずうつと吹きつけるたびに後の芋の葉は御辭儀する。露を帶んだ白菊は、さも頭をおもげに咲いてをる。

籠の山雀は、聲高くさへづゝて上へ下へと舞つてをるチリン、チリン、と一羽二羽三羽と、一面黄金色に實つてをる田へと雀はおりた。お隣の信雄さんが、小石を投げると、一時にぱッと空へ舞ひ上つて、向の藪の中へ下りた。

赤黑紫の色づいた雲は、東の空へ行く、だん〱に明かるくなつてきた、東の空へは、ぱつと目のさめる樣に太陽が出た。

辛苦して作つた、朝顏はみじかい一生を終えて、實は熟つて葉はかれてをる。

夕

絶えまなく、立ち上つてゐた、杣の烟は消えた、野寺の鐘は、田をこえ、水をわたつて、微に聞える、短い秋の日は早や鎮守の杉にかくれて、くれそめた、向ふの小川の畔には、山がへりの若衆が、日にやけた、足をあらつてる。

日はいつか暮れて辰巳の方には、一きは光る火星は輝きそめた。

やがていづこの家にも、洋燈はついて障子に飯食ふ影も見える。

○テニス　岡山　田鶴子

久しぶりに田鶴さんのお相手しようかと兄様の發議で遂に裏庭でテニスと決つた。私と芳江さんとは東組浩さんと小兄さんとは西組大兄様はお年役に審判官はじめの三回は東組の勝利そりやこそチャンピオンの腕前見よと二人はひそかに誇つてゐた。四回めからはどうしたのかトーく七回の連敗モーモー私等は一生懸命になつて蹴つたがヤッパリ駄目兄様等には冷評される腹が立つて「兄さんなんかあんなキッイ、男のくせにいやだわ」と怒つて止さうと云つてる處へ妹がやつて來て姉さん萬歳と一寸は而喰つたが又勞を得て今度こそはと一生懸命こゝを先途と静かに始めた吾等が一念の通じたるか又は兄君等のやさしかりしか遂に東組の勝曉これてこそほんとの東組萬歳だ。

朝景色　埼玉縣　中村静子



○深山路　熊本市　六花

日は全く暮れはてぬ、なれぬ旅路の只一人深山の奥に行きくれては進まんに道分かず退かんに道暗く實に妾はほとほと困じはてぬさりながら此山をだに越へなば何れ里もあらん人家もあらん、さすれば此乾きたる喉も潤さん疲れたる足も休めん兎あれ角あれ進めるだけは進み見んとて倘ほも勇を皷して重たき足を引きずるに淋しき月光葉陰より洩れて我白衣のみいと白し、斯くて登ること數丁足はいよく疲れ道はいよく嶮しく老樹欝々として天に聳へ怪鳥の悲鳴おちこちに聞へ、かすかに噎ぶ谷水の音は妾を黄泉に導くが如き其物凄さ譬へん樣もなし、身は尊き御佛の御從者なるを御佛の守りますものをと我と我か心を叱すれどもさすがは強き男子ならぬを、一度懐々の威胸底深く刻み入りては、ハラくと笠をばたゝく落葉にも神おのゝき雑草踏みしく我草鞋の音にも魂奪はれもしや後の方より狼などの追ひ來らば如何に、彼茂みの

草の中より大蛇などのザハ／＼と出で來りなば如何になどあらぬ妄想のみむらがり來りては總身の血潮は一時に冷わたりわなゝく足は一歩々々死地に赴くが如し疲れし杖を持かへて里やいずこ人家やいづこと手をばかざして前途を見るに、いつはつよしもなき深山の中に幽かなる火の光りをぞみとめぬ、妾は實に嬉しかりし飛びたつ斗りに嬉しかりし、そは山守る人の住家と思ひたればなりき、重たき足も地につかず思はず小走りに一二丁進みしと思ふ程に横たはりし大なる木の根につまづきて草鞋の紐はブッツリと同時に彼灯は吹き消す如く消えはてぬ、こゝに至りては飢も疲れも絶望も恐怖も四方より起り遂に前後不覺に身を横たへぬ。梢を渡る幾滴かの露に眼を開けば草をしとねに石枕、吹く風寒くあかつきの星よう／＼白う夜はまさに明けんとして四隣寂たり、土にまみれし衣打拂ひ、おゝまたも旅路につかむかな、ゆるみし笠もしめなほし切れし草鞋の紐もしめなほし……。

○田舍の夕ぐれ　播磨　翠嵐女

お百姓たちが稻の取り入れに忙がしさうなのに、から早く出て行つては、人樣に笑はれはせまいかと氣づかひながら家を出ました。秋の日はもう山の端近くなつて、淋しい暮の色は一面に秋の野を彩どつてゐる。その美しい田の面には質朴な人々が嬉々として日の暮るるのも知らずに働いてゐる、その樣は丁度美しいパノラマの中に黑いものが動いてゐる樣です。妾は今一丁ばかり隔つた形ばかりなる田舍の湯屋にけふの疲を休めんと思つて、たんぼ道にかゝつたのであります。

道が曲つた所に、親子三人急はしさうにそこらあたりを取り片附けてゐる、大方歸るこしらへであらう。ふと見れば其女の子は妾が日頃愛してをる敎へ子でありました。妾と見て可愛らしく被つてゐた手拭を取つてしとやかに禮をしてくれました。妾は何だかうれしくて「おゝえらいね」とにつこりいたはつてやりますと彼も亦につこり。彼の子のそばには彼の子の母親が紅い襷に左手をかけて會釋される、おとう樣も丁寧に手拭をとつて頭をさげて下さつた。

あゝ田舍、田舍の人、田舍の人はどこまでも丁寧です惇朴です。これだから妾も上の學校に入るまでと、かりに職を奉じたもの丶、田舍に來て見ればどうしてもこのよい處を去つて、人情紙よりも薄い都に出ることがいやになつて來て、それにこんな愛らしい子どもまでも見捨てゝ、ふり捨てゝ、どうして去ることが出來よう、心が弱いといはゞいへ、敎への道は妾の尊い天職のように思はれて、とう／＼最初の目的はあだとなつたのであります。希望はあだとはなつたけれども、妾はそれを一寸もおしいとは思ひませぬ、否寧ろこの尊い天職を今まで知らなかつたことを恨みまする。ほんに美はしい田舍、この樂しい田舍で最も尊い天職を得たのは全く田舍のおかげと妾は大へん喜んでゐま

す。ほんに田舎、田舎は妾のこよなき樂園です、否、人生の樂園です。

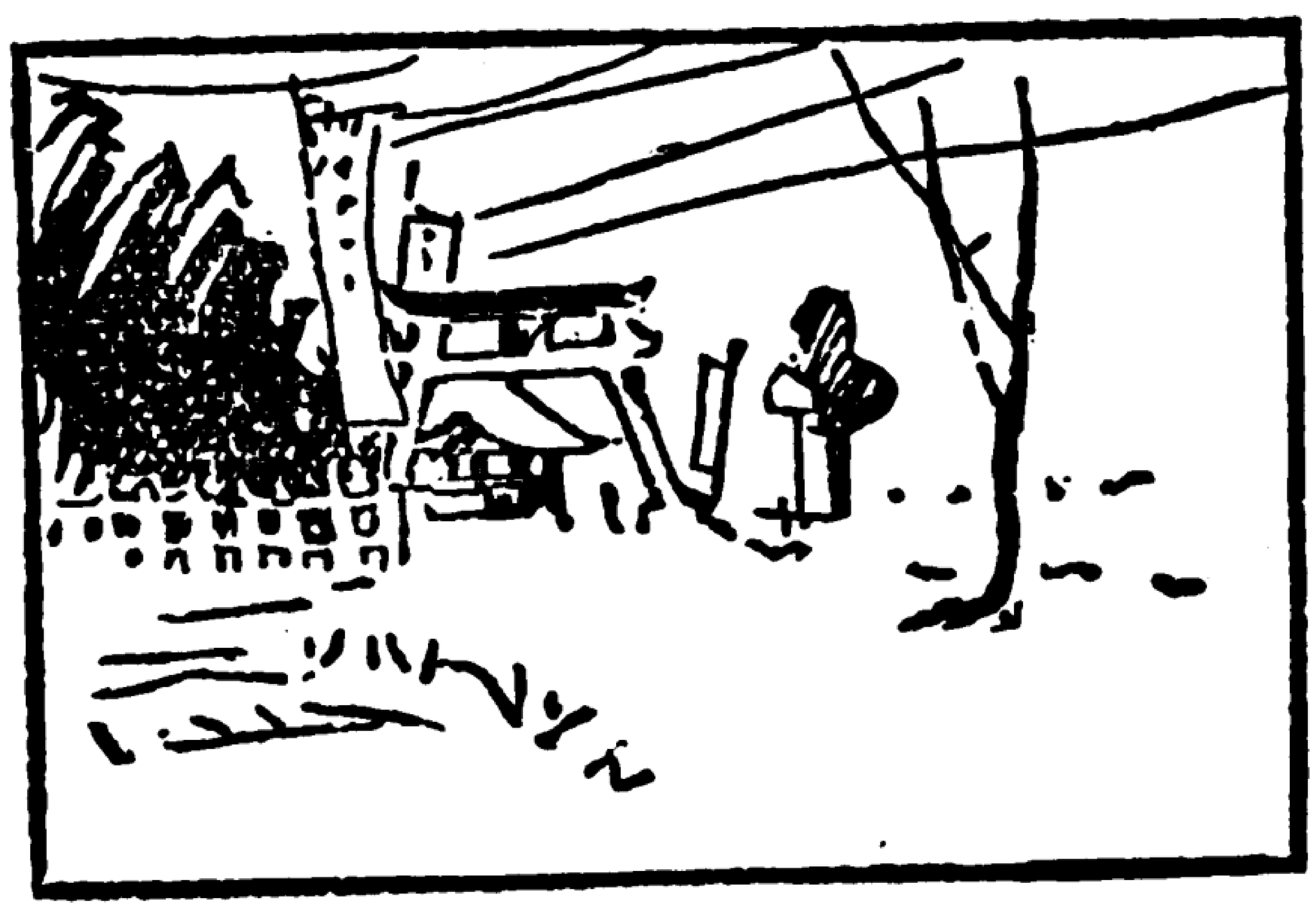
○月の戀　佐世保市　いちじく子

輝く紅の色映へて、夕榮はやくもむらさきの雲の帷幕をいまもれてルーナの月の女神はいだくソールの日の男神を戀しぬ、ソールの男神も亦月の女神をめでぬ。

月の女神は綠の黑髮ふりわけに紫の衣に紫の冠、さと紅らめし御顏のみやびさ、玉の如き面は薔薇色頰に、林檎色の唇、いかになまめく麗はしき姿ぞ、日の男神は紅のやさみすがたに、紅の冠いかめしく静々として出でましぬ、おゝ其御姿のいかに雄々しく勇ましきよ、この二神はこの戀永久に變らじとちかひき、星姫は二神の仲の罪なき愛娘、妹と呼び脊と呼ばれ樂しかりしは只束の間にて、こゝにも魔神の嫉妬まぬかれてやがて平和は破れたり、日の男神は悄なくも月の女神を打ちすてゝ白毛の駒に鞭ちて、さらばわが妹もうお去らばとたゞ獨り下界の暗を照しけり、月の女神はきぬ〳〵の悲しくて、我脊の君や今しばしともだへ泣く涙の雨、それよ〳〵下界に降れば人の子は露と呼ぶなり。

ルーナの月の女神は果敢なくも、みなしご星姫守りつつ、胸の思ひにたへやらで、ゆふべ〳〵に雲間より、別れし男神のわが夫を遙見て、踊らせ給へや脊の君よ姫は父よと叫ぶなり、と小さき胸の弱さにもだへしが共に逢はなんすべなくて、日に〳〵追ひつ追はれつ諸共に、かくて幾世を古りにけむ、床の冷くて幸うすき身を歎きつゝ、限りなき道今宵また、たゞ徒らにめぐり行く。

いなり社　大阪奥田ゑい子



○などり　靜岡縣　貞水

女子文壇、此世に生れ出でしより、早くも三年の春秋を送り迎えせし身の、至極健全に生ひ立ち數萬の愛讀諸孃の爲に日に月に進歩と改良を加へ、美しく編まれては、汽車に乘り、船に乘り郵便脚夫に擔がれて、どんな島にも山奥にも至り着き、薫りなまめかしき屏風の陰の、硯、筆立、生花迄、映り香よき文机の上に供へられ、白襟、白魚手に繙かるゝ御身はまさに幸福者よ、幾萬の令孃の胸の皷動を轟かせ、轟かせては失望させ、失望の次には又喜ばせ、戀かせ、幾萬の手弱女の胸の血潮をのぼさすはそも御身がわざよ、幾萬の諸孃の喜怒哀樂を擔ひて立つはそも御身がわざよ、二歳より三歳は又遙かに發達して一の風邪にもおかされず來りし四歳の御身、猶又發達して美しきは今更云ふを待たず。然れ共！昨日と過

ぎ今日と暮して逝く水の流れて返らぬあすか川の、さても名殘惜しや、思ひ返せば明て一昨年、妾も拙き筆を顧みず投書なせしに、博愛なる記者樣と先生の御影を以て時折は見苦しき我名の誌上に出てしは御身二歳の時なりき、其後妾は貧乏暇無しの上に、身に大なる障りありて筆とる事も成り難く、愛讀は續けて居ながら皆樣の發賞文すら讀み果さず、涙を以て一年過せしをぞましさ、されど妾は早くも元の身になりぬれば、及ばぬ思ひと知りながら金釘折の散し書きを、心の遣瀬にものして月のなかばには東都に捧げて走らせむ、月の末には御身に擔いて來れかし、元より諸嬢樣の一笑だに價するなし、さはれ、二歳の時の御身を見れば名殘惜しくも又なつかしき處ありけり。

○野の墓

大津　今村野百合

野の中に墓一つあり。

何所いかなる人の奥津城かは知らず、青き苔のむして字の表さへも定かならず、幾春秋を寂しき野のたゞずまひ、風と雨とに曝されて、角の朽ちたる、いと哀れ深し。

山の端を仰げば秋の夕日は力なくかぎろひて、丈の芒は風にさやぎて、去りもえやらず、恍け心に佇む袖にまぎれ入りぬ。黄に紫にうす紅に、和き雲の色の寂びたる野を彩りて、流れ行くのみぞ美しき。

萩は白く桔梗はむらさき、觸れなば露やこぼれん、手折る人とて無くてか、いとゞ咲きみだれたるこそ、なかなか哀れは深けれ。

さてもこの墓のぬしはいかなる人なりけむ。

問へど應へず、芒は風に戰ぎて、秋の日は寂びしくさびしく傾かんとす。

いづく迷ひての白蝴蝶、夏の名殘りを今更に、なよなよと舞ひきしが、さらぼひの旅人が、行きくる、八ちまたに、憩はむ清水見出でたらんがごと、つかれし翅のたゆたひに、つと墓に止りぬ、止りしまゝに身じろぎもせず。

吁秋の日はかくても暮れて往くらむ。

○御墓

渡邊秋野

物思はしき暮れ行く秋、誰か涙なきを得べき、ほの暗き森、歸り行く農夫のそれか、薄れ行く人影、突出し山の彼方にかくれぬ。風渡り尾花ゆらぎて、身はそゞろ淋しきを覺ふ、逝きまし〻母の御墓に、我は今思ひ出多き秋の夕をかこてるなり。

世の樂しみ失せ行き、人のなさけ消えはて、
身をおくさとなき世の、慰めこそ、エス君、

逝き給ひし彼の日、かすけき御聲に御座近く我は進みつ、瘦せ細りし御手に我手はしかと握られて、歌ひぬ、おゝこは母上の特に好み給へる歌なりしよ讃美歌開きて吾は座しぬ、あゝ如何で涙なきを得べき、胸せまりて聲は思ひ出でず、我は又思ひ出しぬ、泣きて明し〻其一夜を……

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以内用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

三等

○故鄕の友へ

小石川　奈美木翠

旅にゐて古鄕の便りをきくこそ何事にも增りて嬉しく懷しく、言ひ知れず胸おどるを覺え申候。況して思出多き古鄕の新年の殊更に戀しさ堪へ難くこそ候へ。今宵しも霜と凍る風の戶を漏れて燈の影冷たく筆もつさへ覺束なげに詩に耽るを、壁一重隔りたりし隣の室にては歌留多とりの催しありて宵より若き人のさゝめき笑ふ聲、娘たちの打ちわめく聲など、われん計りの戯に初春の名殘を興じ合ひをり候。餘りの騷しさに筆擱いて埋火搔立て、思ふとしもなく一人淋しさを託ちをり候折から、嬉しさは何に例へん小包はかき餠の御惠み、量り知れぬみ情のほどしみ〴〵と心に泣き申候、まことと旅にゐてはほんのお雜煮祝ひしのみにて候。月寒く森々と更ける夜、右に左に香ばしき匂ひの漂ひ鼻うごめかして自ら面紅うせし事も候らひしが、今よりは妾が窓にも此煙の棚引くかと思へば、此處に友なしとて何かは淋しからまし、古鄕には語るに溫かき友の待つあるものをと、思はずも微笑まれ申候。まことに妾が友とては御許樣あるのみに候へば、ひまもる風にもみ心おき給はれたく、先づはかしこ。

（評）氣の利きたる鋒つき、素人ならぬふしあり、多謝々々。

四等

○妹へ

遠の里にて　一孤女

一筆申上候暑い夏もいつしか過ぎ去り早や秋風の身にしむ候と相成候處母上はじめ御身もいよ〳〵御機嫌よろしく御暮し成され候よし萬々目出度存じ候私事も幸無事に務め居候まゝ御安心被下度候。さて此頃は某工場へ御通ひ成され候由いつもながら御前の孝心にはほと〳〵感じ申候しかし工場などはいやしきよからぬ女共の集合する所と聞き及び候へば就ては御身は家格もちがふ事なればよろしく心掛けさる人のまねなど決して被成間敷樣くれ〳〵も賴み申候仕事はいやしくとも心掛さへ立派なれば少しも恥しき事無之候蓮の花は泥の中から出てもあの樣な奇麗な花て有ります唯々心掛こそ最も肝要の事と存じ候右樣の事は

萬々有之まじくと存じ候へ共血に交れば赤くなるの例も候へば念の爲一寸申上置候。
いづれ近々の内に一度歸宅致すべく此由母上樣へ御傳へ被下度候。
末ながら時候不順の折柄せつかく御いとひ成さるべく候、かしこ。

（評）眞情溢れて見ゆ、文また巧ならぬが却りてゆかし。

五等

○奉公先より姉に

京橋區元數寄屋町太刀川方　今泉磯千鳥

姉さん明けましてお目出度う。
私奉公してお正月を迎へたのは此度が初めてよ、ちつとも面白くないわね、姉さんだつてそうでせう、一人じあ淋しいでせう。だけど宜いわね、お母樣のそばに居るんですもの……。それはそうと、若水は何方がお汲みになつたの、姉さん？えお母樣？。私昨夜からそれ許り思つて居たの。それから今朝あの可笑かつたよ。寐坊の坊ちやんと、じぶくれのお孃樣とが、何時もにもなく機嫌宜く、早起して、炬燵にあたりながら、「早くお雜煮をこしらえてお呉れ」つて言つて居るの、だけど姉さん此れは内證よ。あら何處かで羽根つく音が聞えるわ、おゝ羨しいこと。あら姉樣許して頂戴もう此樣なこと言ひませんから！。姉さん今日は元日ねえ！私すつかり忘れて居ました、あの、かるたを致しませう、羽根や手鞠もつきませう！だけど晝間は出來ませんから、夜、床に入つてから致しませうよ。姉さん本當よ。お話は未だ／＼澤山ありますが其時お目にかかつてお話し致しませう。さよなら。

（評）この文よく其の人の心をうつせり。

秀逸

○主家より故郷の姉に（男となりて）

無名子

十日ばかり前奈須町にて久留米の伯父上樣に對面致候思の外なれば互に打驚き候、されど其夜は用事の途すがらとて心も急がれ伯父上樣も何となく御急務の樣子見受けられたれば唯だ御住所のみ聞て相別れ候、一昨日は幸天長節にて嬉しくも一日の休暇を得て何より先にと伯父上樣の宅を訪づれ申候、姉上樣の仲よし成りしお光殿も御出で遊ばされ其日は夕方迄御世話に相成り且はいろいろと身の爲になる御話を承り殊にそなたの内はお前より外にたよる者のなければ一身に勵みて再び昔の家を興さねば成らぬと申されし時はおぼえず落涙つかまつり候、伯父上樣の宅は榮町十八番地にてこなたよりは程遠からず、以後は御やつかいに相成るべく候まゝ姉上樣よりもよろしく御手紙差し上下されたく候、かしこ。

（評）幼き中にも眞情溢れ居て頼母し。

○年の始め　岩手　秤賀みつ子

明けましてお目出度う存じます。お父様もお變りない由嬉しう御座います宅でも事なく年越致しましたから御安神下さいそれからお父様はいつお歸りなさいますの毎日々々お待ち申して居りますよどうぞねそちらの學校がお休みになりましたらすぐ歸つて下さいましな。あの今朝ねお隣りの濱子様が御年詞をのべにいらつしやいましたから御馳走もございませぬけれどおとめ申して座敷へお通し致しましたそして前の障子を開きますと緑りの松の上にさつと雪がかゝつて眺によい景色でございましたから二人て歌を作つて見ました只今お目にかけますからお直し下さい私などはじつさい和歌が出ないのを無理に作つたんですから隨分おかしうございますよおやつ九時四十分ですわ十時からかるた會をひらくつもりてすからこれて筆をきります。

（評）幼きが中によく其の情をつくせり前途有望、勉めよかし。

○稲刈の有様　佐賀　紅梅女



晉腰婦　深岡とら江

里は今稲刈の最中にて忙わしく候、妾も昨日の日曜日を幸に始めて鎌握り稲刈りを試み候ひしが仲々の愉快な仕事に候。されどなれぬ事とて五十株計しか刈らぬに腰が痛くなるには困り入り候。それで思はず「きつくなつた！」と云へば「物好きな事ばかりするからだ」と例の兄様の御悪口。「けれど妾お百姓は好き！」と申候ふに父様は笑ひながら「慰みにする間は何も氣樂だが本職となるとそれは苦しいよ」と申され候。妾つくぐ感じ候ふに世の職業に從事するものゝ等しく感づる事と思候。稲は五段計を一時間計りにて刈り卒へ候ひしが其の時の愉快さは又格別にて候。また次の田にうつり候ひしが妾はひとり逃て稲をこぎ初め候ひしに仲々上手に行くものでなく、容易に見えても熟練せでは速にされず候。手振可笑しく漸々に三束をこぎ終へ候。他の人に負ける口惜しさに其れよりは一生懸命練習し面白く相成り候へば十束廿束は何でもなく日暮頃までに三十二束をこぎ終り候。之なら妾も百姓は出來ると

獨り密かに思居り候へど。都にてはしたくともされぬ事、さぞ妾を御羨みの事と之ばかりは嬉しく候。紅葉も菊も盛りに候へどそれ所の事になき忙わしさ。來日曜には鎭守祭もあるはずに候へば御遊びに御出下され度待ち上げ候。先づはあらあら御知らせ迄、かしこ。

（評）田園の興はかくて盡きざるべし。

○花に添へて

熊本縣　富野かず夫

昨日まで盛りに咲き匂ひし花の、あへなく散り果つるだに、悲しき事にはべるを、今年の春も、早や暮れなむとし、妾の庭の遲櫻も、眺め少なく相成り、古き歌に、所謂、吹かねど散らむ風情なるを折りとらむも、本いと心なき業にはべれど、此まゝ雨風に委ねむも、もし意なきことゝ思ひ候まゝ、一枝折りて差上申候。もし御許樣の御文机の側にも生けられなば、朝夕の御娯みにもなり申さん、また、御許樣の一句を得れば、花も名殘なく散りはてんと存じ申候、なほ今年の春の名ごりにとて、折り置きし梅の小枝の、書物の間にありければ、この文の中に捲きこみ參候、たとひ花の色香は無之とも、何卒御納め被下度候、かしこ。

（評）さてやさしき御心からかな。

○東京の我子へ

三重縣　長井蓮月子

拜啓先日より御申越しの袷ようく仕立上りて今日小包にて送付いたし候間、御受取り下され度候、袂に入れ置きし三圓は夜業に仕立物して貯へたる金、父に内證なれば只袷のつきし事だけはがきにて通知なし下さればよろしく候、下宿屋に居ればいろくなる人と交際いたす事と存じ候、されど身分も職業も分らぬ樣な人とは餘り心安くならぬ方よろしくと存じ候、勉強は元よりすべきなれ共、たまには公園等を散歩して氣を晴すべく、くれくも身體は大切になさるべく候先は取り急ぎ、かしこ。

（評）どこ迄も難有きは母心なり。簡明なるところ即ち此の文の價値ある所以なり。

○都にある妹へ

尾張　内山文子

袂別ち候ひてより毎日吾妻のみ空打ち仰ぎ御身に恙なかれとのみ祈り居り候さ候へば御許樣には相變らず御健やかにて彌學務御勉勵の御事と存じ居候姉は花につけ月につけ共に手を取り泣きつ笑ひつしたる御身の居まし候はねば淋しさはいふばかりなく候得共四年後に錦着て歸り玉ふ時の事など想像して樂しく待ち居候さはされ世人の學問は東京に限るとのみ一般に申し居られ候へ共表ある物には裏ある如く立派に卒業の花咲か

せて歸國さるゝ方もかず多くあるべく又墮落して故國の父母を泣かしむる學生も許多ある由に承り居候格言に「水は方圓の器に隨ひ人は善惡の友による」とか斯く成功するも不成功の人も第一は友の善惡による事と存候。

御許樣には既によく御承知の事とは存じ候へ共何卒朱に交はらぬ樣御注意下され度こは姉の願ひに候よ追々寒さ相加はり候事故御用心遊ばされ度候。かしこ。

（評）文は未だしけれど其の心づかひが嬉し。

○妹の質問に答ふ

埼玉縣　中村勝子

皆々樣御無事の由悦び入候。扨て候文と言文一致との可否に就ての御質問、私の意見は左の如くに候。

候文躰は古より用ひられし文躰にて、言文一致躰より奥床しく女子には、最も適したる文躰にて候。和田垣博士は「候文は迂遠也、總て言文一致に改むべし」と申され候が男子はともかく、優しさを美とせる女子は、今のところは古より用ひ馴たる溫和しやかの候文躰宜しく候。殊に長上に對しては候文躰の方いふ迄もなく宜しく候。言文一致躰は簡易には候へども、輕浮に流れ易く殊に田舍にては東京言葉なりとて「のよ」「くつてよ」「だわ」などの語をトンチンカンに眞似て得々たる者頗る多く候が誠に笑ふべき事にて、自ら己の品位を落すものにて候。お友達には言文一致は然るべきも右樣の語は決して用ふまじく候。すべて手紙は後々に殘るものなれば充分注意して認むべく候。先はお返し迄、お身御大切になさるべく候。草々。

（評）簡にして盡くせり。

○菊花を贈る

靜岡縣　加藤だい

あなたより根分して給はりし菊秋深き昨日今日漸く咲き初め文讀む窓に黄なる白き赤きなど色とり〴〵によき見頃と相成申候分けて白菊は色も香も秀でゝ床しう候今朝起き出てゝ眺むれば昨夜よりの雨に露しげく何時になき眺めに候如何にもして一度はお賞の御言葉に預りたき者と存じ候ひしを降り續く雨に空しく色褪せさするも心ならず候まゝ雨に袖をぬらしつゝ惜しうと思候へ共そと二枝手折り申候一枝は母の靈前に一枝は露を含みたるまゝの此の花に候はしたなき使のものに候へば含みし露をこぼされんかとそれのみ心がゝりに候かしこ。

（評）やさしかりける事よ。

○子を失ひし人に

大阪市　辻廣子

老少不定は浮世の常と申しながら、さても痛はしき事

にて候かな。
忘れはべらぬ、おとゝしの水無月の中の五日、千代の、若竹すぐ〳〵しかれと、誕生祝ひの莚に御行末を壽ぎまつりしは夢か、さ程、逞ましくや健かなりし靜雄君の、今にしてみまかり給はんとは、かへす〳〵も口惜しうこそ存じ候へ。
まして長男の君にましませば、只ならぬ御いつくしみもて、神のまな子とおをしたて給ひけんに、いかなる惡魔のねたみなりけむ、貴き笑顏をみ膝に殘して、あえなくなり給ひし御悲しみ、お許は更なり、祖母君、父君の御心の内、推量りまゐらすだにいとたえがたきを、片言交りに妾の名を呼び、紅葉のやうなる手を翳して、縋りつき給ひし愛らしさなど思ひつゞけはべれば、胸ふたがり、眼くもりて、いかにとも言はん方なく、只々深き涙の淵に沈みはべり、夫れにつけても靜雄君の御守袋にと、拙なき業して縫ひ上げ侍りしが候ふものから、あはれ、十日の菊の花模樣とこそなり侍りつれ、御目に懸んとこめし心はいかで初めにかはる可きやとて、玉串のしろと共におふけなくもみ靈の前にたてまつり申すを、あつきみ心もてよしなにお計らひ下され候はんには、せめて妾の本意となり候はん、よろづは、いづれお目もじの節、悲しき秋の樣御伺ひ申さんとて。あなかして。

（評）やす〳〵と書きなされし中に無限の悲調を帶ぶ。

○奉公先より母に

鳥取市　上山千重子

御化粧室の窓近き一本紅梅綻び初めてよりは、お孃樣の御用繁く、日々のお花見に御伴のみ承はり、晝の根の長き春日も只夢のごと、氣もそゞろに過し居候。なつかしき母上樣には如何渡らせられ候や、健坊もおとなしくてか、春寒の夕ついうたゝねして、母樣の御手煩はさずやなど案じられ候。
想へば去年の秋の末よ、お源さんに連れられて、馴れにし故郷の宿と立ち別れ、野分の跡の佗しき野路を、辻馬車にゆられて、此處の御屋敷には參り候ひし、折柄雨の日の風さへすさべば、狹苦しき車中になつかしき我家の方のぞむ事もかなはず、やがては我行かんとする道もかく浮世の雨風はげしからんかと、安き心もなくて、心よはくも涙に咽び候ひしか、さりながら案ずるより何とやら、初奉公の世なれぬ愚さが反りて皆皆樣の御氣に召し、光や〳〵とわりなく仰せたまへば、思ひの外の心地して、先の心細さも憂さも頓みに忘れ申候。
さ候へばゆめ〳〵こなたの事御配慮下されまじく願ひ上候、其上朋輩も心安き人のみにて、年よはく至らぬ妾を何かといたはりて下されば、隔てなく睦びて、此

上なら樂しく暮し居候。
多分來月あたりには、御本家に御祝儀これあるとかにて、旦那樣も奥樣も御上京遊ばす筈に候へば、其時には幾分か手隙なるべく、久振りに暇頂きて宿へ下り、ゆる〳〵何かと聞え上げんと今より待居り候。かしこ。

(評) 思ふがまゝなる雛のはこび老熟といふべし。

○花片を封じて

徳島縣 若槻淑子

杜鵑血に啼く五月雨の頃伯母の許より給はりて我が園に植ゑ付け培養致居候黄菊白菊茅屋にふさはしからぬ程に氣高く咲き揃ひ候間兩三日の中にぜひ〳〵御許樣に御來車願ひて香り床しき花の邊りに毛氈敷き四方山の話に時を移し或は久しく調べざる妻琴の塵を拂ひて共に睦まじく彈じ交はして給はらば如何ばかり愉快ならん彼も又咲き出でし甲斐やあらんとそれのみ樂み居候折柄御承知の通りの昨夜俄の暴風雨愛する花や如何にと今朝未明に起きいでゝ園に馳せ行き候へば、あな哀れ、無情なるよべのあらしに吹き散らされて目も當てられぬ慘狀意外の事に思はずアッと叫びしまゝ暫くは茫然と瞶め候のみ後にて不注意なりしをさとり候へ共落花再び枝に返らず詮術なくて只僅かに殘れるを摘み取り封入致候ひし此花片せめてこれにて盛りなりし一夜の昔を忍び給はり度先は憐れなる妾が菊花の消息をのみ、かしこ。

(評) さりとは御傷ましき事にて候ひしよ。されどかゝる主人持ちし花の身の、よしや散りても恨はあらじ。



はたの用意

印旛郡 藤崎みな子

○婚家より友へ

三河 今井波津枝

只今御前樣も御存知の民子樣への御返文認め終り候折から草履の音も忙しげなるが家の前にてはたと止り候續いて叫ぶ郵便との聲に手持不沙汰に机前に控へて四方に有りし反古紙に無駄書致居候を急ぎ玄關先きまでまろばん計り馳せ出候へば嬉しや水色の封筒其の主は懷しき御前樣の御筆跡今一つは愛らしき紅薔薇に蝶をあしらひ金粉を鏤り付けし一葉の葉書その片隅に皆樣に宜しくとのみ表面三分の一に「自分は測量隊の長となり部下を指揮して今此地に暫く滯在致居候して朝から晩まで飛び廻り殆ど忙殺する程に御座候」とこは私が亡父の甥即ち從兄の君にて候御雙方の御返事もがなと斯くは書き

綴り中候何は扨御健やかとの御事承るは至極嬉しく搆へて御身御厭ひ遊ばされ度く候次して私も一家の妻となり老練なる姑様の御指圖の許に家政を整ひ忙しう世話女房然たる身も恙なう世渡り致居候へば他ながら御安心遊ばされ度く候。

（評）一氣呵成、する〳〵としたれど讀み了つて何となく呆氣なきは惜し。

○親しき友へ

南豊　藤の家　瑠璃子

菊よ紅葉よといふうちにいつか年の暮れと成ました。恐な心にはいつも今年は今年はと暮れに驚くばかり自分ながら恥かしふございます。けれど又も春が來るのだと思ふとなんだか嬉しうてなりません。さて先日は女子文壇お送り下さつて誠に有難くお禮を申ます。おかげで色々樂しく拜見致しました。中にも敍事文登賞の流星はほんに無邪氣で面白うございました。次の新體詩はさすが得意の山田くに子さん誠に感心です。それから小説四等の石女です。あの靜子が木村屋のおばさんによく似とつて獨て可笑ふてなりません。此號をおばさんにお見せしたですか。そして書簡文避暑地より友への文の活潑な事といつたら「朝夕海水に入りて鍛へ候身の日にやけ鐵より黑ふなり申候ひしは天晴海國女子の面影なり。」などと何といふ勇ましい書き方でしよう。まれには金縁眼鏡や入字髮やらオバケのお孃さんも投書して被居樣です。それから貴方友信欄をお見成つたですか。上坂して被居河野さんではないでしよふ。大坂清子と記名して今から投書するつて出て居ました。次號に何か作品がではしないですか。所で話しが變りますが國子さんから此内音信がありました。此の休みにはお歸りにならなひて造花の講習にお入りとの事です。貴女に宜敷つて呉々書いてありました。とにかく初春にはお伺ひいたします萬づお目もじの上。どなた樣にもお目出たふご越年遊ばしませ。

（評）さら〳〵と心地よき筆つき。

○兄の放蕩を聞て

伊豆　鈴木安子

亂れ書きなる文もて申上候日を追ひ長閑に相成候兄上樣には定めし御愉快に御勉學なされ候ことゝ乍蔭喜び居り候當方も無事に暮し居り候間御安心下され度候寔に申し苦しき事には候へ共此頃風の便りに何か兄上樣の身の上につき耳かすり致し候に付日々心を痛め候折柄一昨日妾宛にて東京萍々山人と認めたる書狀到着候に付別に東京には懇意の人も無きはずなるに如何なる人の音づれかと封押し切り讀み下せば今迄風の便りにうす〳〵と聞き居たりし兄上の身の上を――細々と認めたる書狀にて兄上には昨年の夏期休暇より此方如何なる心の迷にや名をきくだにいやらしき花柳の巷に夜を日に御通ひ被遊大切の大切の我が業をそち除けにし

て名もなき一賤女にうつゝをぬかされ候由さりとは如何なる御心得違ひより斯かる淺ましき御心持に相成候哉兩親の膝下に居て御通學の節は其れ等いやしき話などは人のするもいやらしそふな兄上にてありしに斯く淺ましき御通報を聞きし妾の胸ははりさくばかりに御座候いかで迷ひの道とは云ひ乍ら餘りと云ふも恐ろしき御心持に御成りなされ候ものかな又それが爲めに校長樣よりも何か時々御意見もあるとの事なるが校長樣は大そう御慈悲深い御方とは聞き居り候へ共地獄の顔も三度のたとへ餘り唯々にては終には退校とか云ふ恐ろしき事なきとばかりも限られず候間今の内に御改心の程幾重にも願上げ候斯く數ならぬ妾が諫言立てを致し候ては却つてちよこざいなと御怒りも之あるべけれ共妾も兄上の身の上を思へばこそ足らず乍らもおこがましき諫言を申上げたる事に御座候間何とぞ御怒りなく御改めに相成る樣かへすぐも祈り申上候早々。

（評）切なる情を寫すには聊か缺足らぬ心地す。

娘姿　名古屋　清子



○安産の見舞ひ

羽後　菊池りう子

紅葉ちらほら牡鹿山から散りそめて、小春長閑な樣には愛猫「玉」が姉さんより給はりし手鞠をじやらし居り候、昨夜は終夜、姉さんの事のみ夢見申して、明けて嬉しき朝飯の膳には電報の一聲に胸轟かせ、開封すれば、ダンシアンサンハハコトモブジ、父も母もにつこりせられ申し候、母上なぞは氣もそわぐ御飯も召し上らず叔母さんの所へでも行かれしにや未だに歸り來申さず父上にはお祝ひだとて一本晒して菊など眺め居られ候名は何とつけ玉ふにや敏雄、武雄、薫、などは宜しかるべくと存じ上候。

如何に愛らしき兒にてやおはしすさんと一人て想像せられ、姉さんや兄さんや私達の赤ん坊の時撮つた寫眞などとりひろげ父上に笑はれ申候、何んとなく心騷ぎして仕事も手に就かず唯姉さんが阿母さんに成つたことのみそれよりそれと思ひ出の糸を繰り返し申居候明朝一番汽車にて母上が御見舞に上るとの事にて候、妾も冬休みには是非參上致し思ふまゝ抱つこ致させ貰ふつもりにて候。

日に日に寒さ嚴しく相成り候へば、事更御身御大切に遊ばされ度、呉れ〲も念じ上候登校時間も迫り候へば先はこれにて惜しき筆とめ申候、あら〲かしこ。

(評)いかに嬉しかりけむ此の文よく其の情を盡くせり。

○都の姉へ返し

尾道市　君子

昨日は御多忙中なるにもかゝはらずいと懇篤なる御玉章に預り誠に有難く拜し參らせ候毎度御心煩し居候父の病氣も日ましに快方に趣き母を始め家内一同大に悦び居り候まゝ姉樣にも先づ〲御安神下され度先般伯母上御來尾の節は本病と共に甚だしく神經を痛め居り候事とてとや角と取留めもなき事のみ口走り遠路態々御見舞を賜り候伯母上に何と御挨拶申さん術もなく母と共に大方ならず心痛を覺え候ひき。さるを廣き御心の伯母上には露御氣にもせさせ給はで却て優しう一夜を帶の儘にて何くれと御世話下され候其お蔭にてか其より三日の後の一昨日あたりより心も靜まり食事もゆけて今日は床上まで致候是偏に伯母上の厚きみ情に因る事と感謝の情に堪へず候伯母上の許姉樣よりよしなに御取計らひ下され度先は取敢ず大亂筆のまゝにて御返事旁々一筆御樣子申上候、かしこ。

(評)簡にして盡くせり。

○慰藉せられし友へ

下總　花岡馨子

御情厚き御玉章忝なく拜見致し候不幸なる妾を哀れと思召され御優しき御慰藉の御言葉承り候につけまたしても湧き出づる涙に兩の袖絞り申し候何事もみな運命と思ひ斷ち候事と存じながら不甲斐なき身のともすれば悲し果敢なしの念胸に迫りて秋の夕べを涙にのみ過し居り候。

生れ出て候てより十九年の年月を浮世の辛さ苦しさなどつゆ知らで生ひ立ちし身の今かゝる悲境に陷りて初めて味ひし浮世の風染々と身に染み申候されども人は一度は苦しき境も越へざれば眞の人となり難しと存じ候へば今この苦しみは却て身の爲と存じ打忍び候得共忍び難きは母の御上いかに榮枯盛衰は世の習ひとは申ながらきのふに變る我家の杖柱とも賴みし父上逝きましてより日に〲細る生計の苦しさに年老いませる母上は淺間しや慣れ給はぬ賃仕事遊ばる御眼に眼鏡かけさせられつゝ幾夜溫き夢だに結び給はぬ御辛勞それ故か此頃はめつきりと肉も落ち御疲れなされし御姿拜する身の辛さ切なさはそもいか計りに候ぞよしや我身はいかなる辛苦艱難に遇へばとてゆめ厭はず候得共たゞ一人の母上のかくも御辛苦遊ばすかと思へば今更胸亂れ候て熱き涙留め兼ね申候あゝさりながら今の場合いかに泣けばとて歎けばとて詮もなくかつは御許樣の餘り歎きて自身損ね給はぬ樣との厚き御言葉も有之候事故もはや甲斐なき事には泣くまじくせめては力の限り盡くしていさゝかなりとも母上の御心休めまつるべく候間憚ながら御休心下され度候。

長々しきくりごと幾重にも御許し下され度候、かしこ。

(評)かくてこそ諫めし友の本意にも叶へり文また老熟。

新體詩

横瀬夜雨先生選



▲規定 詩形詩語何れも自由なり、成るべく振假名を多くし、句數は二十句以内とす、用紙も締切日も前同斷、一人一篇を限り明瞭に認むべし懸賞は甲種の規定に據る。

三等

○佗住居

岩代 天以子

鐘鳴りぬ、遠世の響。
目に見えぬ冠して魔の走せ去れば、
闇ひた〱とつめたくよせぬ。

木の葉吹き吹き捲く風の、草を靡ぎ靡ぎてはそよろ、
ひやゝかに死の風通す。

ひた走り死の風よする、怪しくも野のはて遠み、
鈍色の月影葉洩る、暗き樹のかげにして。

凶鳥のついばみ積める、ほの灰色の荒び巣に
若き日の煩悶に痩せて、吾が魂の詫住居。

鐘の音に耳うち蔽ひ、蔽ひては耳うちすまし、
しかすがに餘韻を惜しむ——
寂寥に身慄ふ夜や、
せめてはと、たゞせめてもに、
齒のきしみ——過し方抱きて思に寢たり。

（評）小說欄の驍將今また新詩壇に馬を進め來る、向ふところ皆首を俯れて靡き伏すか、どうか。

四等

○霜ばしら

信濃 有賀まさ子

うまし想の、いしずゑに、築きあげたる、霜ばしら。
いと奇しき、ゆめの宮居の、
銀のいらかの、きら〱と、瞳にこそうつれ。
ちりばめし眞珠は之輝る、なかにして、
あめに一なる、珍たから、うつし植ゑける、
『夢の樹』の、實のなる待たで、夜はあけぬ。
くづるゝなげき。しかすがに、黄金のひゞき。
瑠璃の香。妙なる光。つかのまの、

生命ほゝえむ。　——戀といふ。——　もろき影かな。

（評）「戀といふ脆き影かな」説破しない方がよかつたと思ひます。霜柱を小さな戀にたとひたのも、誰かゞ竿にかゝれる白露の瓔珞に比べたのも纎巧に失してゐるけれど美しいことは美しい。又曰ふ、十二月二十日の夜、多くの詩を點檢して中に至れる時、火桶の向うにゐた姉が、今の戀さん達はどんなのを好んで作るかときくから、「霜柱」を見せた。昔の詩の愛讀者たる姉は、おもひもかけぬように驚いてゐた。

五等

〇姉のまな子

東京　里子

姉の愛子は美しき　瞳の中にわれまきぬ
乳の香かぐと口よせて　君子が頰にあてゝ見し
堅くしまりしふところに　もろ手を入れて乳と云ふ
可愛や三つよわいして　母がみひざにまとひつれ
うれしきことゝ涙ぐむ　われは目したは初めての
うれしまぎれにかい抱き山なる婆の耳もとに
かゝる子ありとさゝやかばなつかし眼して吾れを見む

（評）女らしき作にてよろこばしいけれど、ちと混雜してゐる、わからない句である。

〇小春日和

和泉　辰井花子

おもひての、
戀の睦魂、愛の精、——　薔薇の香こそ泌み渡れ
何としもなう空澄みて、　冥府の秘め戸もすくと見れ
色には胸の痛めども。——
あゝ小春日よ束の間を、　斷れし夢の繪卷繰り
昔に返せ歡樂の　紅花咲かむ空華の園

〇春の小川

中津　やま川

誰が手ずさびか、優音して、ひけばなるらん一絃琴、
紫糸の里川に、　春ぞ流るれ花いかだ、
いつまで蝶の夢のせて、
下へ〳〵と永刧に、　つきせぬ水を堰きかねて、
たゆみては跳ね、たゆみては、又跳ねかへす白楊の、
下枝ぞしばしつなぎけるかな。

〇弔花

秋荻

野馬嘶く聲入日に落ちて、夕雲流れ流れゆく時
生れぬ秋野に我や白菊。
（現なや希望の胸を、飾らむとよそひしものを——
運命ぞ——今は……）
擠ひ男ら額に汗して、「疲勞ぬ」とさゝやきにしか。
行く方は朽ちしほけ土、暗黑に赴く墳墓の途よ
憧憬の己が希望も、むなしきか、消ゆるか、逝くか!!
——さはれ

美き人の春や十八、煩悶かね冷えし骸を
永久に幾廻りして
君が涙の泉涸るゝまで、咲かむ榮ある生命哉

○繪屏風

遠江　増田せん子

金屏めぐる奥殿に、
庭にほのめく白菊や
おぼえめでたき藤原の
大臣も今は出でまして、
留守居に侍るたをやめの、
さゝめく聲も艶のある。
傘召さするは乳人かも、
肩に流れし黒髪清く、
緋袴もゆるつぼね口、
手燭して見る白菊や、
媛の面の美しき。

銀燭淡く小夜更けて、
黄菊に秋の雨細し。

○春の貝

流星女

花も浮くべきぬる汐の、
北よりせまる山脈は、
交はす若手にうかびたる、
かたみにまとふ夢ごろも、
ゆふべの海の流れ落つ、
音にさへ人の戀しきを、

内海めぐる遠鳴に、
まさらき空の雪を帶ぶ。
花のやぐらは消えざれば、
醉ひたるまゝに別れたり。
山の氣寒き川波の、
あゝ船の灯の窓にこぐ。



朝　南多摩　乙幡秀江

○秋

香川縣　八田豊子

小田の稻穗は黄金して、
盛を競ふ其が上に、
頸のまはらぬ所まで、
其だにあるを翁等は、
たけ狩競ひ呼び歌ふ、
誰が悲しとや唱ふらん。

萩荻桔梗女郎花、
田面に群る野雀の、
舞ひ上りては歌ふなる、
川に釣下げ少女等は、
たゞ面白の秋の日を、

○なみだ

奈良　中富よしみ

夕べいぶせき破れ窓の
ひまもる月や影淡く
我が子の寢顏てらしては
小さき夢を守るかな。
風のうなりや子のいびき
遠く狐のなく聲は
たへぬ想ひを我が胸に
泉の如く湧かしめぬ。
夫によく似し子の面を
淋しくてらす月姫よ
のぞくなあ子のね顏をば
つらき涙のこぼるるに

○梅

向島　鈴木はる子

「紫つゝむ灰色の
朝日おほへる池の面を
白銀にほふ木犀の

雲水底にひろごりて
金魚は今ぞ我領と
神酒ごとうまし香に醉ひて

さびしら告ぐる虫の音に　はらゝ舞ひ來し黄ばみばを
よろこび心くれなゐに　たゝふやあはれおぞ心」
神の御ことにわな〳〵と　眼ぞとぢぬ悔心
底無池よ雲いづる　樹間をもるゝ夕日影
蕾つゝめる菊の蘂に　よき榮來らん暗示にか
金色の輪ぞ眼に浮ぶ

○母こそは　上毛　桃子

母こそはそこひも知らぬ、山の井の清水なりけれ、
はてもなく湧きくる慈愛、掬べどもいやわきにわく、
その水は血管溢れて、斷間なく身うちをはしる、
と〳〵と胸のとゞろき、大川の流れに似たり、
川浪に平帆をあげて、ましぐらに海へ〳〵と、
あゝ!!吾は!!國の船人、楫の手にたゆみもあらず、
見よ、浪は舳先にくだけ、白泡は舷あらふ、
さはれかの潮路はるかに、花やかの虹こそかゝれ、
今宵、月ほがらに冴えて、舷をうつ浪しづか、
眼もはるか北の毛野には、極星の光またゝく、

○蠶　結城　齋藤元子

黑く少さくうごけばか、こわいとにぐる妹の
母が刻める桑與れば、またのぞき込むおかしさよ。
朝な夕なの桑つみに、しよひかご肩に露の道
裾をぬらしゝ甲斐ありて、日ましに育つ蠶かな。
七日に一度の眠さへ、病もうけて四度まで
起きては桑も枝のまゝ、其の食む音は降雨の如。

○歌がるた　伊勢　守岡みどり子

『朝ぼらけ……』『吉野の里でございましよ。』
『今來むと……』『唯、有明の……ありました。』
『御免遊ばせ……一枚よ。』
『あれ!』『お手着きの二枚です。』
一室は今や酣はに、かるた合はせのさゞめきや。
墨面れし『松』が諧謔に、床なる福壽草のさゆらぎに、
女ばかりの夜は更けぬ。

○追憶　埼玉　淺見なみ子

山に登れば山の雲、おり居る極み野は青く
この野に續く遠方の、君が家こそ思はるれ
河に浮べばゆく水の、ゆるう流れて柳かげ
君が家ひたす河淀に、群る鳥こそ思はるれ
時のへだての羅の、かげをし透いて今も見る
君はやさしき愛妻よ、幻の中、夢の中
我が手に來ますうつゝ人、そを人妻と呼ぶとの
うらめしかりしさだめかな、(夢に生うべき弱き子は)
罪とな云ひそ思出に、只一時を醉はしめよ
寂し心にはぐくまる、夢こそ戀の名殘なれ。

○醉人賦　遠江　增田たけ子

唄誦して酒くむ右手に　盃ふくむ夕風わたり
世の愁ひ底に濁りて　けがれある夏の日くれぬ。
口かけし古りし盞や　きよらなる玉のうつはや
酒の色すめる、濁れる　試に盃あげよ。
人の世に恨を呑みて　弱き者弱きにはてんか
醉もせず唄ひもなさで　眼をとぢる鹿の巷か。
いづくかこれ人のふる里　いづくかこれ人のおくつき
世のはじめ誰か傳へし　世のをはり誰か敎ふる。
知りがたき道にまよひて　あやまりを世に敎へつゝ
ゑだ路に人を導びく　解がたき身とはならじよ。
酒がめに口唇ふれて　匂こそ胸に溢るれ
乾きたる夏の砂地に　夜の露のしみ入る如く。

○缺題　上總　池上しん子

月まろき宵なりき。　淋しらの野路ゆけば、
薄黒うぼかされし、　秋草の風に搖る。
古りたりな青水沼、　さび含む、秋こよひ、
寂寥をうれしとて、　立ちたりし友何處。

○魔むし　下總　小澤よみし

草にかくれて人を食む、　魔むしの性の心地よや、
神が手織の龜甲の、　錦の衣を身に纏ひ、
三角の頭おほぞらに、　きらめく星を眼に宿し、
銳き牙に身を護る、　雄々し勇まし我がまむし。

○山門に立ちて　下谷　工藤艶子

鐘なりぬ春の夕ぐれ、　山門の扉ぞ遲々と、
地なりして閉され終えぬ、　舞ひくるは花の八少女。
素絹に包みし輝か、　春の月心沈みて、
呪はれて生身さながら、　夜をひとり靈とならむ。

○懺罪歌　茨城縣　小泉濱子

山雀歌ふみ祠の、　椎の木蔭をさまよひて、
寥さ溢るゝ小さき胸、　まなこ閉して佇めば、
冥府の戸近き帷より、　運命さゝやく神の旨。
氷に似たる人の世の、　毒ある征矢に傷きて、
いためる胸をかひなでつ、　儚なき幻影を描くより、
しかず人より逃れて、　終日枯野に暮れむには。

○一月一日　信濃　壽美禮女

永久より永久に繋がるゝ　時間の緒の一節を
歳と名づけて數へんに　我は今朝より十七の
一瞬きに新しき　血の幾滴や胸に湧く

○夏の海邊　麻布　淺見すゑ子

むく／＼と雲か　眞綿とも見る
空高く海の上を　さまよふ影の
そは火の男神　弓すさびの炎にあきて
つとはきし　息吹の、こりてか。

見まはしてためらひぬ　恥らひか、
よき人は潮を見つめて　波の裏白く小招く
つとぬぎし大模樣　浴衣をぬけて
身は早も波にのませて　白き泡とぶ上に横たふ。

○臺所　　神戸市　平林たつ子

酷熱の眞夏眞晝を、　迸る熱火の上に、
すゝ黒き釜のかゝりて、　斷々に、たぎる湯の音。
乾反りたる爼の上の、　腐れ魚に群る蠅を、
ぎらぎらと怒る大出刄。　釜の湯は凄き音して、
沸き出しぬ。山なす泡を。

○夕ぐれ磯邊に立ちて　　石狩　篠原静枝

あした無限の時は來て、　ゆふべ無限にまた歸る、
くれゆく今日に幸あれど、　もゆる茜のあや色を、
たへに染めなす夕榮も、　寄せ來る沖の夕かげに、
今はたとめむ影もなし。

○片藥草　　名古屋　久江

藥もとめて蓬萊の、　郷に行きにし君なれば
道啓きぬる片藥草、　旅の思ひをなぐさめむ
曉、野べの露ふみて、　くめば温泉のとばしりて
胸に流るゝかなしみの、　古き血潮を洗ふらむ
深山がくれの賤が門に、　破げる閾をぬぎすてゝ
焚火のほとり馳走の、　酒は濁りて味なくも
家に眉よき娘子あらば、　谿の岩窟に藥草つみて
山神の怒り恐れざる、　高きをほこる戀あらむ

○秋は立ちて　　下野　野中とみ子

秋の破る衣打つ砧　聽て地盤に應ふれば
蟋はいさざしよくも立ち　「我等が義務は早や果てつ
いざ諸共に穴藏に。」
秋をよそほふ露の玉　木の葉を洩れて散り敷けば
蟬は羽盤みわろびれず　「心行く迄我れ鳴きつ
いざや讓らむ此世をば」
蛇ひとりのろ〳〵と　雷の音に僅に覺め
かまくび邊り見まはして　「あな惜しいかなこの寶
捨てゝ土窟に歸らんは」
尾花は招き風誘ひ　秋はかくして立ちにけり。

○鈴　　筑前　田中とよ子

鈍の暮色沈默の大氣、ひし〳〵とせまり來る此夕
我は大道にて耳にしぬ鈴の音、なつかしや其さゝなり
から〳〵とまろび來る如、やがて來ぬ我前に
母ならん若き人に手を引かれ
覺束なく歩みよる子の足下より
まろび出づる音なりけり
行きすぐればまた遠ざかる其さゝなり

短篇小説

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰入十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

四等

〇同化

神田區仲猿樂町十四番地山田方　山田灼子

其當時餘り好かれ合ひと云ふてもなくて、夫婦になつてから足懸五年目の最早今年もおしつまつた晩のこと、性質にもない夫が夕飯をすますと急いで又出て行かうとするので、云ふのではなかつたが、

「まあ何家へ。」と問懸ると。

「鎌田の所までだよ。」

「此樣な夜にですか、よく御出懸になるじやありませんか。」

「うむ一寸な……。」と直ぐ前の下駄をばはき懸けて紙皮の鼻緒が新らしいので堅くて容易にゆるみ想もないのを、苦し想に前に屈んで兩手て引き開け引き開けて、足の指だけでも無理に押込んでをる。

四五日前に主人の同郷人で鎌田と云ふ四拾近い男が尋ねて來て、今度東京へ引移る筈にしたから、多忙しいだらうが一軒家を見ておいてくれんか、君の傍なら猶更だがと云つて居た事を思ひ出して、

「あの人は未だ下宿を取つていらつしやるんですか。」

「うむ移つたよ。」と身體をのばす樣に起上つて、

「お前にや言はなかつたけれど、つい此先の所へな己れが見立ん中に自分で借りてしまつて——昨夜移つたのだ。」と漸く氣がすんだ樣に言ふ。

「よくねえ。」と妻君が言ふのを、

「なあにお前男一人の身體が只動くなんだもの、其れに行李と支那皮嚢位で荷物ッて云ふ程なものでもないんだし。」

「じや奥樣は後からですね。」

「其れがだよ、彼の男にや其樣な。」と後は口迄出して氣付いて。

「其樣な妻君なんて氣の利いたものがあるものか。」

「でも夫昨夜あるつて被仰つたじやありませんか、大層別嬪だつて賞めたくせに。」

「其れが。」と何日にないとぼけて。

「いや昔はあつたのだがね昨夜よく聞いて見ると四年とか前に離縁した想な。其れにや必つと譯があるんだらうと思つて嫉濃く聞いて見たけれど、奴中々話さないのだ。」

「其樣な御方でもない樣ですがね。」と妻君も流石に其人品をば想像して見てをる
氣付いて後の壁に懸つて居る櫻杖と鳥打帽とを取つて渡すと、受取つて。

「あの男は一寸小理屈を言ふよ。其れだけ氣が人と異つてをるて、何んでも妻君が自分と同化しないから駄目だとばかり言つてをつたよ。」

「其れなら夫此方から同化してやれば。」



「馬鹿な其れが出來るなら彼の男は零だよ。」ときつぱり言ひ切ると、さつさと外へ出ていつてしまつた。

其夜の十一時頃夫の歸るのを待ち受けて、

「御國の御方でよく話が御合ひになりましようね。」と妻君は夫が友人の少いのを知つてゐて話すと、

「お前の學校朋輩に於けると同じさ。」

「でも女同士の樣に忌味がないでしよう。」

「さあ如何なものだか。」と主人は連りに考へてをる。

「左樣すると鎌田さんだつて、何日迄も御獨身じやゆかまいから、どうせ御貰ひになるてしよう。」

「そりや貰ふだらうよ。け

れど彼人の妻君になる者は餘程考へ物だねえ。」

「例の同化かですか。」

妻君は其事が妙におかしくて、ふつと胸に浮ぶと直ぐ言つてしまつた。

今夜は洋燈のホヤの掃除がゆきとゞいてをるので、赤い光を一杯機嫌の顏へ照りつけられて、まぶし想に身體を斜にして外を向くと、

「ねえ夫　私共のは何と云ふのでしよう。」と陽氣に妻君は笑ひながら言ふのを、

「そりや二人の胸に問つて見るのさ。」

「でも私共は未だ一度も氣まずい思をした事はありませんはね。」

「そりやないさ、お前が强い時にや私が折れるし、私が强い時にやお前が折れるもの……ひよつとしたら此樣云ふのが本當の同化かも知れん、兎に角己れは鎌田の云ふ事には敬服しないよ。」

（評）今の作家で云ふと柳川春葉氏でも書きさうなものだ、狙い所は惡くないが、夫婦間の心狀が充分書き現はされて居ないから、同化の意味が徹底しない。

五等　○人の聲

京都市　濱部風窓女

兄の疾病も大分快方く成つたので三日許り病院へ行きませんでしたが今日は學校から歸ると直ぐ行く事にしました、勝手知つた私は長い廊下を右へ右へと曲折れて內科室へ掛ろうとした時、看護婦が二人何か話し乍ら行くので訊くとは無しに訊くと何んでも兄の隣室に女學生が訪問て來てるので許緣らしいと云ふこと、爾思ふと學生らしい男を二三度視受けた事が有りましたそれに肺病だと云ふ事を知つて居た私は何だか小說にでも有りそうな氣がして步き乍ら考へてる內七號室の前へ來ました、靜かに扉を啓けて這入ると兄はスヤスヤと熟睡つてる樣子、起しては惡かろうと思つてソッと窓へ寄懸つて植込を眺めると芝生は一面茶色に成つて椿の側に小鳥が二匹妙な恰好をして步いて居ます、冬と謂つても午後二時、暖かそうな日光が向ふ側の外科室の白壁に映つて頭部を繃帶した患者が茫然と庭を視てます、偶然私は振返つて兄を視ましたが未だ眠つてる樣子なので枕邊の雜誌の口繪を見かけると隣室で烈しい咽ぶ樣な聲がします、私は直ぐ看護婦の詞を思ひ出したので耳を澄すと男の聲で、

「京さん、僕はモー駄目だ」と力無さそうに聞える、

すると女の聲で、

「勇さん……其麼心細いことを仰在て……ナニも癒ら無いと確定つては居無いのですもの、氣を確にして下さいナ」すると男の聲で、

「京さん僕は感謝するよ」と力強く謂つたが急に沈んだ聲で「だがナ僕はモー其麼詞を訊く時代は既に過ぎ去つた、神に見離されて仕舞つたのだ」女は慄えた聲で「勇さん、貴郎は餘り悲觀し過ぎて被居るのです、私は貴郎を甚麼に便りにして居りますか……」後の聲は消えて仕舞ひました、暫時談話はとぎれましたが絞る樣な男の聲で。

「赦してお呉れッ京さん！僕は其の言葉を訊くと身を……身を切られるより苦痛のだ」女は泣いても居るのか微かに鳴咽く聲が洩れて來ます。

「あゝ僕の燃ゆるが如き希望はモー惡魔の手に奪はれて仕舞つた、京さん女々しい樣だが僕の過去廿五年は最も悲慘なものであつた、貧と戰ひ有ゆる迫害と奮闘して今日迄來つたのだ、考へて見りや僕は慥うして能く生きて居た」男は感極まつた聲で。

「京さん此の孤兒の薄倖に泣く男を慥うして今日迄活して有ゆる迫害に打勝つて來られたと云ふのは畢竟京さんからの大いなる賜物で僕は京さんが無かつたなら迚も生きては居無かつたろうと謂ひ終らぬ内亦激烈い咳が込咽る樣子、すると絞る樣な女の聲で。

「勇さん、モー何も仰在ないで下さい」と咽ぶ樣な聲が聞えます、良久して咳が歇むと亦男の聲で、

「京さん、今日は僕をして充分饒舌らして呉れ給へ、苦しいだろうが僕の運命は今や盡きんとして居るんだあゝ京さん僕は滿腔の感謝を君に爲るとゝもに僕は……京さんに何の報恩ゆる處も無く別れるのが僕は殘……殘念だッ」女の堰上る聲がしたかと思ふと旋て

「勇さん……私は……私は永遠に貴郎の妻てす……御安心遊ばして……」再び激烈い咽びが聞えたかと思ふと跫音が廊下に響いて女が出た樣子。

「看護婦さん！」と女の聲がする。

雜誌を堅く握り占めて居た私はモーたまら無く成つて無意識にツと立つた物音に兄が眼醒めて「芳さん何時來たの」私は慄ふ足で兄の寢臺に摺り寄つて、

「兄さん！早く能く成つて下さい……」と思はず兄の手を犇と握りしめました。

（評）病室から窓外を見た叙景の筆などなか〳〵巧みなものだ、會話も拙くはないが稍拵へ過ぎて芝居の臺詞めく、但し終りの兄に對する妹の一語は、自然で且つ意味深い。

○母

大阪市　春子

「私に代つて秋夫を大切にしてやつてお呉れよ」お父様のお身持の悪いばかりに、何の罪も無いお母様は少しの病氣を種にしてお里へ返して終つてすぐ後に來た繼母さん、嫌らしい毎日々々お化粧にばかりかゝつて仕事して居る時でも横に鏡を置いて覗いて見ては顔ばかり撫でゝ居るお時と云ふ女、何でも賤しいつとめをして居た女だと聞きました、これを妾達姉弟の母樣とお父様から云れましたが妾はどうしても母樣なんて口が腐つても云へません。

丁度去年の此の頃家の横手にある柿の實が赤う成つて、霜の下り樣とする十一月の末、何氣なくお夕飯のお膳に向ひますと母樣のお姿が見えませんので心配しながら不味く御飯を頂いて汚れた茶碗を籠に入れて裏の小川のふちに立つて散つて流れる木の葉の行く末をおつと見つめて居ますと暮れ行く横手の柿の木のあたりて、(敏子々々)、と振りかへると母樣、小聲で呼びながらお手招きして居られます、走つて行つて抱きつきますと涙で分らぬ位なお聲で、

「敏子、母様は、もう歸るのですよ、お里へ歸るのよ昨日若い女が來たらう、ですから最はや、此の家に置いて貰えないの可哀さうだけれど二人は辛棒しておくれよお母樣の病氣は直らないの死ぬのを待つばかりなんだものね」

情ないお言葉なので、

「お母樣、私も一所に死にますわ」

折柄家で(敏、とし!)と邪慳に呼ぶ繼母さんの聲が聞えましたので、

「さ、用事をして早くお歸り秋ちやんにも逢ひたいが涙だから……私に代つて大切にしてお呉れよ」

それなりに分れ樣とすると(敏子)と又、走り寄ると

「も一度顔見せてお呉れ。これがもう永別だから」

見上げますとげつそりと細くお成りなすつてお顔など見違へる樣。

分れて歸りましたが其の夜(これがもう)との御言葉が氣に成つて氣に成つて寝られぬまゝに、一夜をまぢまぢと明して朝早く小川の端へ立ちますと(お孃樣お孃樣)

繼母さんが來てから私達を大切にして、呉れた、乳母のお房が立つて招いて居るのです、行きますと、

「おゝ孃樣、奥樣は昨晩身投を……」

驚きのあまり妾はそこへ倒れました、氣の付いた時はお醫者樣やらお父樣やら秋夫やらが枕下に居てお父樣は涙を落しながら(許して呉れ)と只一言おつしやいました、それからお父樣は打つて變つて、妾達に優しくして下さいましたが繼母さんはまだ何所へも行きません、お父樣が姉弟に優しくして下されば、繼母さんには迚も辛棒の出來ぬ程姉弟は辛酷れるのであります、私は幾度、彼のお母樣のお入り成された岩根が淵の岩の上に立つたか分りませんが其の度々可哀さうな秋夫の事を思つては、あのお母樣の御遺言を思ふと心が鈍つてどんなに辛い辛棒でもあの弟の爲ならと思ひ定めました。

思ひ出せる悲しさに茫然として居ますと可愛い弟のわツと泣き叫ぶ聲に驚いて家に馳せ入る、はづみに足で洗ひ上げた繼母さんのお茶碗を轉ばして破りました。

「あゝ私どうしませう……」

あれ又暗にも高く見える柿の木の下で、

「敏子、とし子」とお母樣のお聲が……。

(評)文章も熟して居るし體も調つて居る、其爲めに一寸ホロリとさせる作だ、而し繼母の繼子いぢめは餘りに陳腐だ、此筆力を以て今少し内容の新しい物を書いたらばと思ふ。

○邪推

上

大阪府　滿壽美

泣く子わめく母、バケツの音や車井戸のひゞき雜然として騒がしく一しきり戰場のやうな裏長屋の夕まぐれその中をぶらりと大工道具を肩に定吉は、何時もは隣の細君や向ひの婆さんに挨拶のこゑもかるく愛會者よと評判の可い男なのに似氣なく、言葉もなく我が家の猿戸をくゞつた。

「オヤ、お歸りかえ、今日は大層早かつたぢやないか」……

「早く歸つて來ちや不可ないのか」、と、つゝけんどんな尖り聲、おきくは呆れながら、

「アラそうぢやないよ、只あんまり不意だつたもんだから一寸驚いたのさ」、と、につこりして、

「私やまだ早いつもりで今御飯をたきつけた所よ、ドレ急いでこさえやうね。」變つた良人の樣子に思ひ惑ひながら、それでもいそ〳〵と襷をはづして財布を懐にねぢ込みつゝ德利片手に酒屋へといそぐのであつた跡見送つた定吉は、ちよつと舌打をしたが其所らまわりを見廻して、そのまゝゴロリとあふ向けに横たはつた、カラ〳〵と慢しい下駄の音してついと這入つたお

きくは、ハッと、と胸をついて立ち止まつたがさりげなく「マ、お前さん一體どうしたの何所か氣分でも惡いのかえ」、とすり寄つて「昨夜も何だか頭痛がするつて、言つてゐてだつたから、風邪でも引いたんぢやないかえ、寒氣でもするんなら、そんな所にころんでちや不可ないわね、お前の好きな寄物でも取つて、熱いのでキューと引かけておやすみな、え定さん定さんつてば、まあどうしたといふもんだろう」

「ナアニ、何所もなんともないんだ」、と、暫らくしてから起き上つた定吉はお菊の顏を見てにつこりと笑つた、その笑顏の凄さおきくは覺えずぞつとしながら、「それぢや又親方とでも、いさくさが出來たのぢやないかえ、氣分の惡いことがあるんならそんなに隱さずに、言つてくれたつても可いぢやないか、今日は餘程お前さんは變だねえ」、「へゝゝ變にもなろうさ己らあいつそ氣が狂ひそうだ」、「オヤ」、と、 おきくは目をみはつた。



探梅　麹町　冷花女

下

おきくが案じて何彼と樣々にいたはるのを定吉は煩いと斥けて、何時もは二本の銚子にまつ赤になつて得意の都々逸を唸りだすのが今夜は湯呑に波々とついて一息き、蒼い險しい顏をしたまゝ寢床にもぐり込んだ、腑に落ちぬ良人が所爲におきくは少なからず胸を痛めて、今日の朝まで何時ものやうに機嫌よく戯言の一つも言つて出て行つたものが彼の樣子の變りやう、男といふものは一足外へ出れば七人の敵を持つとやら殊には良人は職人の、何彼につけて氣荒な仲間の人達と面白くないことても有つたのであろう……がそんならそうと私に打あけて話してくれても可さそうなもの、男といふものはア、も氣強いものか知ら、何を言つても煩いとばかり一も二もなく斥けて仕舞つてどうしやうにもこうしやうにも取りつく術もない今夜の有樣、こんな時に實家があれば一寸一走り母さんに來てもらつて詫びて樣子を聞いてもらはふもの、身よりの者とて一人もない心細さ。

と、ほろり長火鉢に寄りかゝつて良人が寢た後姿を

凝つと見て一雫、折りから表の戸をゴト〳〵と、「菊さん、おきくさん宅かね」、と思ひなしか忍びやかなこゑは正しく良人が友の丈次。

「あい」、と、おきくは襦袢のそでに涙を拭ひて、なえた糸織の袢天のゑりをなをしながら斯る折には頼もしい人のおとづれを心嬉しく、良人の方を見返ると、よく寝入つた様子に醒させまいと、そろり足音ぬすんで表戸の方え、

「きく〳〵」「エ」、とあまり烈しいこゑに驚いて立ちどまると、がばと蒲團をけつて定吉は血走る目に起き上つた。

「や、貴様、何所え行くんだ」、「私？」、「私しや丈次さんがおいでだつたやうだから表を開けやうと思つて……」「嘘つきやあがれ、此畜生、よくも〳〵己れの顔へ泥を塗りやがつたな、さあ、行きたきや行け、行け、行け、エ、行きやあがれ」。

狂氣の様な良人のさまに何が何やら譯が分らずおきくは暫らく突つ立つて居たが、さては！、と感づくと、口惜しさ、悲しさ、腹立たしさにたまらなくなつて身も世もなく泣き倒れた。

思ひもかけぬ家のさまに丈次は去るに去られず入るに入られず、寒い凩に袖かき合せておきくが家の外を行きつもどりつ。罵りわめく定吉のこゑと泣き入るおきくの聲が手にとるやうにきこゑる。

（評）何所やら廣津柳浪氏の作の面影ありて、文章も會話も遜滑なもの、されど邪推から起りし嫉妬——錯誤の悲劇、今は既に陳腐たるを免れぬ。

○少女心

三重縣　笹井きみ子

ゆく春の事でした。心の奥の奥の、其の奥の方でかすかな悲哀の感情が何うしても去りません、涙は絶へず頬にあふれ、見るもの聞くもの、皆涙の種となります。

あゝ春はもう逝く。妾の胸の悲しみは去りません。と思ふにつけても一種の涙——悲しくて嬉しい涙がはら〳〵流れて、其れが嬉しいのか悲しいのか、きつぱりと申し上げられません。恐らく『悲哀美』とでも申すのでせう。

さらでも悲しい逝く春、こんな云ひ得ぬ感に満たされた胸を抱いて、一夜まんぢりともせず泣き明しました。明日も明日も、同じ思ひに泣されました三日目、自然の疲労に遂床の人——病の人となりました。

今も尙病の人です。女だてら大膽ながら、今は何事も包まずに申し上げます。病になつた抑から、永い夢路の今に迄、片時も忘れ得ぬ秘密――其れも御話申しませう。

其れは細い雨が降つた日。

大方春の名殘の雨てせう。昨日迄は色を嬌つた紅椿も、今朝から夕べ、ぽと〳〵と半ば凋落し盡して、何だか淋しい夕でした。

前の小川の水が流れる、日が暮れる。

時男樣は未だ來ない。――時男樣は妾の友の兄樣てす、色の白い眼のぱッちりとした、一寸若い女なら、誰れしも好いたらしい方てせう。

とツぷりと日は暮れる、時男樣は來られる、妾の胸は妙に騷ぐ。と只、此れだけの事。

てすが、妾の心を打ち破つたなら、たしかに優しい時男樣に、戀しても居つたてせう。其れだけ胸はトントンとはげしい皷動、無理に靜めて、ランプの陰て、妾はぢッとして居りました。

その晩、――妙に陰氣な打ち沈んだ時男樣、常ならざれ言も云はるゝ人と思つて顏を見るほど、今日に限つて靜かな事。實際妙な晩てした。

何時やらの事、妾が薄化粧をして居りますと、ほんとに貴女は美くしい！と然も眞面目て斯う云はれた時、はづかしいは申さずとも、他面妾は、無上に嬉しかつたのてす。其の嬉しさに、ほめらるゝのが嬉しさに、何だか時男樣に逢つて見たい、逢つてほめられたいが一ぱい、其れから其れへの感情が遂戀になつたのてせう。逢ふにつけ戀しさが增す、逢ふにつけ時男樣は、無上に褒めて下さいます、其れはもう、ざれ言には相違ないと、思つては居るものゝさて、戀しい、なつかしい、其の時男樣、戯談も云はるゝ時男樣が、何うしてまア、斯うも沈んだものかと、一時は恥かしさも忘れて、しげ〳〵顏を見注めましたが、やッぱり沈んでいらッしやる。

『藥さん（妾の名）僕は琴が聞きたい。』

『えゝ、まア……』あまりの意外に妾は、只斯う云つたきり、亦も横顏を見注めました。

『山は憐れッぽいもの、ね、斯うあくがるゝやうな音が聞きたいてすよ。』

と、うつとり、涼しい瞳は氣の勢かやゝうるンて居るやうてした。妾は何と云つたらいゝやら、時男樣も妾も、木像のやうに默し合て居る內、

『僕は失禮しますよ。』と急に座を立つて外へ、外は未だうすら寒むいおぼろの庭を、しよんぼりと歸る姿が何だかいぢらしうて、堪らず妾は追ひすがりました。

其の時！

紅椿が一ぱい、地に美くしう散り亂れた垣て、時男樣は泣いて居られました。眞に悲調な聲で云はれた事……。而して、ひたと妾の手を握つて、

其の事も、半ば聞かずに妾は、無理に袖を拂つて、夢中て居間へかけもどりました。そして、

『時男樣が戀しい！』と妾は泣いて〳〵泣き伏したのです。

あゝ女程弱いものはありますまい。

其の日から時男樣は來られません。

翌日絶交狀が參りました。

（評）引締つた可い文章てはあるが、内容が餘りに貧弱だ、有りなれた戀の情緒を書いただけては小說にはならぬ、寧ろ敍情文に近い。

○逆家

信濃　山田くに子

今から三年前の事であつた。

「お孃樣、山の手の伊輪の家に誰か引こしましたよ!!」

それは〳〵突狂な聲して下女のお定はこう叫んだ、私は思はづ胸をつかれて。一寸眉を上げて定をにらんだが、たちまち思に沈んでしまつた、山の手の伊輪！と聞て身がふるえた、家に逆柱が三本！それかあらぬか建た翌年御主人が發狂して、をくさんを刀でさしてころし、お小供さんは伯父さんが引取りになつたが、で自分は家の、しかも其の柱の立つてをる間のはりへなわを下げてのお死樣――。それが今から十年前、私が八つの年であつたが……。それから後、立ちかはり入りかはり借りて來る人が、物の三つきと立たないうちに、さつさと出てゆく、それも五六年、つい此二三年は借る人もふつつり絶えて、空しくねずみの住み家と成つて居つた家、そこにまあたれが引こして來たのだろう、――「ほんとう？」とふり返つた時はもう定の姿は見えなかつた。

其夕、私は好奇心にかられて、一歩〳〵山の手の家に進んでゆく――。空にはまだ星もない、只くらい夕の色が一歩々々迫つて來るのであつた。

來て見れば、くづれかゝつた門が開いて、何かこうどよめいて居るが、障子がたて切つてあるので人は見えない、門を左に細い山道へのぼりかゝると此家の中の座敷が見えるのだ、私はこう何物の力にか引かれて山

道を登りはじめた、右を見ると燈が赤くかゞやいて障子が五寸程片開に、中の樣子がうかゞはれる、恶い事と知りながら、私は心におこる好奇心をおさへるあたはず、息をころして家の内に目をそゝいだ……。向つた所が床の間！ハツトした、眞白な、丁度大理石できざんだ樣な、白い翼を脊負た女の床おき、其かたはらにかけられた掛物の、中ば見ゆるは何かこう、人らしい顏であるが、おそろしい冠をいたゞいた、何とも言へぬ憂悲な面を天にむけ、手をひろげたらしい……其かけもの……かたはらに「シンチユウ」の燭臺が有つて、白蠟が今三分ともつて、靑白い火を悸かして居る……息は迫る身は悸く、私は見るにたへずかけもどつて來た誰だろう……胸が重たくなつて其夜は其の有樣を胸に浮べて、ろく／＼ねむりもやられなかつた。

こえて三日、私は用の都合で又伊輪の家の前を通つた

書物店　　近江　蕬菊千代



胸はなり出す、足は重る、其時であつた、ふと門に人が出た、私ははつとしてそこに立ちすくみ、おそろしげに見上た其人！オゝ……顏は靑く骨高く、目の妙に人を引付る、やゝ天を仰ぎぎみの二十三四の靑年ではないか……私は危く叫ばうとしたのを漸く呑んでいそぎ足に過ぎてしまつた。

一週間の後、あれはヤソの傳導師と云ふ事が、其家の怪談を知らぬ人が無い其樣に人に知れてしまつた。

＊　＊　＊　＊

人の心の目を開いて、しかも私の樣な、こんな罪にけがれた女をも、救ひに導くと云ふ嬉しい音づれを持つて引うつつた人には、魔神も畏れて手をひいたのであろう、三年の今日まだ何の怪しき事もなく、よく人を教へ神に導く、うれしいなつかしい、人として、私始め村のものにしたはれる其人、それは私が三年前悸た、其靑年である、今は父の家とも其家がしたはれるので、始からあの家には神秘が有つたの

だろうと、私はこう思はれてならないのである。

（評）始めの方は面白いが終りの方が詰らぬ、前の「少女心」が叙情文ならば之は一種の叙事文である。

○いゝ小母さま

紀伊　桐一葉

村落からは、少し小高い丘の上に、寶觀寺といふ禪宗のお寺があります、それは一寸名高い、古いお寺ではありますが、何ういふものか、今では昔の様に、參詣人もなく、殊に秋の末は格別の事で、何だか西行の歌にでもありさうな有様です。

明日は雨でせうか、さなくば今宵時雨でも來さうな夕方、もう充分に黄ばんだ一本の大銀杏の下、崩れかかつた階段の上に、今しも話し合つて居るのは、十二三歳を頭に、四五人の子守達であります。

平常でしたら、その大銀杏のぐるりで、鬼ごつこかなにかをして、幾分か賑かではありますが、かうした天氣の、かうした夕方に、靜かに話し合つて居るなどは、入合の鐘の音などよりも、遥かにさびしさが身にしむといはねばなりません。

「鈴ちやんの家へ、昨日見えた小母さんね、ほんとに綺麗な小母さんねえ。」と、羨しさうに云つたのは、髪に少しのちゞれはあるが、面長な顔は、まづ無難といふべきお町といふ少女。

「本當にいゝ小母さんなの、妾の叔母さんだつて、お母さんが云つてゝよ。」と、眼のくり〳〵した丸顔の、未來では、この中一ばん別嬪になりさうなのが、さも得意さうにこたへました。そしてこの少女にかぎつて脊には稚兒がありませんでした。

一寸云つておきますが、鈴ちやんのお母さんは、本當のお母さんではありません、そして鈴ちやんの家はこの四五人の中、一ばん貧乏なんです。

「鈴ちやんの小母さんつて、何んな方？、妾しらないわ、お町さんは、何故妾に知らせて呉れなくつて？、」と、恨めし氣に云つたのは、恐ろしく生際の上つた、年がしらと見えるのでした。

が、俄かに機嫌直したやうな顔で、鈴ちやんの方へ眸を轉じて、

「何處の小母さんなの？」

「あの、大阪の小母さんなの、妾も明日は大阪へ行つてよ。」

「おや、鈴ちやんも……」

四五人の視線は、等しく鈴ちやんを射るのでした。

鈴ちやんは、ます／＼得意です。

「大阪つて大そう善い所だつてねえ、芝居だつて毎日あるし、見世物でも何でもあつて、毎日お祭りの樣だつてねえ、そして叔母さんの家へ行つたら、こんな汚ならしい着物は、乞食にやつてしまつて、毎日々々立派な着物を着せてくれるんですもの、叔母さんがさう云つてゝよ、妾うれしくつてねえ。

四五人の子守等が、　しさうに、ぢつと鈴ちやんの話を聞いて居た折しも、突然に、

「鈴代！」と、非常い聲。

吃驚して、皆んなが一時に、聲する方を見ると、其處には、鈴ちやんのお母さんが、恐ろしい顔して立つて居ました。

「まあ鈴代、お前にも困つちまうよ、本當に、明日大阪へ行かうつてえのに、何てそんなにのろ／＼して居る、何んなに探したか知らないわ。」と、あたりかまはず、毒々しい聲で、鈴ちやんを責めたてました。

鈴ちやんは、猫の前の鼠の樣に、小さくなつてゐました。

やがて鈴ちやんは、お母さんのあとに、いや／＼とついて行きました。

殘つた子守等も、少し後れてついて行きました。そして何づれも、鈴ちやんの明日の出立を、うらやみました。

あゝ鈴ちやんは、大阪へ行つて、何んな辛い目をするでせうか。

風も吹かんのに、銀杏の葉が四五枚ちつて、かあかあと啼きつれて、一群の烏が、大銀杏の木の上を通りすごしました。

（評）之は又お伽話を讀むやうな感がする、而し内容はお伽話では無い、此の中の少女のやうな運命は、故一葉女史などが書き盡して居る、唯描寫の具象的なるが佳。

○別れの一時

北豐島　石川初世

横濱の波止場に今しも出港すべき○○丸の乘客で、十四五の人好のする愛くるしい女の子と其父らしい洋服姿の男とがある、其わきに見送り人らしい同じ十四五の、色白で髪の黑いのが目に立つ女子がある。

男はポケットから銀時計を出して見て居たが、やがて「菊江や、後二十分間が有るからゆつくり御話するがよい、わしは今一寸用達に行つて來るから」と云つて人中分て行つて終つた。

「花子様、私實に御別れがつらいわ、どうぞね此後も仲よくして頂戴よ、又御身を大切にね、それから、御母様の御病氣も一時も早く御全快の様に貴方が見て上て頂戴よ、ソレカラ……あの御兄様にね、よろしくね」後は涙に聲くもり絹ハンカチーフに顔をかくすのであつた。

「菊子様貴方もどうぞ御見捨なく時々御手紙をね、私悲しいわ、と後は二人共涙に暮るのであつた。

父は歸つて來た、船は間も無く出るので二人は乗り込んだ、デツキに菊江は目のふち紅くして立ち此方を見て涙ぐんでゐる。

汽笛は鳴つた、船は動き出した。

菊江は「それては……」もはや聞きとれぬ。

花子はハンカチーフをふつた、涙にぬれたのを。

菊江も前に顔にあてたハンカチーフをふつた。

菊江は何と思つてか、そのハンカチーフを海になげた

しかしそれは此の方へ來ない。

花子は自分の愛犬に向つて何の氣なしに「ポチよ、御前の心が有るならば、菊江様のハンカチーフを拾つてくれよ」と、犬は其時、ザンブ、とばかり海にをどり込み、ずん／＼と泳いで彼の物を口にして又歸つて來た、人々はアレヨ／＼と叫んで見て居る。

花子は嬉し涙にくれてポチを拭つてあのハンカチーフを見る、其面に悲しい／＼歌が書てある。

よく見ると自分の兄宛に。

（評）何だか長篇の一節を取つて來たやうだ、趣向は珍らしくも無いが、書き方が一寸氣が利いてゐる。

○紅梅記

名古屋　宮脇とし子

上

『そんなぢやお前、――其れて平氣のお前も餘ッ程安氣助だよ』

と云はるゝにつけ、咲子はもう殆ど身も世もあられぬ思が為るので。誰が平氣て居られやう、自分は其為格別此日比種々な事を思ふては、げつそり、朝の化粧の、氣は進まねど――鏡に對へば頬の窶れ、顔の色とては無いのてある。

『而しねえ、ようく考へて御らんが可いわ、誰の為てもないみんなお前の為なんだから。』

考へるにも、如何に不首尾て會社の方が免となつてから以來、自棄酒の成すとも無う不斷芬々熟柿臭い息を吐てる良人、それを見替よとて那様そんな假にも一旦良人と呼だものぞ。

と云ふに辭なく俯向く娘が窶れた肩先、泌み〲と見入て母は語を切た。

と霎時して、宛も、さも思ひ入たらしう、聲さえ胸に泌み込むと、『ねえ、左うぢやないかい、お前は何うかと云と、餘り眞澄さんの亂行に就ては多くお云ひてない樣だ雖、それはね、種々な事を巷説から聞くの、そんなぢやお前、それぢや第一若いお前が氣の毒でねえ……妾しや眞實に可愛想で〱……お前は近來痩せましたわねえ！』

と許母たる身をも忘れて、折重つて嘘唏なく。

下

『グープ、あゝッ、可い心持だ、實際朝酒は糟糠の妻を質に置てもといふが、實際實に何所の野郎が吐した知らんが、實に、全く旨く云の物だね、穿つてるね、談ずるに足るッ、とこいつァ失敗だつた、さ、北の方、實際惡くァないものだに、』とぐい、一息に干て美奈子の前へ差す、素りいナる口ではない、殊に婦女の嗜として一滴も口にしたよはない、それと知て今迄勸めたとはなかつたに——

『否御承知のいけない口てムいますから……。』

『いけない口でムいますからいけないと云んだな？、ふゝうむ、己の差た酒盃は受ても呉れず、しやりとて無理に呑まされもせず、うゝ、あァあッ、大に飲て大に喰た、どれ、それぢやおひけと爲て貰ふかな、早く片付た方がい樣な。』

素直に立て美奈子は膳部を勝手へと運ぶ。それから一連り滌濯て皿小鉢の音がする、と直、ひつそり閑と靜り返つて、美奈子は何所へ行たのか、たゞ、時々主人の咳拂のするばかり。其れも少時て、突然主人が手を叩く。

『美奈！　美奈!!』

酒の勢ひ可恐しう、狂者の樣矢鱈にパン〱手を叩く連り。

『何したのかなァ、』と火鉢に呑氣に肱を掛て、楊子て



五月雨　豊橋　白井沖奈子

齒をつゝいてはチヨツチヨと遣てる――所へ、「は」と聲も幽かに、襖を開て躙り入る。不斷伏目に、顏見らるゝを厭ふ樣、實は今迄泣てゐたんだ。

「はゞかりに居て失禮致しました、何か御用で……」

と聞き取りがての小聲である。

「なに〳〵、美奈さん、又何らか爲やせんかとね、はツは、隨分これでも妻君思ひの妻君孝行――所でと、もう勝手の片はついたかい。」

「は、もう……、」の辭半ばに、「先々、此方イ火鉢の方へ來るが可ぢやないか。」

「は？」

けども美奈子は浮ぬ色、所へ以て「あゝ醉た、實際、羽化登仙の思と眞實眞個に醉た、グーブ、あゝあツ、はこれ！　かはツは。美奈さん、お膝拜借と願ひたいね。」

云ふかと思ふと、どたアり長々と長虫の樣、喫き美奈子が膝を枕に、寢たかと思ふと直もう、他愛もない鼾三昧。

酒に荒める良夫が寢顏！、飽かず泌々瞶つてゐたが忽ち胸の迫るを覺へて――愓と狠狽て襦袢の袖に涙を拭ふ。爾て膝なる夢の破れてあつたに吻と吐胸を撫て下した。

（評）筆は達者だが、酒呑みの夫を持つた女主人公の苦勞が平凡だ、それから此作者は事實婦人であるか、或ひは假面した男子であるかは知らぬが、何れにしても必要の無い所へ、態々下がゝつた穢い事を云ふのは愼しむべき事だ、選者が削除した所を御注意あれ。

○ラーラ、イ、

長崎　吉野久美

十一月とは云へ、九州の且は又とりわけてあたゝかな長崎の事なれば、今日の食堂でもネルの單衣に冬肌着ですます人多い位……。

けふをも送りぬ、主につかへて、世のひかげ、うつれども、あまついのち、日に〳〵ちかくぞあるみむねかしこみ、いそしめる身に、いこひをつぐる夕べのかね。

と、うたつて食堂を出た時は、光りよわ〳〵しき明星のきらめき、夢のよう、天主堂の鐘は七時を告げる頃でした。

「メリヤン！メリヤン！ラーラは何處？」

樟の下に、眞白の着物を長くたれた組み髪とを認めました時、私はこんなに呼びました。

メリヤンは一寸私の方角がわからないので、クル〳〵

見廻してましたがバーラーの前に立つてる私を見付けました時ニツコリ笑つて、
「多分部屋でしよう」
と答えておいて、又向ふをむいて一心に何か話してます、ラーライヽ！何と云ふ可愛い名でしよう、否其姿は名よりも一層可愛いのです。
多くの朝鮮婦人に見る、長く總々とした黒髮は、組んで後ろに垂れ、少し小い眼の、澄んだ瞳、引きしまつた口元、情味を含んだ白い顔は人の同情を集めるに足る力あるので……小さい身體に胸を強くしめる裾は廣い服を着る朝鮮の女學生。
「ラーラは幸福な人だと思ふわ!! 何故つて、お故國にはあなたを心から愛して、朝も晩もあなたの事を思つて祈る深切な兩親と、可愛い妹のある上、あなたを好いて望を以て、日本迄も勉強にやる西洋婦人のお母さん迄持つてるじや有りませんか？ね、さうじやなくつて？」と云へば、
「てすけれども、ある人にあなたは家宅を持つておいてゞすかとたづねた時、其人ははい持つてますと答へます、けれ共其家と云ふのが、雨風にさらされたまゝとに見る影もない家でしたら、果して其人は心丈夫でしようか？恰度それと私は同じですわ、父は年老つたる上に病身ですし妹は未だ幼いし、今に兩親を失くした私が幼い妹を抱えて路頭に迷ふのが目前に見えるようですの、それを思へば私悲しくて仕方がありませんの――それは西洋人のお養母さんも有りますけれど矢張りね――」
覺束ない日本語と英語とを交えた言葉で、こんな大人振つた事を云ふかと思へば、又私の手を引つ張りながら「故國に歸り度くつて仕方ないことよ、私日本の御飯も魚も肉も喰べられないんですもの、味噌汁は少しは好きですけれどもダクトル菅沼に（肥えた人だから）なるそうだからいやなの、一番好きは菓子と果物よ、一日に一度丈御飯喰べて、後二度は菓子と果物とたべたら嘸好いだろうと時々は思ふの」まあこんな他愛ない事を云ふんですもの――昨夜故國から手紙が來ないと淋しがつてましたから、一寸訪ねて見ようと思つて校長室の側の部屋の戸を打ちますけれ共、返事も有りませんの。でも案内は知つてますし、思ひ切つて戸を開けて見ますと、もう部屋のうちは眞黒なんてす。
「ラーラ何處なの！」
見れば寢臺に突伏しになつて泣いてますの。

「オヤ、ラーラどうおしなの？何をそんなに泣いてゝ？お父さんの手紙が來ないんで泣いてるの？。」
「イヽエ吉野さんそうじやないの、今晩夕飯前にあの下女のお春さんが來てね、散々惡口云つたの、朝鮮人の癖に生意氣だのあなたのとこの王は今に止させられるだの、そして朝鮮人はどうしてこんな鈍馬な顔してるんだろうなんて、私口惜しくつてたまらなかつたのて、御飯にも行かずに泣いてましたの……。」
「だつてラーラお春なんかの云ふ事を氣に掛けるんじやなくつてよ、あれは氣違じやなくて？ねそんな事心配するんじや有りませんよ」
「でも氣違だつて英國人や米國人には云ひませんわ、矢張し朝鮮が弱ひからですわ、私新聞を讀みませんから自分の國がどんなかも知りません、あなた話して下さいな一體伊藤さんつて方は誰？」
涙に曇つた顔を暗のうちにも恥しげに鳩のようにもたげて見上る視線の、私の視線とふるゝ一刹那！私は今日迄幾多の外國人に接し交りながら、何一種の民族的嫌惡(？)を持つてましたのが全く影もなく、親姉妹の情誼にもました友情のこみあげてくるを覺えて、思はず其手を握りしめました。

あゝどうして私に今の朝鮮を、我等青春の女に燃る戀だの愛だのと云ふ觀念は露もうかばす、汚れのない幼稚な心で、一心に國の事を氣遣つてるラーラに說き明す事が出來ましよう。榮えの色香美しき牡丹の盛る限りは、否たとへ牡丹の花の色あせる世は有つても、ラーラの若き心に彼の氣違のお春さんがうつした不安の影は、永久にとり去る事は出來ませんわ、ね。

（評）民族的嫌惡を忘れて、衷心からフレンドシップを起すと云ふ着眼は面白いが、全體が散漫て、且つ朝鮮少女の描寫が未熟だ。

○暗愁

山口縣　露花

私は今葉澤の山の松露繁き亡き母の墓前に立つて居ます、見渡す限り蕭條たる秋の色が楢崎の山を野を森を河を包み盡して、防州の萬象は寂寞に悲哀に、恰度原始時代の樣に時が作つた變化は、私の萬感を懷く胸に和應しく造りなされたやうに思ふのでした、二十年振りに故郷を知つた私は何共名狀すべからざる歡喜の情が全身に滿ちて、踏む足は一歩たり共懷しさに堪へぬです。
二十年來且て忘れぬ故郷へ私は今歸つて來たのです、

縁なればこそ母子と名乗った七年を、懐しさに繰返す今はたゞ「冷たき石」にふり落す涙の氷れとばかり鳴呼月寒き海のかなた「テキサス」を立つて二ケ月、洋上に結んだ夢の一夜たりとも故郷を他所に、仇には過さなかつたが、今其戀しい故郷に歸り、なつかしい母の眠れる葉澤の山に立つて見れば今更乍ら、運命の酷手を深う感ずるのである、累々と立つ墓表の幾つ、風に晒され雨に打たれ、かくて永久に歸らぬ人の夢を師走の寒月が正面に照らして居る運命と思ふとつい我が母の半生の苦惱があり〳〵と描かれるのである。

母の長壽を願ふは母子として自然の情である、我血汗に代へた二十萬圓の財寶を我手に依つて母の前に捧げん時の嬉しさを、子としてどうして思はぬ事があらう、乍併私はそれが出來ないのである、それを願ふは我が母に苦痛を増さしむると同樣である、死して始めて苦を解脱せる我母としては、生存は寧ろ苦痛である、三十の短生涯に甘んじた我が母は世にも薄倖な遊妓であつたのです。



河　京都濱部郭公女

人は我母の短き命數に對してすら、些の同情を寄せては呉れない、否却つて積める因果ハ惡報として、冷やかに笑つた、成程相模屋お春は毒婦かも知れない、我母の爲めに家を無くしたものもあらう、親を泣かしたものもあらう、妻子を捨てた者もあらう、其他數へ盡せば社會に流した害毒は幾等もあらうが、夫が必ずしも我母の罪であらうか、若し強ひても母の罪とするならば、社會は何故母の如き多くの婦人を、藝妓として許して置くのであらうか、今も今絃歌湧き返るあの久保小路、長袖閃く紅燈の影に、態と造つた嬌艶に父祖が熱汗に代へた財は、瞬時の歡樂に散りつゝあるのだ社會は之を目して放蕩兒と云ふ然も之等放蕩兒に寄する同情はあつても、之等の犧牲になつて自己を沒却しつゝある藝妓には些の憐憫すら與へないのである、笑ふて彈くは身の務めとは云ひ乍ら、一夜靜に「自己」と云ふ者を考へた時、彼等の思はどんなものであらう金の爲めに身を賣られ、金の

爲めに媚を賣る、人知れぬ夜の紅涙を緋縮緬の袖にかみ占めて、社會を呪ふ眼は恐ろしく復讐に燃えるのである。

復讐――我等が復讐は金である、金に死んだ心は又金の爲めに多くの人を殺してやりたいのだ、我が嬌艶に浮かるゝ人の爲めに泣く親、悲しむ妻、何かまうものか、田も賣れや畑も捨てよ、人情も絲瓜も入るものか人情は我等の敵である、白首と云はゞ云へ我腕の續かん限り罪惡の有丈けを盡さばそれてよいのだ、社會の人が我身を歡樂の犧牲にする時、我は社會を金に舐す時である、面白し、捨てた身に何淸いものが入るものか墮落、墮落、底なき墮落に沈め、死して始めて人生を味ふ程の浮ぶ瀨のない身だと……。

「捨鉢」は彼等が社會に作つた性である乍併彼等とても木石でない限りは、一朝因果を知つた時の苦痛は又一通りではない、因果、我母の胸に抱いたそれである。

　私は我母の私生兒である、母が墮落時代の紀念である母は私に法律すら認めぬ私生兒の汚名を着する事をどれほど苦痛に感じたてあらう、今でも私は覺えて居る、「淸ちやん許しておくれおつ母さんが惡いのだから」燈じゝと瞬く有明の影に、添乳の夢を破つて泣く我を抱いては熱い涙の瀧と許り「惡魔だよ惡魔だよ、惡魔の子がね淸ちやん可愛そうね」得堪へず、枕を投げてガバと伏せたが、物心の付いた五ツの春を父の名聞かれた時の、母の蒼白い顏つたら、私は且つてかゝる女の尊い暗愁の色を見た事は無のである。

　其後私は再び聞かなかつた、之を聞く時の母の顏を見るに忍びぬからてある、母のお客の岡澤に連れられて米國へ行く前、相撲屋の女將が話して吳れた、父なる人の素性を今は云ふまい、素より戀でもなければ愛でもない、父子の名義を金に代ゆるも當然てある、父なる人の高い名譽に對して母は泣く泣く不承したのに違ひない、今日相撲屋の女將を訪ふた時もそう云ふた、金てひるまぬ母を、情に墮落して纏れた先を解かずに捨て、顧みぬ程の人を、夢さら〳〵父と思ふなと何思ふものか、他國に逐つた廿年、曾て一度見ぬ父を戀した事さへないのだ、あゝ私は飽くまでも母の子である。

（評）全然抽象的の筆て以て、感慨と議論とを並べたもの、文章も小說としては生硬てある。



新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

○菜の花の上に信濃の山々は並びてありぬ深雪かづきて　秋田縣　三浦紅袖子

○わけいかづち社へかよふ加茂川の並木の松や紫の靄　美濃　砂島敏子

○鶯の聲する方に日は出てぬ西の都の山にねぬれば　下野　野中とみ子

○潮がしら紅蟹の子の數あまた砂におきぬ春の日の磯　熊本　靜間富美

○紫や香の爐くゆる春の日の帳とも見ゆる曙の雲　弘前　佐野てる子

○居てつらし別れてつらし戀人はこの天地に搖蕩て泣く　周防　谷天葩女

○秋の野の思ひて多き花を見て涙ながれぬ二十四の秋　大阪市　武田つぎ

○紅の花咲く野邊を馬にして人と歩みぬ若き日の夢　伊賀　山村すみれ

○たゞ斯くてわれは云はじな此思ひかたりて君にうとまれんより　豐後　佐智子

○うとき目に眉上げとりし背をなでゝうれしきごとも涙する祖母　秋　波流星

○春の風わが六尺の髮の香を君に送るとやはらかに吹く　上總　渡邊汀子

○彩雲のとばりかゝげて月姫はうすくれなゐの衣してきぬ　上總　ゆき子

○風は荒き音して北國の蠣殼葺ける街おとづれぬ　磐城　遠藤桂子

○訪ふ人もたえてなき野の家のかどに誰まれくらむ青柳の糸　下谷　蕉雨子

○なつかしき君をおもへば故郷はほのにうかびぬ我眼の内に　下總　三橋ちよ子

○君戀ひてけふもめてぬれいくもゝち照頰に似たる紅薔薇のはな　麴町　浅井千鳥子

○なつかしき君をのせたる大舟はかすみの奥にたゞよへるかな　新潟　岡上緩子

○君を見て三時になりぬわがわかき胸のほのほは身み燒かむとす　若狹　津田汐汀

○冬ごもり春着縫ひつゝ君まちぬわが夢おほき二十になる日　肥前　白菊

○山のたきよき音まさり流れくる春とはなりぬ君かへりこよ　丹波　齋藤笑子

○晩秋や散る銀杏葉にたゝせます二十五菩薩菰のころもきる　阿波　西野ひさし

○秋の日の悲しさ集めながむるとわれはおもひぬ花のいろ〳〵　本所　三森ゆき子

　福岡縣　桔梗女

ひとり行く阿蘇の牧場の花小みち雲のやうなる山羊ども
○　上總　石井はる

詩經讀む師がおんこゑに水仙の花はふさへり朝爽の家
○　神戸市　加藤富美子

露淡き牧場の草に神いますごとおもはるゝ秋の朝明
○　四宮町　森井せい子

鄰の子は悶へ／＼て眠もやらず外は木枯らしの風吹きしきる
○　本所　相川富士子

秋の雨夜の入江の更けゆきて灯一ッ一ッ消え行く
○　常陸　黒田つれ子

おんやまひいゆと小櫛に梳る姉が御髮は六尺あまり
○　豐後　宮　士子

秋の花に君と語りし日を思ふ夜ごろとなりぬ月明うして
○　香川縣　西山かずま

もの云はぬ君のみ胸をはかりかねふしめになりぬ相よる火鉢
○　薩摩　加藤美枝

秋雨に金の細花香を吐きて君おもはしむ木犀の花
○　千葉縣　新井くに子

天の園の葡萄のしづく滴るや山紫に朝雨ふるも
○　千葉縣　木内日出子

春姫の御遊したまふ山よ野よ樂部司は笙ぞよき
○　長崎市　平田すみれ

夕暮や鐘の音ひくう蟲なきて淋しき里にわれまつ人よ
○　尾張　渡邊殿石子

あゝ膚に冷えて死ぬべきわが心剎那生きぬたふとき神よ
○　長崎市　一瀬みどり

寒き日や川ぞひの家いでゝゆくくろ髮人に露みだれちる
○　上毛　五十貝すゑ子

まる窓に小鳩放ちてほゝゑめるわが妹を美くしと見し
○　下總　秋山花[illegible]

羽おへる童かあらず目にも見えぬ何者か來て我胸を射ぬ
○　磐城　村岡瑞津子

六尺の黒髮けづる我妹子が鏡にうつる夏の夜の月
○　備中　林ふみ子

紫の雲まへちりて日はおちて蕎麥畑白ふ秋の風吹く
○　神戸市　平林たつ子

夜は明けぬ屋根の上には白鷺の羽のやうなる朝霧のして
○　和泉　辰井ふみ子

あられふる中にいたましわれとにし小さき菊は泣きそぼちゐぬ
○　品川町　三明千鳥子

おん涙わが袖つたひぬおん神のかもせる酒のあまき香のして
○　紀伊　室井白蓉女

ひたすらに君が面影しのぶ海棠の花散る山かげのまど
○　安藝　天蛾

み病に活けし山茶花花おちて[illegible]のゆくへに涙こぼるゝ
○　群馬　森下うばら

春の町奈良の少女は天平のおもかげそへり山ざくら花
○　攝津　島菊子

戀よ名よ榮えよ夕陽の影に似て此子二十を恨みに死なむ
○　茨城　川上代貴子

紫に香みし花の唇を誘き出てゝこし春の風かや
○　牛込　森はる子

神路山朱の袍きて宮人はあけぼのまてり白梅の花
○　やよ子

紫と白花さきぬ古塔のうすき日ざしに影落つる野に
○　土佐　[illegible]ます子

天地に君を措きては人なしと思ふ心もなほ淺かるや
○　伊賀　山村龍子

歌がるた眞白き顔に髮うたれ君小屛風にかくれ給ひぬ
○　本郷　三ッ森ふじ子

病む床に病みたる祖母の顔見れば云はむ樣なき淋しさ覺ゆ
下總　秋山よし子

人こふる思にに死にし少女子のおもわに似たる白百合の花
○　奈良縣　濱田せつ子

元日や本町通りに羽子つきぬ長き袖して隣の君と
○　名古屋　原田夢子

美しあえかの人の上案じうた占ひきぬこともなしてふ
○　安房　澤の女

青蘆のそよぎに朝のわが思いとこゝろよし三尺の船
○　下野　鈴木露江子

白き雲灰色の雲ゆきかひて野に花もなし神無月ゆく
○　京都　小笠原あき子

勤經の御燈明うすれまたゝきてやがて消えけり昇逝にしごと
○　相模　目代奈加子

神無月山はことごと紅葉して錦きかざる艶なるさまよ
○　豐後　鈴木さち子

島の秋天の河こそ故郷へ遠くながると涙す夜は
○　筑前　落葉女

いろもなく打ちむらがれる浮雲に物思ふなる我が胸にも似ぬ
○　筑前　吉田千代子

かずかずの花を束ねて戀君にさゝぐと思ふよき歌得し日
○　福島市　中川玉子

水仙のたてりしに似しかの君はあなとことはにねむれりといふ
○　奈良縣　中富よしみ

我が胸を奇しきひゞきはいと强く音して過ぎぬ何なりけるや
○　愛知縣　渡邊かせき

蛇とわが黑髮を綯ないて縛しめやせむいつはり人は
○　上總　鈴木梅子

初戀ふるやまひにやせぬ愁へぬ泣きぬ我が身を忘れたまふな
○　鳥取　增田高子

峯の雲うするゝ日なり山すその雜木ばやしに燃のなく
○　山口縣　空の花

なぐさむるものゝありやとながめ見ぬ大わだつみに胸なぎながら

梅かをりのゆかしき窓にきてものなど云ひぬうぐひすなく日
○　本所　磯野涼子

冬の月やまひになやむ妹の床をてらしてさびかりしかな
○　北海道　小林秋靄

碧の海みどりに晴れて白き羽の鳥あまたとぶ北國の春
○　京都　大井順子

淸くしう朝日ほのめく春の野や王者とおもへ馬上の人は
○　遠江　鈴木三樂子

東海道山と海との中の町荷車休み船止まり居ぬ
○　信濃　菊園女

春の宵人にまみゆと黑髮に香油ぬりけり外に小雨ふる
○　名古屋　渡邊政子

燃ゆる戀かたみに云はず少さき蠟に似て火に死ぬをくやまぬごとき
○　千葉縣　今井しげ子

なき君のおくつきに立つわが眼にはとゞめもあへず涙こぼれぬ
○　羽前　しら濱

花やぎし少女なりし日おもひつゝ夕空仰ぎ涙して居ぬ
○　岩手　富士根小枝子

大洋の水の青きをます足して波らむとしも夢みぬ春は
○　越後　靜枝子

みこもれる蛇ひとつ胸に居て幾日産みぬ苦しみの子を
○　磐城　鈴木紫子

血は冷えて涙は枯れぬ戀人にものうたがはれ死にぬとし云へ
○　越後　水谷睦子

小柱に衣そと觸れて秋の夜半逝きにし姉の來しかな惑ふ
○　麴町　淺井ゆき子

立てかけし黃なる障子の破れより秋の聲きく古街の家
○　高岡　梶川つゆ子

いと淡く殘る夕日に柿紅葉まなくもちりぬ行秋の家

新論文　編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき隨論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以内半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

四等　○眞美と虚飾

本郷區根津八重町五五、小澤方　乙 [illegible] 枝

花は人の手にかざらるゝをまたで、美しく咲き、玉はいろつやはつけられぬも、貴きは、これ天性の眞美のいみじき所とこそいふべけれ。さるを、たゞ外をのみ飾らんは、天性の美を失ひて、却りて、見おとりせらるゝ者なり。

昔、藤原の行成は、能書を以て聞えめでたかりけるが、當時内裏に扇合といふことありけるに、數多の人々はわれこそ帝の御ほめにあづからばやとの、我劣らじときらを競ひ、珠玉金銀のちりばめたるをぞ出しけるを、行成ひとりは、さはなくて、唯黒塗の細き骨の扇に、貴なる紙張りたるに、樂府の要文を眞草の二體に書きたるを出したり。やがて帝御覽じて、當日の優品は行成のを以て第一と定め、いたくほめ給ひしとなん。かく價を多く費して、金玉を飾るも、天性の美には及びがたし。かの時、行成の外の人は、いかに本意なかりつらん。彼等はたゞ、外飾にのみ馳せたる爲め、眞價をばいだすこと能はざりき。されば、美飾を旨とする婦女の身にも、衣服頭髮など、凡て外見を飾らんよりは、天性の四德九容のいみじく正しからんかた、黄金珠玉に優ること幾ばくなるを知らず。玆に外を飾ることも、あながちに、あしとにはあらねど、天性を失はぬまでになすこそあかず見ゆめれ。

舊式の美文風の論文で、所謂新論文の體ではないが、文章が確かで、言ふことも間違ひない、能文家たる要素がある(評)

五等　○折々ぐさ

上野國利根郡久賀村須川町三九、森下方　森下花子

◎凡そ物事を爲すに、二つの力あり。情の力と智の力と即ち是。蓋し進みて事をなすといふ、已に意志也、故に力としては是を論ぜず、先づ玆に某事件あり、其事たる皆て耳にせざる者なりとせよ、是に對して今、情及智に因する二力を合ふ、情の力は對手を呑み、智の力は對手と睨合ふ、前者は身を棄てゝ或は敵を殪せども、後者は敵を知りて退く事あり、强盗だといふ時前者は强く、後者は火事といふ時賴もし、何糞ッといふは前者、ハア成程といふは智の力なり。

◎大なるもの必しも大ならず、隱れたる者必しも卑しからず、時報子は頻々傳ふらく、曰く女子苦學生、曰

く獨身成効談と、影法師の文明に憧るゝ諸姉よ、柳の下にいつも鰌は棲まず、先づ顧みてわが力を知れ。

◎觀楓會とかいふ一群を見る、楓樹を折りて持たざるはなし、觀楓なら唯見る可きに、かくては盜伐隊なり、悲むべし好奇心の固まり、年々勝區を犯して俗境と化しゆく、此を更に淑やかなるべき女學生に見る、お轉婆さ加減、論にすぎたり。

◎考へる人と、考へない人とあり。考へ〳〵其後に初めて手を着く、大事にありては誠によし、されど餘り大袈裟過ること屢なり。反之聞きも果てぬに返答して洒落なりと喜ぶ者あり、便は即ち便なるべけれど、往々に眞相の批判を誤る。人にものを尋ねて、冗らぬ問題をひねくらるゝ、自烈たさと、上の空にて答へられしかと思ふ拍子抜けと、二者何の選ぶところぞ。考へ過ぎて成らず、足らざるも不可なり、考ふる人と考へざる人と別けむより、寧ろ考ふべき事と即斷すべき事との二つに別つの優れるに如かず。

理想の勝つた人（評）

秀逸

◯父兄に　筑前　鈴木たけ

女學生と言へば若き娘や妹を父兄の手許より離して都會の地に學ばしむる故必ず方針を誤るかの如く心得、まだ時の風に慣れざる父兄たちは、内に居て朝夕新聞ども手にし、折角奮發せし妹や娘を無理から壓へ、寺や町の裁縫所で事足れりと思ふけれどもそは維新前なればいざ知らず、今日の世には通用しない、父兄の手許を離れ學びて前途を誤まり誤まらざるは其人自身の胸一つにして學ぶを好まざる者に父兄が勸めて學ばしめ好果を得るもあり、成功を期し許しを得て學びし者が不結果に終るもあり、一樣に論じ難いが教育の多少により何れか善か惡かを視るにその差大にして今日の比にあらず、然らば子たる者學むで何の非かある、學ばずして何の利かある、事情の許す限り進んで學び進んで學ばしめてこそ始めて良妻賢母の道は明かなれ。

氣焔萬丈、然しもつともな言（評）

◯好意の缺乏　飛驒　光島雪子

今日の社會に反目、猜疑、嫉妬、冷笑、怒、泣、爭鬪などの忌むべき事柄の多くあるのは何故でしよう。其原因は澤山あるでしようが「好意の缺乏」も其一であらうと信じます。

「己れの欲せざる所人に施す勿れ」「己れの人になさるるを喜ぶ所己れ亦是を人に爲せ」と東西の二聖哲も云はれました。此の教言は實に宇宙萬般の道德の源泉であります。されど要するに此の教言も換言せば「好意」の二字に過ぎません。世の中は妙な物であつて進歩するに從ふて逆に好意は缺乏する樣であります。

今日の日本の社會狀態では自己の知人でないものは己

の敵であると見做され、師の影も踏まなかつた生徒は反抗を試むる様になり、昨の友も今日は路傍の人として睥睨され、商賈は詐り、老者に譲らず、兒女を扶けず、弱者を苦しめ、「人を見れば盗賊と思へ」主義を固守し、禮譲も友誼も省みず、反目し、駁論し、果ては些の恩怨もない人にまで濡れ衣を被す。要するに好意は信用なりと思はぬのです。

私共に最も遺憾と思はるのは、世の木鐸なりと自稱せる新聞紙が其の日々の紙上で、一國の名流を呼捨にしたり、侮辱的の綽名を附ける事であります。是等は實に許す事の出來ぬ事でありませう。

英國ではミストルを附せずに紳士を呼ぶのは無禮である、と云はれて居るとか？斯くてこそ社會の秩序は立つのです。禮譲は實に好意であるからです。

好意は社會の秩序の中の己の幸福を認め様とする他愛的精神の發表に外ならないのです。社會に好意あれば趣味ある、慰安ある、光榮ある、又道徳ある、微笑の平和は來るでしよう。

論旨少しく狭きに過ぎて、透徹を缺くが、態度の眞實と誠意は認むるに難くない（評）

○文明とは何ぞや　京都　田島薫子

「文明とは何ぞや」私は何時も、この了解に苦しむのです。

ある夏の事でした、私は、待ちに待つて居ました暑中休暇が來ましたので、都の紅塵に汚れた身心を清めようと思つて聖い古郷を差して歸りました。

歸着するまでは聖い清いと思つて居た古里が奈何でせう、私は大なる失望を致しました。私が小さい時から、春は摘草、夏はハンモック、秋は蜻蛉釣と慰藉の友として居つた村の眞中の小丘は切開かれて停車場となつて、日々、此停車場から文明の風が吹きこまれるのです。清いので名高かかつた琴の浦曲の濱は、月清き夜などは美妙なる松風を聞いて、言ふもいまはしい密會所となつて居ます。全國の模範中學とまで云はれた村の中學校には早、都あたりを追はれた惡書生の群が來て、村中の娘を食物にして居ます。嘆ぜざるを得ないです、其ればかりではありません。村に今迄聞いた事もない三味の音がしますのです、嗚呼こんな清い村に遊女屋が出來ようとは思ひませんでした。

それから僞か誠か知りませんが、某大臣が諸國巡視とかで、この村にお宿りになつたときのこと、村の某官吏の娘で、小學校の時私と同級であつた美しい人を其大臣が金づくで無理矢理に恥かしめたとやら。それを歸省して始めて聞いて私はもう／＼腹が立つてたまらなかつたのでした。

嗚呼文明、文明とはこんなものでせうか？嗚呼文明は太古の如き質朴の村を化して、地獄の如き罪惡の街となしつゝあるのです。大なる希望を以て歸省した私

は大なる失望と大なる恥辱を感じて再び都門をさして上りました。

○放言　　千葉縣　松枝子

一

人は如何にいふとも、吾人は正義に依りて進む、人は如何に沮めむとするとも、吾人は思ふ所を云はむとす。吾人が嘗て筆にしたるものにして、敢て或は世の人の厭忌に觸れたるものあらむ、而れども世人の喜怒は、吾人に於て何の疚しきものあらむや、正義に反するものは不正義なり、思ふ所を曲ぐるは自ら僞るなり、斯の如きは血ある人のなし能はざる所にして、吾人が常に筆にするものは、彼の生意氣なる、彼の正義を棄つる彼の自ら悟る能はざる、彼の人を僞らむとする、彼の痴漢に讀ませむが爲にあらず、眞に理を解するの人に向て、訴ふ所なり。

二

海老茶袴を以て汝等の威嚴を作爲すべからず、洋服と金時計とは、汝等の外面を飾ると雖も、また以て汝等の精神美と稱すべからず、品格は天爵なり、人望は自然なり、此の事實を知らずして、徒に自ら裝ひ、自ら傲るの者、豈憫むべきにあらずや、吾人は眞に獨り「スピノザ」の行性を愛す。

地引網　　名古屋　吉澤信子



三

扶蘇は始皇を諫めて、邊陬に流され、淸盛を諫めたる重盛は、其赫怒に逢ひぬ、嗚呼、忠言耳に逆ひ、良藥口に苦きの至語か、獨り昔も今も同一轍なることこそ恨みなれ、然れども記憶せよ、些細なる攻撃を受けては、自ら怒り、正當なる忠告を聞きては、自ら亂るは畢竟其人が寛容の精神に乏しく、自ら傲る更に高きによるのみ、しかるに世の教育家……最も寛大ならざるべからざる教育家にして尚此弊に陷るものあり、豈笑ふべきの至りならずや。

四

社會の裏面は暗黒なり、人間の心裡は醜惡なり、自ら上りて人を陷れむとし、自から進みて人を斥けむとし、反目と爭鬪とは遂にその秘密なりと知らずや、嗚呼、文明と反比例に退くものは、社會の

道德なり、吾人常に世人の行性を見て又一滴の泪なしとせむや。

○厭世に就て

豊後　鈴木幸子

頃者厭世と云ふことが大分流行して來て、世間には之に同情を持つ人、又之を嘲笑する人、種々ありますが玆にこの現象に就て、私の感想を簡單に述べて見やうと思ひます。

元來苦を避けて安につくと云ふが人の天性で、惟ふに厭世も亦此天性の發動に相違ないのです、如何となれば、厭世なるものは、人の此世を渡る間に、所謂人生てふものゝ裡に、或深刻な苦痛を感じた時、之を厭ふて安樂の地を別に求むべくする行爲に外ならぬ故てす即ち厭世とは、人に通有なる安樂を欲する思想の發動であると斷言することが出來ます。

厭世の因て起る動機や又其所爲に推して、假りに之を消極積極の二種として、甲は悲哀失望等より起る煩悶的厭世で、人生を唯だ果敢なきものと観じ、自己を勢力なきものとして遂に世を退くもの、乙は不平憤慨等より起る抵抗的厭世で、人生を偏に穢濁せるものと觀じ、自己を淨潔なるものとして遂に世を放棄するもの以上其動機と所爲とには差別もありますが、他に自己の安所を見出さんとする心事に至りては孰れも同一理てす。

要するに人には何人にも厭世的素質があつて、其れが或動機に觸るれば發するので、私は其動機に接した不幸なる世の厭世家に同情を寄せるものであります。

○靜思錄

信濃　北澤よし江子

○「心に背きて行ふ勿れ、公共の利害を顧みずして行ふ勿れ、思慮なくして行ふ勿れ、惑へる思想に任せて行ふ勿れ、務めて己が思ふ所を粉飾する勿れ、妄りに言を弄ぶ勿れ、餘りに多くの事に關與する勿れ」。あゝ、こはローマの賢帝マルカス、アウレリアスの吾人に教ふる處にあらずや、吾人果して此の言の如かりしか、否、世の輕薄者流と例を互して名利を追ひしにあらずや、かへり見ればうたゝ慚愧にたえざる也。

○また云はずや「幾くも無くして汝は冷灰となり、枯骨とならん。斯くて殘れるは汝の名のみ。名とは何ぞや、音聲のみ、反響のみ、そも亦忽ちにして熄まん」と。人世は是れ畢竟するに一大潮流のみ、木の葉の流るやたゞちにかくれ行く如く、人も亦速かに消えゆかざるべからざるなり。虚名に營利に汲々たる者はあはれむべきかな、彼等も亦つひに自然の公則によりて死せざるべからず。

○「假令汝は死によりて無に歸するとも、若くは他界に轉ずるとも、深く之を問ふを要せず、たゞ安んじて死の來るを待つべし。されど死の至るまでの間、汝の營むべき事は何なりや。神を敬ひ且つ祝し人に對して善を爲し自ら節して足るを知る、たゞかくの如きのみ」。

さなり、神を敬ひ正義を守り誠實をむねとし仁愛をかたむけて聖き生涯を送らむ事をねがはん。

○「人に說きて我が信ずる所に從はしめんとするは可なり。されど彼の爲す所にして正義と相反するあらんか、彼れと相絶ちて正義に從はざるべからず。若し人ありて汝を敵視し、汝を阻碍せんとせば、汝は安靜に、沈着に汝の心を保ち、彼の妨害を利用して汝の心を練るの具と爲すべし。而して汝は望むべからざる事を望む者にあらずと、自ら信ぜよ。汝の望むべきは何事なりや、他なし斯る正當の努力のみ」と。

あゝいかなる難關にあふも其向上的精神を以て進み而して天の命ずるまゝに從はん。

○繼母　紀伊　文子

世に繼母を惡く云へど繼母程氣の毒なものはなし。人の生んだ子を育てゝやりながら善くても賞められず一寸惡い事があればそれこそ大變、生の子なら每日有りがちのことでも、針程を棒の樣にさわがれて、惡評を立てられる。

義子のある家へは嫁きたくないものなり。

よく昔噺にある樣な酷い繼母はまあ百人に一人位なものなるべし、大方は痛いものにさわる樣な心ならん。其も無論可くはない、成るべく眞の親子の樣にありたきものなり、其には最初から周圍の人の仕向が大切なり。我知れる家に五歲の女兒を殘して妻は死したり、程をへて後妻をもらひしが姑なる人十日も經たざる中に獨取て除きたり、他人故を問へば我今少し家風など嫁に示したきも孫は可愛き故別居せしなり。我が居る中は孫は我を賴りて嫁になつかざるべし、我も除き父親もかまふてやらざれば自然繼母に親しむべしと云へり其言に違はず子は繼母に直ぐなつけり、慕はるれば他人の子でも可愛きもの、況してや生みこそせざれ我子と名のつく子なれば、深く愛して其後三人の實子を生みしも始と變らず、今も其家庭に和氣滿々たり。之に反して他の家にては矢はり五歲の男兒をのこして妻は逝けり、其姉なる人子なきまゝに甥を愛して、今度繼母さんが來ても坊をしかつたら伯母さん處へ逃げてお出てと前より敎へたり。間もなく後妻來りしが家庭に風波たへまなくさまぐ＼惡評たてられて、繼母なる人常になきゐたり。

誠に世の人の心得てほしき事なり。

○邪敎の猖獗　名古屋市　宮脇とし子

噫、咄、何らの痛心事ぞ。口に文明と誇るの民、國に今かゝる邪敎の跋扈しつゝあるを知れりや。

邪敎の本家本元これは大和にありと聞く。藥屋よりも更に大なる天理敎てふ大看板を處方にかゝげ、いかなる手段を弄してか、巧に、盛んに愚婦愚夫共を誘引す、それが手腕に至りては、寧ろ驚嘆？寧ろ敬服？其云ふ所、其の行ふ所、まことに一笑の値だになきそ

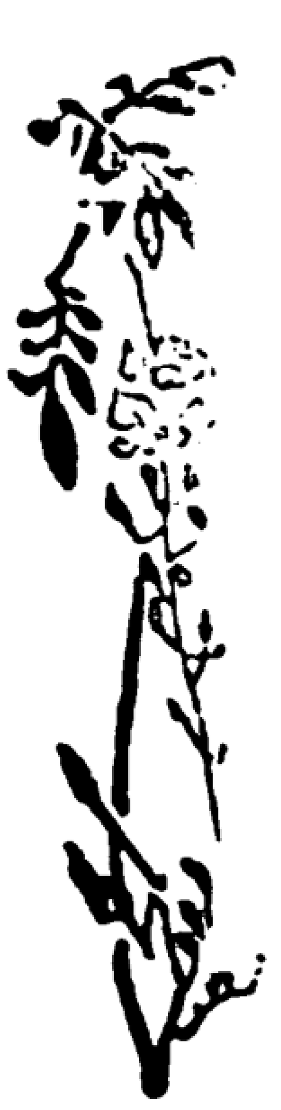
れを心より信じて同じく宛然狂者の如く、テンリイホノミイコト、助けよ救へと跳ね狂ひ荒れ廻る樣、あゝこれ是が常識あるの人の行か。乞ふ先づ彼が云ふ所を聞け、こゝに今生ける汝ら諸人、汝らは其始め假に母なる人が身を借て此世に生ひ出し汝らの今の身を始めとし、今日に至る迄に得たる總ての――金と云はず衣と云はず――ものを、かしこくも皆わが神より一時借りたるなり、されば、今迄ぼつ〳〵借りたるの品は、死する迄にみな返濟するの義務ありとする、かゝる愚かしき言を信じて返納奉納テンリホノ尊と騷ぐ愚かしき人、いかに世は廣くとも、あまりに、あまりになさけなからずや。而もその、年々歳々愈々益々本部の榮へ行くと聞いては、あゝ、これ、何とか云はん、悲しからずや邪敎の猖獗!。

○虚榮心

大阪市　靜子女

虚榮心と云ふものは、男女ともに有ります、然し女子の方が男子より、多量にあるのてす、彼のハイカラとか何とか云つて、裳を飾り、頭などを爛と光らして居か人達が澤山あります、夫も男子より女子の方が多いてす。試に此處に二人の小兒があるとして、一人は男兒、一人は女兒とします、此二人に御召か縮緬等の良い着物を着せて家に居よ、と云つて御覧、女兒の方は美しい着物を着て家に居るてしようが、男兒の方は乾度默つて居りませぬ、惡い着物を着てゞも外へ行きたがるに極つて居ます、或は女子がお祭にても、他人の良い裝を見れば、母に向つて自分も其の通りの着物を調へて呉れと云ひます、が男子は洋服又は筒袖の着物等を着て、人の美しい着物を見ても、尠しも意に解しませぬ、然し無いとは斷言する事は出來ないてすが、極少數てす、是を見ても男子より女子の方が、虚榮心が多いと云ふ事が知れます。

又、假に女子が、高等女學校を卒業するとして御覧、其人が夫を迎ふに就いて、自分の理想に叶つた人とか叶はぬとか云つて自分より下の學力の男子は嫌ひてある。妾は法學士が好きとか、文學士が良いとか云つて居られます、是も皆虚榮心が滿々としてるからてす。彼の小供の時分から、女兒が美しい物を好み、又は羨しがるのも、虚榮心てす。或は社會の狀態を推測して御覧なさい、田舍出の生娘が、東京大阪の如な繁華な處へ來ますと、木に餅の生る如な、甘い事づくめの話を聞いて、行く先に狼の如な惡漢が居りますのも知らず、我から深い陷穽へ箝つて行きますのは、抑へ難い虚榮心の爲めてす。女子たる者は、這麼恐しい虚榮心が深いものてすから、抑へるだけ抑へて、横道へ迷はぬやうに心掛けねばなりませぬ。



俳句

内藤鳴雪先生選



△規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

敷石や楡はら〳〵と廟の道　大阪　眞田芳子
盆栽の松みどりなり今朝の霜　下總　秋山よし子
櫻貝拾ふ少女や春の磯　京都　涙子
南殿に連歌の會や春の月　三重縣　長井漣月子
門松にふりくる雪は目出たしや　秋田縣　藤島さき子
旅人の笠の上なり藤の花　近江　太田靜花
そのあとにまたくむ人も若水や　越後　香花子
夜櫻や白粉くさき花ふぶき　京都市　大井順子
初霞大舟入りし港哉　周防　谷瑞枝
提灯に半面美女の吹雪かな　千葉縣　三橋たけ子
小太刀佩く馬上の君や梅月夜　名古屋　渡邊慶子
春の海珊瑚の船を浮かべけり　尾張　渡邊霞石子
俳庵の月や吹井に釜洗ふ　紀伊　前田かなり子
此の心法華は知らず冬籠り　上總　石井はる
灰黒の石に日の射す枯野かな　神奈川　岩澤玉江
梅さいて大道開く山の宿　佐賀縣　橋口御幸子
夕暮の門に柿食ふ童かな　羽前　釜屋まさ子
海靜かに船一つ見えて朧月　秋田縣　佐々木總子
山茶花の水タりと散て小夜時雨　島根縣　野の白百合
かり犬のはないそがしや今朝の霜　羽前　けいとう
書初の千代に八千代とうるはしき　美作　沼元さめ子
夏陰を行く樂しさふ手に帽子　靜岡縣　飯田千歲

殘月は森の半や霜ばしら　米澤市　釜屋まさ子
屋飛て社頭に木兎の聲低し　上總　相馬涙子
椽端に小猫眠りて梅の花　本郷　三森はる子
酒樽の底な囃りぞ嫁が君　神奈川　たまえ
家稀に茶の花一里春の風　京都府　村田まさ子
初雪と申されぬほど積みにけり　北多摩　春野すみれ
する事の皆新らしや松の內　三重縣　河原操子
水道もこも掩ふ今日の寒さかな　函館　中野白雪子
物すごき老の化粧や冬の月　京都府　有野坂枝
英雄の古墳にからむ蔦赤し　德島　西野恒子
凩吹て柿の落葉や鄉の秋　大阪府　勝田せい子
長谷寺は冬木牡丹の冬至かな　愛知縣　永田舞鶴子
堤行く妹が小春の市女笠　大阪市　辻廣子
紅梅の窓に老妓の化粧哉　日本橋　伊藤花子
月光の隈なき寺や花すゝき　京都　宮原みどり
節分の灯あか〳〵と沖の船　信濃　菊園女
更くる夜や籾する家の笑聲　下總　香取澄子
榾焚いて昔話しや桃太郎　豐後　桃の屋女
秋の夜の臼引く音や廿日月　遠江　原木富美子
子等騷ぐせどの小川やはつ氷　淺草　山岸直子
和歌の會開く日もあり冬籠　常陸　植田とし子
湯河原の湯に旅寢して松の內　上總　高山十四子
霜とけて冬の日影の黃なるかな　深川　牧野はん子
朝露や枯木にからむ蔦紅葉　相摸　目代假名子
蜘蛛の巣の飛ぶ朝晴れや菊の花　南多摩　金子れん子
山茶花の花びら散るやさんざ雨　磐城　鈴木勝子
浪音に秋は行くらし越の海　越後　水谷睦子
木枯や手負の鷲の落ち來る　常陸　中内泉子
若水や汲む手たゆたふ晴小袖　仙臺　河原榮子
くらきほど雲飛ぶ夜なり冬の月　下毛　芳子
崖を這ふ筧は涸れて蔦赤し　伊勢　田中ちせ子

白萩の臺高うして靈の月　津市　駒越あき子
朝寒に漆の匂ふ器かな　麹町　浅井千鳥子
國寶やいさゝか醉ひし叔母の許　上野　さだ子
僧二人朱門を塗るや日も閑に　三重縣　玉井潮香
時雨るゝや渡し越す間の最合がさ　静岡縣　太原あゐ子
枯野原道一筋の電氣燈　山梨　鵜田みつ子
下駄の緒の紫あせぬ秋の雨　廣島　しげ子
十哲のおつとりまきし火鉢哉　府下　中島縫子
土地藏屋根傾きて時雨けり　神奈川　小林英子
草を刈る人は何處ぞ野の薄　岩手縣　吉田たに
萬歳の袖にからまる小猫かな　静岡縣　青木静山女
秋の水五陵のほとり流れけり　常陸　酒葉貞子
梅が香や椽に出したる盥櫃　磐城　村岡やお子
子守女や各々かざす桃の花　千葉縣　木内秀子
入日さす仁王の像や散紅葉　大分縣　工藤たまき
風呂をたく畑に落ちし一葉哉　岡山縣　宇佐美文子
水仙を活けし寫經の一と間かな　尾張　渡邊臣子
白菊の露の重みやたわみけり　岡山縣　中村とみ子
白菊によき日あたりの農家哉　姫路　郷田燕子
一群の乙女の袖や春の風　山城　村田まさ子
官すてゝ菊の手入れや秋の宿　高知縣　鋭野月子
經うつす小窓の下や虫の聲　磁際　木志摩たも子
琴の音にうつゝ心や春の雨　大阪　今西こゆき
白萩や折りてこぼるゝ朝の露　千葉縣　富澤桂子
ほんのりと秋海棠に紅を見る　奈良縣　森本おさ子
落葉掃く音の靜さよ冬の寺　神田　元子
夢さめて水音近き秋の宿　静岡縣　桑原せき子
黄葉紅葉温泉の石欄にちりかゝる　福島縣　秀蘭女
そよ〳〵とふけて行く夜の秋の風　小石川　山口まさ
新米の粒々釜に光るかな　羽前　芙蓉子
箱庭の近江八景しぐれけり　永田　大宮あき子

燈籠の火に白萩の醜れけり　奈良縣　花菖蒲子
芒戰ぐ野末の山や月を吐く　福岡市　八尋すみ子
帆檣に夕日うすれて秋寒し　遠江　鈴木三發子
春風や嫁入の灯のちらほらと　千住　美子
草紅葉野邊に遊べる少女かな　芝　廣川代志子
猫の子の眠り醒めたり柿落葉　静岡縣　早苗女
斥候の二三騎すぎぬ萩の中　手塚妙香
露の香に樹の木多き野原哉　熊本縣　富野かず夫子
落武者の行く手にしげき落葉哉　福岡縣　桔梗女
着飾りし人の妹や松の内　上總　久我ちか子
ふるさとや盆の月にも時鳥　門司　彌吉露枝
月の窓身を横にして獨吟哉　下總　酒井錦江子
月二更鑄像の影池は長し　堺市　澤井いく
大なる石の峯寒や冬木立　下總　小澤蝶子
ゆひたての髪に風しむ朝詣　江差ふみ子
秋高く月なき空に君の魂　若狭　津田汐汀
ふりかへる飛かげさむし冬の月　三浦秋野
尼御前のそゞろ歩きや萩の花　土佐　岡村春榮
ぬばたまの暗のいがきや初詣で　奈良縣　濱田せつ子
大路小路五山の鐘にしぐれけり　大和　栗山英子
菊の香や露洞くちき扉口　滋賀縣　西川ます子
豆腐賣る翁が家や菊の花　鹿兒島　貴島よし子
一人行けば狐出て來る枯野哉　本所　三森ゆき
豆腐ひく橋場の茶屋や蓼の花　徳島　霞子
名月に淋しき町を通りけり　伊賀　山村野菊子
栗落ちていたち走るや空屋敷　羽前　白菊子
草の戸の萩の古根に手毬かな　富山市　小林よし枝
舞初の襷かけゝり置炬燵　奈良　白藤女
女乘せて馬曳き行くや冬の月　紀伊　白蓉女
水仙や病の床の細行燈　廣島縣　吉岡萩女
白菊の段に神酒のかなりかな　日本橋　牧野喜美子



短文

編輯局選

▲規程　文章の種類は凡て自由なるべし、簡潔なる文字を採錄す、二十四字詰五行以內にして總て振假名附、半紙又は罫紙に認め一人一文を限りとする事、締切前同斷、懸賞乙種。

二等　○物の音

阿波國小松島　西野花菱

一日の私の耳に入る音は、先づ朝は鷄の聲、天理教會の大鼓、光善寺と地藏寺の鐘、晝は向ひの家の機音、小學校の唱歌、船大工のつちの音、地引網の漁夫の聲、裏の娘の三味線の音、となりの尺八、夕ともなればあはれな子守歌、又鐘の音車の音、夜は只波の音。いその松風。

天地の聲

三等　○私の時計

八王子八木町　井澤菊江子

私は、毎日お日樣を時計にしますの、椽側の雨戸が明るくなる頃寢床を出て、お庭の老松に御光がさすとき朝の御飯を食し、南向のお座敷がほの〳〵と溫まる頃をお晝と定め、西の空が美しくなるを待ちて燈火の支度を、いつも此の如くして日を暮します。

輕便なる日時計

四等　○落穗拾ひ

岩代國福島市陣場町六十三番地　村井むら子

露をふくんだ、冷たい風が吹く時も、ありますけれども、それは、ごくたまの事で常には綠の空が高く〳〵澄んだ心地よい日に、高く塔の樣につまれた、稻の間を縫ひながら拾ふのです、勢だせば、日に五六升位わけはありません。

そんなに拾へるものとは思ひませんでした。

五等　○初霜

下總國成田南　三橋げん子

戸を開き見れば庭や小屋の屋根などが眞白に、今朝こそは初霜であつた。ひろき桐の葉や桑の葉はみな哀れにうなだれて居る。やがて太陽がのぼるにしたがひ桐の葉は次第にからび、かさり〳〵とさびしげに散り初

めた。

實景

秀逸

○返辭　豐後　花葉子

氣取屋ははあと言ひます、鼻垂らしはあーと言ひます、あいと云ふのは老媼ておいと云ふのは權柄家です、ウムと仰しやるのは父樣で母樣ははいよと優しく仰せられます、は、と言ふのは書生で下婢はへいと申ます、最後に私は明にはいと答へます。

記者はアッと感じました

○朝の海　丹後　賤の子

横並の松が枝がくれに、夢のやうな白帆が一つ泛んだ、私の足下には靑い美しい水を透かして、紫のひとてが落花のやうに五つ六つ、靜に平らな海面には小さな魚が時々飛んで、緩い大きい波紋を描く。

神代ながらの天の橋立

○ある夜　本所　田中久子

ランプの下で原稿を書いて入被る兄樣の傍へ私も机を並べて書く、何處かで變な聲の鳥が啼いて、黑い雲の間から八日の月が靜かに登つて春の如な美い宵です。なまめいた調子の新内が外を流して行くと跡はひつそりとして紙の上を走る筆の音が明瞭と聞へる程。

自然派の小說、半は脫稿

○冬　大阪市　辻廣子

冬が來た冬が來た、水仙が咲いて氷が張つて、雪が降つて、南天の實が眞つ赤になつて、寒い風がぴゆう／＼吹いて、年寄りも小供もつい炬燵が戀しくなつて、そして貧乏人が愈々困ると云ふ冬が來た、燒芋はこれから旨くなる。

燒芋が主眼

○炭燒　羽前　鈴木笑花女

朝、薄暗いうちより萱を編んだ俵と繩を背負ひ、毎日二里程遠い山に行つて三抱へにあまる樣な大木を伐り倒し、冬の日も尚襦袢一枚で大汗になつて頭から灰を冠り働いて居ります、炭燒は一年のうちには灰を五升喰ふと云つて居りますがそれでも丈夫なものです。

炭燒く人あり、火にあたる人あり、世はさま／＼

○私の村　長野市　紅ばら

私の五ツの時に村で林檎を植ゑた家は五軒きり。今年

十一年ぶりで歸つて見ますと白壁造りの蠶室が四十戸の中に十二三戸も又自轉車に乗るものが十二人ハイカラ肩掛をかける者が九人庇髪が四人それで水密桃と苺のはたけが十三町歩程。

十年は一昔

○銀杏の葉　廣島縣　勝丸折與

色も香も褪せた銀杏の葉これは今から五年の昔北風が身にしむような夕方稲荷様の御堂に昨日結婚なすつた友人と炬燵をして硝子越に銀杏の葉の散るのを眺めた事があります其時友人が思出にと御自分の日記の間へはせて下すつたのです何だかあの時代が戀しくて。

底に悲哀の情を含む

○いとしの犢　豊後　桃の屋賤女

若宮の市で許多の同胞と別れた犢、一匹で行黄昏の淋しさに、妾しの家の前で座りこんで終つて、二人の男が押せども曳けども動かばこそ、友戀しげにめーめーと啼くいじらしさ。其うちに又一匹後からくると、直ぐに起き上つて、脊を並べて歩みだした。

動物虐待防止會の起る所以



晴天　麻布　近藤てる子

○冬籠　越前　氷宮こよね

祖父さんは經文をお寫しなさいます、祖母さんは眞綿を紡がれます、お父さんは藁仕事、お母さんは炊事と裁縫、兄さんは米搗、妾は絹機、露ちやんは布機を織ります。

外は積雪三尺

○三人女學生　大津市　近藤菊女

妾の近所に、女學生が三人あります、一人は道であつても、物も云はなければ、笑ひもしないといふ人、もう一人は、家にばかし居て、外にでないで、年中青い顔ばかしして居ます、今一人、大のおてんばで、氣夜中學生の、下宿えばかり遊びに行きます。

三人とも末の見込がなかりさう

○冬の朝　しら萩

五時を報ずる時計の音に床を出てさて水汲みにと裏に出かけた、母君が御目さますまじと思へどなほ下駄の音するは地面が氷つて居るのであらう、空には寒月細く屋根におく霜をてらして、一しほ寒さをますのである。

井戸縄も銀條の如く

○皸　千葉縣　今井しげ子

私は何時も冬になりますと手の甲に皸が出來ますが、今年はまだ出來ません、酷い時には血が出まして隨分痛みます、これから次第々々に寒くなりますとお掃除も憂辛うなりますから可愛相ですが妹にも少しづゝ手傳はせます。

○妾の村　南総　四之宮あき子

妾の村は極々山間の僅か十戸足らずて、芳紀の處女は妾と四人毎日々々こぞつて田甫暮し、學校も尋常のみて高等科と云ふものもなし、只々毎月一册づゝの女子文壇あるのみ。

○開店　羽前　小國けいとう

廿二三の書生さんが、朝日を一ツくれ給へ、是れが抑生れてから初めての商てした、カメリヤを一ツ、職人風のが笑顔て、おくんなさい大和を二ツ、何處かの守子が旦那のお使てしよう、オリエントを頂戴などこやら聞覚えのある聲、はいと立てば襟子様、アラまア！。

○行路　仙臺　河原榮子

堤は振り分け筒袖のいつも軽々しい出て立ちて長い／＼堤を辿て毎朝通學するのてす春は櫻堤となりて人に賞められたもの今は黃ばみまして紅葉堤となりました其日々々に今日の樂しさを想像しつゝ學校の行き道は愉快なものです。

○我境界　徳島市　河里子

三年の昔妾が十四才の時母上は此の世を去られた其後はご飯を焚く下女かと思へば所々へ廻つて行く丁稚妹の峰ちやんのお守て來客あれば奥様風にてあしらふて夜なべに苧なうみて得しお金で女子文壇を購ふのてすが斷腸の悲も文壇を讀めば薄らぎます。

○牧場　東京　里子

たくさんの羊は、幼い羊かひに追はれ、牧場に添うてかへつて來た、彼等のせなかは時雨にぬれて、美しい夕日をなゝめに、ゆつたりと、主人のかほを仰いだ。

○仕事　鳥取　東子

今年八十七の大きな御祖母様は毎日畑、六十四の小さい御祖母様ははた織、母様は仕立物、姉様と私は賄かひ、妹は弟のお守り、これに父様が御元氣てあつたなら何をなさるてせう。

○芝浦の月　東京　とき子

波靜かな芝浦の海岸、帆懸船は、ユラリ／＼と辷つて居る、山内の鐘の音は、夕暮を告げ渡り、緋縮緬をちぎつた様な夕陽は何時しか消え、月は山の端をはなれて、平和な波の上に浮んだ。恰も水彩畫のよう。

○自然　伊勢　越村ふみ枝

妾は何時も青い空を見たり白い雲の漂うてるのを見ると身體が地の上からふは／＼飛んて行くやうな氣がするんてす自然という者は實に神々しい美くしいものそれに何故人間ばかりは汚いことや殘酷なことをして下品な生活を送ってるてしよう。

○手のいろ／＼　臺北　峽よし子

可愛らしいのは赤兒の手、黑くて太くて頑丈なのは、鍛冶屋の手、白くて細いのは美人の手、しわのあるのは老人の手、大きくて見苦しいのはおさんの手、黑くて細くて其上ぶきやうなのは妾の手。

○お藏　本所　磯野すみ子

村ての金持の芳子さんの家ては、又お藏を建てるので毎日大工や左官が澤山入つてます、隣りの爺は嗚呼、「今井ては又、藏を建てるのか、之れて六つ目だ、われも皆おれ等が汗のかたまりが入るのだ」と、ほんとに爺が言葉通りなのてす。

○生きた佛　三河　近田みつ子

「だからして皆さん、決して惡い心をもつてはなりませぬ」と龍妙寺の和尚樣は、一時間程語りつゞけた說敎の口をとめた。熱心に聞いて居つた村媼村爺は水をうつた如くに靜まりかへつて、廣い殿堂の中に物の聲一つしない。其瞬間、聞いて居た五十人は生き佛てあろう。

○河鹿　上毛　卯の花

妾の村は、山と山との間てす其故、都ては得難いときく河鹿さへ細い流れの谷川て、趣味を持たぬ妾達はやかましいと思ふ程になき立てますの、そしてまゝお勝手などへヒョン／＼と虫取りに來る事がありますわ。

○一本の櫨　南豐　藤の家瑠璃子

八幡樣のお鳥居の上に一本の櫨の木があります。誠に不思議あの石の上に私どもの覺へぬ先から生へとるのてす。丈は一尺七八寸位、依然として太とらず折れず、春がくれば若葉がてる秋がくれば紅葉になる、もう此頃は葉はみな落ちて枯枝の樣に物淋しう立て居ます。

○テニス　明石　笑桃

ネツトは高くボールは高く低く其間を飛び通つて其を討つ務究子は恰も花に狂ふ胡蝶の樣てある今しワンターの聲の聞へるのは友某女てある早く加はらう誠に自分はテニスに依て生命の洗濯をするのてあるワツクツトは吾れ得意である。

○各地の俗語　石狩　繪澤源子

ありませんと言ふことを、四國地方てはおまへん、富山縣の地方ては、ないがじや、或はないうてなお主、仙臺地方ては、ごわへん、當地に住むアイヌ土人はないつてやあー。

○私の小使ひ　神田　渡邊淸子

私は月に兄より二圓づゝのお小使ひを下さいます私は小使の內一圓は英語を學ぶ學費に五拾錢は銀行にたくはへ二拾錢は愛讀の女子文壇を買ひます後の三拾錢は母の好む物を買つて差上げます。

○木蔭　泉南　金田紫雲

庭前に一本の松の木がある。夏は日が當らんので涼しく、北風の吹く冬の日も其の影に隱るれば暖かい。て私は其處て毎日女子文壇を讀むのよ。

○茗荷の子　山口　酒向敏子

お背戸をあさりあさつて漸く七つ程得ました是をどうしやうかと思つて考へました末五つ程を懸賞料理中の「茗荷の子葛まわし」と云ふのに拵へておばさんのお膳のおかづに差上ました殘り二つは夜食のお三杯のお菜にしましやう。

○山守が家　秋田市　菊地花子

裏山の木立の葉が皆枯れ落ちて、泉水も園も皆木の葉に埋れてしまふた、杉垣の邊の葉の無い菊の花は今日も昔の儘、垣の影ては樋洩れの雫の落葉打つ音寂しい、あゝし爺やが今夜里から歸へつたら、明日家に歸ると云はふか。

○芭蕉　麻布　星影

浮世の風が未だ吹き渡らぬ淸き夏の朝、芭蕉樹の花に宿れる露のまあ、どんなに美しいてせう、そして其味の甘い事。けれども不思議な事には太

陽が登るにつれて何所ともなく消え失せてしまひます。

○小猫　肥前　白菊

私の机のそばの押入からにやあ〳〵と小さい猫の聲がしますので不思議に思ふてあけて見ましたらまあどうしましよう私の綿入の上に宅の猫がよいあんばいに可愛らしい猫の子を三つ生んでゐますの腹もたちましたがあまり愛らしいので其の儘にしておきました。

○朝暮　若狹　津田汐汀

妾は人間の盛衰ほど哀れ、淺ましいものはないと思ふのです、彼の慶長五年九月十五日、關が原の大戰に、朝に十萬の大軍を起し、天下別目の大戰をした、其の人も、同じ日の夕には唯だ一人、山また山の奥深き伊吹の里へにげ込んだ、當時の有樣を忍ぶと何日もかう思ふのです。

○一厘の錢　上總　四之宮淺子

私の財布に今一厘錢が殘つてる、あゝ此錢や實に富に誇れる人の手より餓たる孤兒の手へ投け渡された事もあつたろう、田舍の乙女がお祭の時賽錢箱へ納めたこともあつたろう。

○野菊　神戸市　加藤富美子

朝霧の淡くかゝつた野を、さら〳〵と行く秋の水の傍に咲いて居た野菊の姿の如何に優しく可憐であつたでせう。「あゝ美はしの孤つ菊よそが小さき花瓣の淡紫の永久に色あせざれな」と、私は胸の中で野を守る朝の女神に、お祈り申しました。

○冬休み　香川縣　橋本みちゑ

どれ戸締りなと思ふて、私は椽側に出ました。すると雪よりも白い、お庭の山茶花が風もないのに、ちら〳〵と、こぼれてますの。私は、ふと故郷が戀しくなりました。もう、冬休み迄は、何日かしら。一日も早う來てほしい。そして、父母樣へは、二期のよい成績をお土產に。可愛い弟ちやんには何を……。

○甘柿澁柿　須賀川　笑ひ女

毎年秋になると、在方から甘柿を澤山送てよこしますが、今年は、澁柿ばかり書て送て貰ひました。而して晩食後の皮むき。樂しみは、來年のお正月から、三四月頃迄盡きる事が無いでせう。

○てる〳〵坊主　岩代　泉りう子

日當りのいゝ、南の椽へ出て、お庭の松の雪が、朝日にとけて落ちるのを見て居ると、屛のあちらでは、羽根つく音が頻りに聞こへる。何んと云ふ長閑な日になつたろうと、目を南天の木にうつすと、まあ可愛相に花ちやんの作つたてる〳〵坊主が、重たげに首を垂れて居りました。

○お百姓　北海道　久子

妾が初めて農業をしたのは二年前、かぞへ年の十四でした、其時は麥や燕麥を刈るのにお父樣やお母樣が、三度行く間に漸やく一度しか行けませんでした、去年は二年に一度、今年は大分おほきくなつたので敗けないで行けるようになりました。

○萩の精　丹波　難波あいの

紅や綠の葉と葉が打ち重なつた陰を、素麵を並べた樣な波を立てゝ、流れ入る溝の河につゞいた平つたい石。其上につとお立ちになつた。嫣然と見惚れてゐらつしやる足元には、白金を溶て沸騰たような水のうづまきし、岸に咲く萩の精かと思ひました。

○樂書　神田　山田灼子

やつとの事で白壁に塗り直すと、直ぐ誰やらが樂書した。丸髷姿の可愛い女の繪で、其のふるい振りの拙さが、此寺の梵妻に似てゐると云ふ事である。法會にいつた歸り、老僧さんが見て見ぬ振りして行く後から、一人の小僧が指す一人が舌出す。

○品評會　山口縣　泉月女

小學校同窓會の會友が毎年野菜品評會をするので私も去年は大根で一等を取りました、今年は甘藍で一つ皆様を驚かしてと思つて、一生懸命で作りましたら、まはりが二尺七寸あるのができました、がまだ他から々大きいのが出品ますかしらん。

○朝日　下總　波賤女濱子

霧の中へ消えゝ舟、霧の中から現はるゝ舟、霧に呑まるゝ舟吐き出さるゝ人、冥府の様な景色——と思ふと衆の手巾までが黒い様な氣がする。白衣を纏ふた朝日は鼠色の山の端から出初めた。柏手の音がする。

○すゞめ　秋田縣ＦＬＧＳ子

今年の夏實家から作り粟拾四五株貰つて庭の中位に植えて丹精しました。秋風が逼へば美しい花が開きました所が朝な夕なに乾度雀が幾つ、食を求めに來る様は繪の様です。今年收穫した粟をやりますと、それは〳〵嬉しそう。

○漬菜を洗ひて　岩代　貞子

ザブリと水を割て何氣なく根元をひろげると、白い〳〵其またから、フヘリと生れ出た茶色の木の葉。砕けた我影は、冠つた手拭白く、ゆら〳〵とまたとゝのひました。

○私の書齋　越後　朝つゆ

書は、机、本箱、硯箱等、入用品ばかりて、目に止る様の物はありませんが、夜になると、私の書齋から、心の清い、美い顔の月を、拜する事が出來ます。


待どうしい　麹町　山本みつ

○すきなこと　名古屋　こと子

短册に歌を書くこと朝早く自轉車てくの字くの字に描きたる町を走ることゝおいしき務菓子を充分に食ること。

○はらから　常陸　羽成幹子

妾は兄妹五人あります、一人は名古屋、二人は東京に居ます、頭の姉さんは隣家に嫁まぎして絶えず妾に音づれます、そよ吹く春風にひら〳〵遊ぶ胡蝶にも増したる優しき妹は一層なつかしく、沍寒劇しき夜などは爐辺に閑談時をうつして、思はず戀しくなります。

○乳母の家　羽後　菊池敏子

姉さんと山湯からの歸り、三丁坂を半分程下ると、何うした機會か姉さんも妾も手を携つた儘、共に倒れた。家に歸ると繼母さんに怒られるから、乳母の宅へ一寸廻り路して立寄ると生憎留守で破れ垣に添ふて白梅が寂しく咲て雪がちら〳〵降つて來た時はそつと涙をふいた。

○幾何　備前　香蘭

出會の鐘聲まゝよ今日は幾何の日課まだ始業の鐘迄には五分只の定理一つても何だ相似平行四邊形折衝打出す鐘の音ヂヤン〳〵こんな事ならテニスを止て見て置けばよかつた。

○春の粧　鳥取市　上山千重子

梅の花笠かむりつゝ、木傳ふ鶯の初聲に、ふと眠りさめて、またほの白き化粧室に、臙脂とけば、紅の榮の色さと若き頰に流れて、鏡に深き春

の夢の香。

○お花さん　京都　小笠原あき子

平日も、美しい、文金島田に結つた、雜貨屋のお花さんは、女の目にさへ、恍惚する樣な美人だつたが、拾八の春から俄に姿が見え無く成つた儘て有つたのに、今年、廿歲の暮に成つて、ハイカラ諧の、憔悴た、変味のある、お花さんが、歸つて來られた相てす。

○冬の山里　青森縣　三浦愛子

雪の降つた朝お庭て遊んて居た弟等が氣たゝましく私を呼ぶので出て見ると向ふの藁を積んだ處に雉子が餌をあさつて居ましたが私等の聲に驚いて飛び去りました。處へ尾田先生が鐵砲を持つて息を縱ませながら雉子が此處に飛んて來ませんてしたか‥‥。

○お父さん　宇都宮　石原登美子

「箏を買つて頂戴」と云へばウムと答へられ、あれを、これをと、ねだる度にウムと仰つて、まだ一度も買つて呉れません、それても、貴樣は可愛い〻、可愛と仰るから可笑しいてすワネ。

○雨の翌日　下總　三橋千代子

旭が昇て軒下の雨垂の水に反射して、きら〳〵と障子へ映たから窓を開いて見ると、空はるり色て所々に白雲がふは〳〵して、忽に綿を薄く延ばした樣に成て消えて仕舞う、雨あがりの春の日は暖に陽炎は燃ゆる如く紅梅咲ける垣の外には傘並べ乾てある、雞は相應じて鳴きのどかてある。

○姉様　信濃　依田花園守

今度姉樣は、いよ〳〵さる法學士と婚約が成り立ちました、お若いが大層有望な方ださうてす、姉樣は、自惚れかは知りませんが、すらりとした優しい極めて上品な美人てす、あゝ早くお嫁の姿が見度うございます‥‥‥が？又何と無くやりたくない樣な氣もしますわ。

○お目出たう　本鄕　朝井松子

確かにモー御婚禮が濟むだと聞いて居たのに千代さんは勿論伯母樣からも何のお話も無いので不思議に思ひ乍おいとま仕やうとして立つとたんに下女が次の間を開けましたら紅白の眞綿が幾臺も並べて有りましたので、アラマア千代さんお芽出たう。

○月光　麴町　美賀子

靜かな月の好い晩、椽側につく〴〵とこう思ひました、私も早く、神樣に召されてあのなつかしい、惠み深い神のみひざ見になり度うございます。

○霞浦の名産　茨城縣　高橋ふさ子

日本第二の湖水霞が浦の名產は鯉、公魚、海老、鯉等が主なるもので、鰻、鮒、白魚等も澤山に取れるものです就中鯉は高貴への進上物に用ひられて名高く海老は櫻海老として「土浦名產櫻海老御壽し」と同驛の賣子の聲で聽いて居ります。

○稻荷　駿河　松永しげ子

此清水町に稻荷神社があります。若し盜難に遭つた時に七日の間祈願をこめて、神の御利益を願へば、立どころに品物が出ると云つて、遠州邊りからわざ〳〵來る人があります、境內にある幾多の鳥居は、御利益を蒙つた人々が奉納したものだと申します。

○古鄕　田中春子

同じ女學校を卒業するにも東京出といふと一層價値のあるかの樣に思つてか、友の例を引いて兩親に迫り祖母の執持て上京した彼女は、如何感じたものか卒業すると此度は山奧の某女學校に奉職したが、間もなく京都に歸つた、而してもう〳〵何所へも行きませぬと。

○參錢なりと　長門　雛桔梗子

私の村に至て氣轉て一向榮らないお醫者樣があります、此内宅の書生が火傷をして藥種店て藥を買てつけましたところが小僧さんが間違つた藥を呉れましたもんてすから大層痛みだして仕方なしにそのお醫者樣に診せましたら先生眞面目に、僕に診錢なりと利得さして呉れると、こんな事にもならないだろうにと。

○靜なお祭り

丹波　北村銀子

二十戸餘の村には、大き過る樣な鎭守樣の御社、年々の御祭りには、村の若者が種々と姿をかへて、大騷ぎをするが、今年は例年よりも餘程靜な。何故と云つたら村一番の美人お小夜が他所村へ御嫁入したのと、「馬富」と云つて居た富公が、去年の秋入營したからてある。

○姿が机

佐世保　淺田克子

姿の愛する机の上には、玉蟲詩集、バイブル、女子文壇は一號より積重ねてあつて、古雅な花瓶には水仙の香り高う、銀枠の中には溫容嚴たる兄樣の御寫眞、それに勤勉な時計は姿の不勉强を叱するが樣に、チャッキ〳〵と働いてゐる、ヒキダシの中は殘念ながら、神秘の錠を下ろして……。

○四季の額

沼津　渡邊とよを

毎號女子文壇にある、水彩畫を、八枚づゝ入た額四枚作り私の書齋へ掛ました、春のを東に夏のを西に、秋を南に、冬を北に、私はいつも此の美しい景色に、つゝまれて靜に女子文壇を見るのてす。

○夢

千葉縣　翠山はつ子

夢なれや、世は夢なれや、夢なれや、夢路をたどる身は夢なれや、夢といふ夢な忘れそ、夢といふ夢に、夢見る夢の、世の夢。

夢の世に、見し夢さめて、夢ぞとも知らて、夢見る夢の、世の中の夢、といふ夢の、中にも夢といふ夢こそ可笑、夢の世の夢、見し夢のさめて、夢見る夢の、夢の世や、夢とあかして、夢と暮しつ。

○零餘子拾ひ

南葛飾　紫葉子

山の芋蔓へ鈴の如に生たぬかごが昨日今日の秋風にほろ〳〵と落るので私は日曜毎に拾ふのてす諸姉は茸狩や栗拾ひなど興ある遊びをなさるのてしようが山などは見た事もなく野邊の千草に虫の歌より外に秋の樂みを知らない私にはこんな事ても中々に面白いてすよ。

○蟲聲

遠江　林衛子

凉しい風が袂を拂ふて音樂を聞く樣な秋の夕、草叢にすだく虫は、悲しい樣な、愉快なような、鈴を振る樣な、かれをたゝくやうな、くつわをならす樣な、どれも〳〵競ふ樣に鳴いてゐる。今姿と妹と月を眺めながらよい虫の聲を聞いてゐるのてある。



董野　豐橋　つたへ

○雪の降る夜

宮城縣　千葉よし子

歡會から歸つて來る途中、横丁の間の軒下に人影が横たはつて居るやうだ、どうもあやしい聲がする、やはり人に違ひない、病人だろう、恐る恐る近寄て見ると果してそうだ、樣子を尋れると四五丁先の八百屋の下女だそうな、雪は又もチラ〳〵降て來る中を送つて行て上げた。

○雜誌

千葉縣　今井しげ子

お父樣は雜誌なんか見るなといひますけれども、私には何うしてもこればかりは外のことゝ違つて止められませんのてす、讀まないて居りますと何だか時勢に後れるやうてすから、それが證據には雜誌を讀まないお

友達とお話なしましても、何かにつけてよくわかりますもの。

○様々　岐阜縣　早川けん子

四十六人の同窓の中で、尤も雄辯家と仰がれなすつた文子様は田舎の學校へ、文學家の映子様は紙屋へお輿入、畫伯の露江さまは早や坊様がおありなされるとか、音樂家の君子様は故郷でお裁縫に、引つ込主義の定子の君陰辯家の近尾様は都の空にお遊學のお話し！學校を出るとこうも希望が變つて來るものでしようか。

○好いもの　大阪府　祝綾子

私はいつもお正月になると、お父さんからいゝものを買つていたゞきます。昨年は少女の花と海老茶の袴、一昨年は花簪と羅紗の靴。今年は何を買つて下さるかしらむ。

○年取柿　備中　篠原しげ子

心の底から新まつた樣な嬉しい元日の朝母樣はにこ〳〵しながら皆さんお年をお取りなさいと云ふて年取柿を一つづゝ下さつた祖父樣と祖母樣はもう年は取らない方がよいと云ふて妹にやられました妹は大悦びて續けて三つ食べて終まひ歳の三つのものが六つになりました。

○森の銀杏　秋田縣　伊藤きよ子

私は鎭守の森を逍遥して大銀杏の下に腰をおろしたあゝ思ひ出だせば三年前兄樣と惡さぬ別れをせしも此木の下よさう恰度葉が秋風に吹き散つて二人の肩に止まつた時は猶一層悲しかつた皆昨日の樣だが兄樣は御戰死なされ私は病める身あゝ此銀杏の樹は思ひ出の種よ。

○おほみそか　小石川　小笹千代子

今しがたまで賑かであつた往來がもうしんとなつてもう一時年の名殘りのなんとなく心細い、て兄樣と姉樣と私と三人云ひ合したように「女子文壇」は明日發行れとまうし私買ふことに定め、兄樣は「太陽」姉樣は「詩人」を買ふと。

○感化　山梨縣　藤原おもり

歷史を深く研究すれば、英雄豪傑に感化する。算術を深く研究すれば、決斷力ある人に感化する。地理を研究すれば、心廣大となる。物理を研究すれば、心細密に感化する。而して英語を研究すれば、心高尚に感化する。其して戀愛を研究すれば、何に感化するか？。

○冬の故鄕　大阪　武田とし子

遠く中國山脈を越えた朔風は、筧の水音を送つて肌を刺す程寒いけれど、萱屋根の間から漏れる冬の日光は積れる雪にキラ〳〵と映じて美しい、されば子供等は嬉々として雪滑べりに餘念ない、遙か向ふの八幡宮の軒には氷柱が下つて、まるでお正月のしめ繩のやう。

○新年の夜　京橋　葉子

戶外はまだ羽子の音や小供の鞠つく歌聲など聞へるのに、はや電燈の光まばゆく近邊をてらして居る、ふと机の上を見ると友よりの年始狀が三枚、其中の一枚には、三日午後一時から歌留多會を開くと云ふ意が書てある、あゝ新年は樂しいかな。

○元旦　鹿兒島　犬飼たき子

私の家庭は十人暮らしてあります。そして毎年元旦には家庭の新年歌會を催します。去年は切下髮のお母樣が秀逸を得られました。下女のお竹の歌などなかなか與多きものでした。村第一の歌仙森先生の講頌が濟みますとつゞいて叔母樣の新年の曲をお彈きなさいます。

○お猿　奈良縣　清水春陽

私の村の庚申堂に猿が二匹上がつて居ります一匹は外國の猿で尾が長うて毛が美しいてすそうして餘程以前から此所に居るので甚だ人馴れて居ますが今一匹は遂此間上げられた日本の猿で顏が眞赤で人が側へ行くとバタ〳〵と騷ぎ廻ります。

新歌謡

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謡と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈。



三等

○誰が吹いたか鬼灯ひとつ自働電話に忘れもの　長野縣東筑摩郡坂井村　瀧澤さつき

舊派の趣味を新派に化す、今時のお孃樣にしては大出來々々々

四等

○歌の反古燒きや焔のなかに黑い蝴蝶が舞ふて居る　伊賀國上野池町　山村龍子

黑蝶は好比喩

五等

○私の母樣お墓の中でさぞや寒かろ雪が降る　下野　高子

「雪が降る」の一句、最も能くきく

秀逸

○私が故鄕の但馬の國は岩の屛風の家がある　但馬　高橋伊勢子

○行つて見ようかこの山陰に白いすゝきをふみわけて　臺灣　稗貫みつ子

○蚿出るちふ三上の麓私が見た時きや月が出た　滋賀縣　島田かず

○板谷峠は汽車にて來たが宇宙峠は橇で越す　羽前　杉葉女

自註、宇宙峠は越後街道の有名なる峠にして橇は雪國の用器なり。

○繪卷見る樣な葵の祭賀茂の松原見へ隱れ　京都　山口愛華

○友人は都でふり袖着ます私しや深山でみのを着る　下野　たま子

○西に富士山東に筑波中を流るゝ隅田川　和歌山　花月女

○狹霧しらしら裾野に明けて朝の狩屋に駒の聲　岐阜市　平田香苗子

○何の遲かろ二十五迄は私や獨身で學びたい　丹後　鹽見千代子

○妾や戀草いま花どきよ蝶も來て飛べ胸の園　鵜木つる

○姉は十七妾は十五あけて嬉しい年の春　山口縣　紅梅女

新歌謡

○毎夜姉さんお琴のけいこわたしやたのしい雜誌よむ
佐賀　あやめ

○妾しや學校の敎師の娘歌留多して日を暮らす
下總　萩原きわ女

○生駒山から霞迷な眺れば淡路島までひとまたげ
大阪　武田とみ

○枯れて丸太となる樹よりは其日限りの百合の花
越後　早津善子

○からりころりと下駄の音冴える都大路の寒月夜
芝　吉田かつ子

○御の子の樣な少女が髮のリボンなでゆく春の風
上總　渡邊汀子

○霜にほこつたあの白菊もたふれ伏たよ一雨に
對馬　倉成湖生

○妾は山中木こりの妻よましら相手に日を送る
茨城縣　君子

○春の畑の菜の花姫に蝶々殿が遊びにくる
山形縣　白花女

○解けてみだるゝ絲の髮に一寸かざしたばらの花
埼玉　船津千代子

○鮎打つならびどかぬように響きやお庭の萩が散る
伊賀　伏見菊枝

○旅枕に嵯峨野の宿で秋の雨聽く旅の繪師
阿波　西野ひさし

○姉は東京に妹は京都妾しや田舍で野ら稼ぎ
山形縣　樋口かれ子

○四とせそだてた可愛い馬に乘て長谷へ嫁にゆく
京橋　高橋雪子

○すきな道ならやめられないよ叱責になれども又投書
長野縣　町田きみ子

○
名古屋　ひさえ

○今年豐年どし穗にほがさがる藁が五尺に穗が二尺
埼玉縣　淺見はる子

○歌の次郎さんが病床にこもりや今年さびしい里まつり
仙臺市　河原榮子

○都隅田のお花は盛り鄙は名なしの草の餅
渡島　鷗島女

○都千里の片田舍でも鄙はあります女菊
上毛　新井歌子

○軒の南にかけたる籠に小鳥來て啼く山の蜜
德島　六の花

○今日で廿日も大漁つゞきえびす見るよな漁夫の顔
神奈川　木村はる

○音に名高い乙紬の濱は化粧する時たれが見た
加賀　奘惠子

○落葉々々が甌なる故にさても秋かと心づく
三河　今井初子

○今年十八縫ひ上げとつた腰のたぐりが恥しい
丹波　雛波あいの

○菊の香水萩白粉に化粧しますか龍田姫
栃木縣　千葉奈津子

○野もり女神が造つた百合に星の使か蝶一つ
駿河　淡園女史

○秋の夕日に散るいてふ葉は金の扇か蝶々か
磐城　星の香女

○妾は磐城で三函がふもと餓と鍛とて日を暮す
藤子

○庭の白百合見本となして簪一本こさへたり
下總　波濤女

○君が作つた心の簡にさめずいれたい夜の寒さ
長崎市　浮螢

○雪の降る朝川行きやつらい二度と奉公はせまいもの

滑稽談

編輯局選



▲規定　實際にありし滑稽談もよし、所謂一口噺もよし、摸倣や有りふれた作は採らず、二十一字詰五行以内、半紙又は郵紙に認め一人一章に限る、締切日は毎月十五日懸賞は乙種。

四等

○大包　静岡縣庵原郡興津町中宿　深尾けん子

五十許りの田舎爺が郵便局へ三尺四方ほどの包を持つて行つて『これを一つ東京の倅の所へやつてお呉んなせい』局員『そんな大きな包ては小包て行かぬ』爺『そんなら大包てもようがす、そんて駄賃は何程だんべえ』

五等

○お嫁　山口縣阿武郡佐々並村　紅梅女

「原田さん、妾見たいな者てもお嫁に貰つて呉れる人があるでしようか。」
「そりやあなた、破れ鍋にとぢ盞つて云ひますから子。」

○ハイカラ娘　豐後　福島靜子

下女『お孃さん人が能くハイカラ娘と云ひますがどんな娘ですか』
孃『それは髮を廂に結ふたりリボンを揷したりしていやに氣取つた娘の事だよ』
下女『夫れては貴孃見た樣な御方てすれえ』

○奥樣と下女　津市　森田寶子

奥樣「お風呂はわいたかい」下女「はい唯今孫がいつたところです丁度よい加減ですどうかお召し下さい」

○勉强　小石川　未成女史

母『お前が勉强したことを、唯の一度も見たことはない』
女學生『それても先生が試驗間際に勉强などするやうては駄目だつて仰つてよ』
母『平生だつてしないてせう』
女學生『ヘア平生する樣ては尙ほ駄目ですもの』

○懺悔　大阪市　加津子

牧師「今までの罪を懺悔してキリストを信じなさい、そうすればあなたの今までの罪はキリストの死に依て償はれ、血に依て聖められます」。
求道者「暫らく待て下さい、今私は些し許り惡るい企てをして居ますから、それが濟むてから懺悔します」。

○つゝしみ　京都　津宮浪子

男子「おつかさんあんまりですよ姉さんに女のつゝしみをせよなんてお金をやつてからに」
母親「それはあたりまいですよ」
男子「さすれは僕にもお金を下さい男のつゝしみをしますから」

○先生は落第　宮城縣　佐藤しげよ

試驗休みもすんでいそ〳〵と學校へ出た小供が午後三時過に歸つて來て
小「阿母さん今日から二學年生になつたから私嬉しいのだけど先生は落第よ」
母「なぜ」
小「なぜつて一年の先生がやはり一年の先生だもの」

○遊び　本鄕　朝井千とせ

女中「此のいゝお天氣に家に許り這入つて被在つてはお毒てムい升よ」
嬢樣「ソーダ子、てはどつかへ遊びに行つてこよかしら」
女中「ても嬢樣お若い方樣一人てはいけません」



道行く人

はしがき 前號にも一寸斷つて置いた通り「道行く人」の課題に應じられた方が澤山ありましたから、本號にも入賞者、秀逸、佳作を發表しました、此れに洩れた方はもう出ない事とおきらめて次の課題に振つて應じて下さい(選者)

二等 びつこの太吉

讃岐國多度津東濱町 香川政子

今日私が最も初めに見たのは、びつこの太吉と申しまして、いつもよくこゑをはりあげて汽船の來たのや、出帆を知らせます、雨が降つても、雪でも風でも霧が立つても、人に笑はれても、ちつともかまはないて、一晝夜寢たり起きたりしてよくつとめます。

人間が變つてゐるだけ面白い

三等 北國

加賀 中山つゆ子

私の故郷は茨城で、今は方角違の加賀の方に來て居ります、て、皆さんが處變はれば品變はるとよく申されますが、全く其通りて、東京邊ては女が呼賣を爲て歩くのは少ない樣に思はれますが、こちらは却て女の方が多い位で、其樣子が一種特有です。頭の上に盤臺を頂いて、丁度東京の飴屋の樣、それにこちらては雨が多いせいか行く人、來る人の顏が何となく曇り勝の樣に私の目に映じます、殊に此頃は目に見做れぬ藁の脚袢と藁靴を穿く勞働人、又簑の樣な絆纏みたいな呉蓙を被る農夫が街に出て來るのを見かけます、雪の多い爲てせう。

おちついて書いてゐる

四等 神田

神田區北神保町七 壽賀子

私の宅は、神田區の中でも、最も繁華な所ですから、晝夜人の往來の、絶間はありません、先づ朝四時頃には牛乳配達、五時頃には新聞屋、それから八時より九時迄の間は、男女學生で道路一ぱい滿されます、私は、いつも、此通學生を見る毎に思ひます、彼樣に數限りない多數の中、熱心に勉强して、目的通り成功する人は、幾人位あるでしやうかと。

巷は若き人に充つ

五等 他生の縁

京橋區新佃島本町二 織田澄子

私が未だ小學に通つてゐる時でした雪の朝でも雨の夕でも毎け乾度吾妻橋の處で逢ふ方が御座います、年は私位でやはり小學へ通つてお出なのでせう、初めの中はあまり毎日なのできまりが惡くて俯きますと其方も俯ていらつしやいます、折にお目に懸らぬ日があると氣になつて、もしや御病氣でもと心配する程でした、二人ともだん〳〵馴れて終にはなんてお寒いのでせう等、お話するやうになりました。

私は其時分此方が女學校で同じ級になつて無二の親友となる吉子樣とは夢にも思ひませんでした。

ありさうなこと

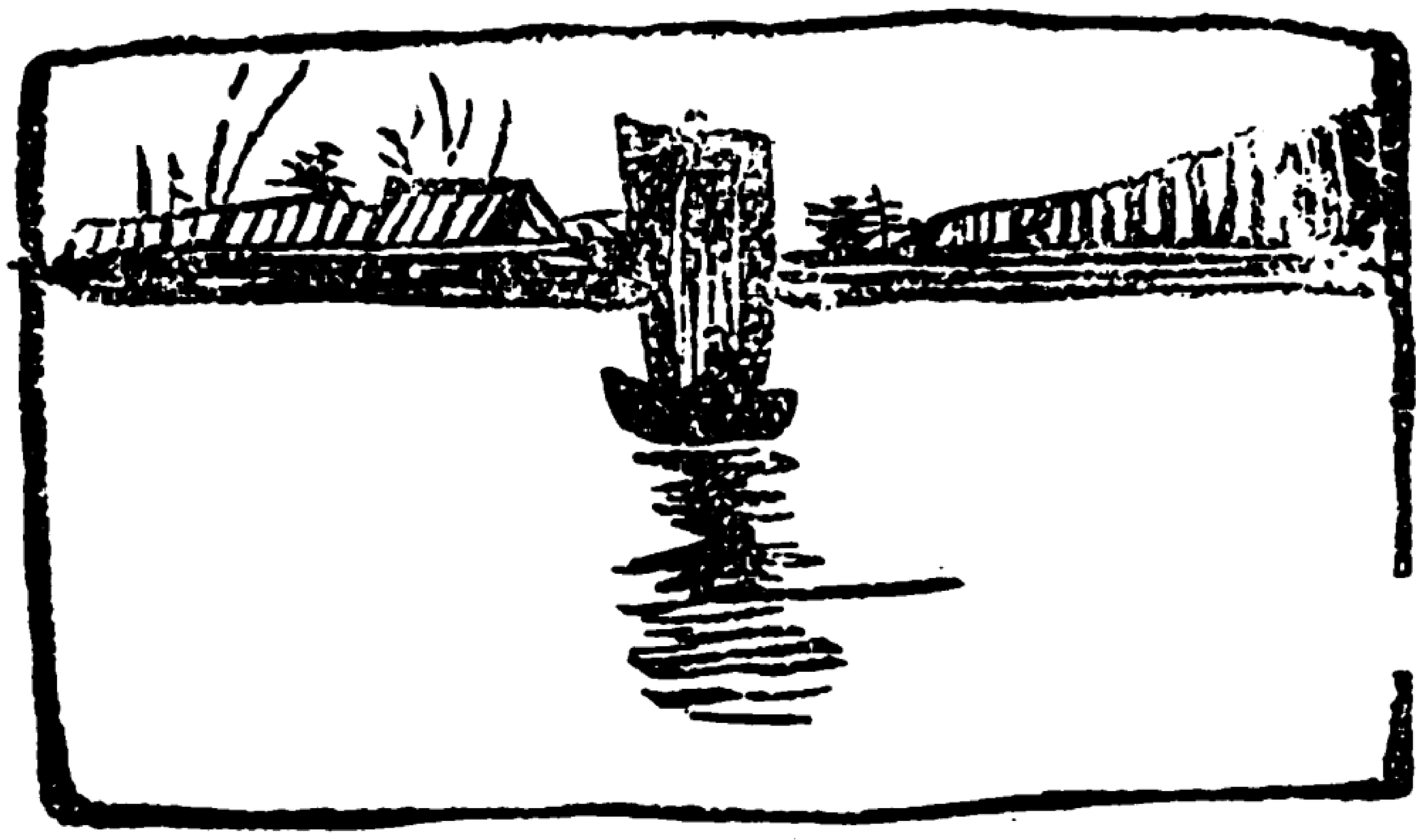
秀逸

○朝

横濱市　村田千代香

今朝の寒さは實に非常です、家根は見渡す限り霜で眞白です、私の前を先程から何やら歌を歌ひ乍ら行く十二三才の小僧がありました、身には古いしろし絆纏を着て居りました、道の片方で工夫が大勢でたき火をして居ます、通行の人や小學生等皆其所へよつては暖を取りました、小僧は夫を見向きもせずに行過ぎました、私は思ひました、彼の小僧は乾度眞事に忠實でしようと、そして何だか末頼もしいような氣が致しました。

海　伊豫　三浦紋子



○小說中の人

神奈川縣　木村はる

此の平和な田舍道を通る人は、或ひは田畑に急ぎ、或ひは何やら樂げに行きます、其中にも自分や諸姉樣方位ひの方が、お通りに成ると、彼の方達の人ては有るまいか、何と言ふお名前かしら、文壇に名高い彼の方は今お家に居らつしやるだらうか、其れ共如何言ふ道をあるいて居らつしやるのかと、勝手な事を考へ續けて、アノ非哀な小說中に出る樣な人は、必と何所にか有つて、そして淋しい〳〵何所かの道を首だれてあ、るいて居るでせうよとは、私が晝夜に限らず外に出て度々起る考へです。

○火山岩

本鄕　梶川德子

寒い朝道を行く人々の鼻を見ると、白い煙りを吐く二つの噴火口がある、其から白い溶岩の流れてゐるのも稀には見らるゝ、又は一方が消火山て一方が活火山もある、或は兩方死火山もある、噴火口の形は三角四角六角、或は柿の種、桃の種の類であるが、時によると天然の作用か何だか知らんが、周圍破壞して洞穴をなせる者もある。

○豆屋に女學生

上毛　柳澤元枝子

「豆豆・豆豆・こ」ひよいと雜物の顏を上げて見ると、いつもの豆屋が桶を肩にかけて、鈴を振りつゝ走つて行たのてあつた、見るともなく見送れば、桶の端につけた多くの紙袋が走る勢にひらひらと返つて恰も大きい白蝶が後を追つて舞ふて行く樣です、見えなくなつた、まああの憎

いお茶の水よ！處へひよつくり、大黑樣の頭巾をかぶつた樣な廂髮、薄小豆の被布に眞白なショール、馬鹿に向ふの端を行く〳〵自轉車がすつと通つた、一足毎に桑の木の枝が袖にばた〳〵とあたる。今頃は尺取虫が三疋位たかつたてしよう。

○二老人

三重縣　畔月女

風が吹かうが、雪が降ろうが、毎夕下宿の前を通る、二人の御爺さんを妾が見受けますの。一人は彼是七十に近い、白髮の漁師で、漁の澤山ある時は皺だらけの眞黑な顔に、何時も笑を浮べて、元氣がいゝけれど、不漁の時なぞは一種異樣な淋しい色を浮べて、俛た儘通つて行くの、一人は六十を二ツ三ツ越したかと思ふ屑買なんてす、此爺さんが宿へ歸る時は、屹度妾の前の小さい飲食店へ這入つて、立つた儘御酒をコップに一杯召上がる、然うして縞の財布からいくらか御金を撰り出し「又頼まんす」と云つて渡しますの。

○一品十二錢

神奈川　山本綾子

毎晩夜學からの歸途に出遭ふ一人の爺さんがあります、年は六十の坂を越えたらしく灰白色の頭の毛はまるで生れてから鋏を入れた事はない樣、背中には食道樂御料理均一亭と赤の處へ白く染抜いて側面へ何ても一品十二錢と書いた大行燈を脊負つていつも町を東から西へとぼ〳〵とあるいてをるのです、芝居のはれ太鼓がなつて數百の人が出口から吐き出されると爺さんは一寸其樣子を見てまた悪魔の樣な木枯に追はれて歸つて行きます、私は此人に遭ふ毎に金の尊さが一入身にしみて、學資を送つて下さる故郷の父母を有りがたく思ひます。

○朝

土佐　高橋白ばら

今し門前を淸め終た私は、板塀をたてに少時往來を眺めて居りました。まだ白い霜をふんてまゞ手を引いた男子、つゞいて子守五六人、しばらくすると村長樣の長い長い影法師を追ひながら一群の小學生が、ワンワン吠えつく犬に小石をなげながら過ぎた。紫袴の女先生を見送つた、そこへ二人の姉樣かぶりが「いやにお高いのネ」とて現はれたがすつとあなたへ消えた。またがやがやと小學生が。

○お藏前

大阪　堀ててふ子

「先き行く者酒やの丁稚、あとから行く者おほかみ狐」もう御晝と見えて幼稚園の生徒がガヤガヤいつてかけつていつた、後姿の可愛い事、りんを勇ましくふつて豆腐やが通る、どこやらでお豆腐やさーんと呼んで居る、お藏前なり取りにがしては……とお三の聲らしいやがてエー屑はたまつてーん屑ー。車の中には新聞だの、紙屑だのが、大分入つて居る、向の家の門口で聲かけたがまた其まゝ、エー屑はたまつてーんと流し行く。脊に物をしよつて自轉車にのつた小僧けたゝましくチリンチリーンとならしながらとんで行く、アッ帽子がおちかゝつてると思ふ間もなく横町をそれた。

○歳暮

名古屋　久江女

午後も三時となるともう日暮時だ、先程から俄に風が出て狹い道はみる〳〵中に塵砂の巷と化して了つた。常ても往來の稀なのに歳暮と來るから、それても豆腐屋ばかりは感心に毎日呼んて行く、今も横町から淋しい喇叭をふいてくる。とみると町端の藝妓さん、まアこの寒いに素足て、紫市松、アレチラホラと緋の蹴出、ツト此所を眺めたが私の居る事を知らないと見える、突然に大きな聲！とみると酒屋の小僧さん、通帳に樽を提げて、まア冷めたい跣足て、アレ質の悪い先の女とすり合つて行くのだもの、すると頭上てポツポツと、はや雨になつた。

○田舍の暮

羽前　杉葉女史

暫らく人切れになつてあつた宅の前の街道今馬車一輛、馬子の諸聲に勇み勢よく走り去つた後は餘程下駄の音も聞えて來た、赤毛布を頭から冠つて手に油罐を提げて行く人は慥か今夜の燈を氣附いて石油店に急ぐものと見える、すり違ひに十四五許りなる少女子、口のかけたる德利を抱いて行つた、後には炭を引いた車が急ぐ、農夫二人、小僧二人、婆さん一人行つた後には尼一人、寒さうな裝束行違いに大工姿の五十ばかりの人、柱のやうなものをかつぎ去つた、黒い點のやうな自轉車、今人を越して山を左りに

消えた、陸よりは牛の聲も聞える。

○田舍道　靜岡縣　青木靜山女

朝六時頃五六町先の叔父さんの家へ行く途中隣の新嫁さんが、くわを肩に白手拭、眞深に、かぶつて一寸會釋しスタスタと山路をさして行つた後から新さんが馬に乘て追分の節面白くチヤラン、チヤラン、鈴音させて通る自分は右の土橋を渡つて廣い縣道へ出た、すると牛乳やの小僧に會ふ相變らずラツパぶしを、とくいにうたひながら車をひいて行く、やがて三四丁行くと向方から長い旗を立てゝ人が多く來る中に馬に乘て見るからに、つよそうな人が居た旗を見ると入營と筆太くかいてあつた。

○田舍　岐阜縣　水野政子

ふだんでさへも人通りの少ない田舍小路、まして此頃のさむさでは學校歸りの子供であらう「天の河涙あれたちて」と唱てすぎさつたあとは、たえて人の足音がせぬ、私は一人火鉢に身をよせて、深い物思ひにしづんでゐると、勢よききくぐりの音して郵便。

○長い阪　長崎市　一瀬綠子

二三人の子供が上つてしまつた後へてくてく杖ついてお出でたのは一人のお爺さん、フウフウ言ひながら此の長い阪を上り初めなさつた。漸く半分ばかり上りなさると ハアーと太い溜息をついて兩手を杖にもたせながら「長い阪」だと一人言して行くこの阪をじつと眺めなされた。突然走つて來た職人體の男、わき目もせないで足許ばかり見てせつせと上つて終つた、その早いと！お爺さんはまだ腰んで居らつしやる。妾は今下りつゝあるのですが人は若い時に一生懸命に勉むれば恰度今の男の樣に早く目的を遂げるのだと熟々考へました。

群鹿　矢名子



○辻占賣　京橋　櫻井久子

私は或る河岸を漫り歩行して行くと細い露路の中から現れた一人の女がある。年は廿五六位で一人の赤兒を背負つて居る、右手には提灯を持ち左手では何んだか箱を抱へて居る、此姿は何か物賣の樣である、と思ふ彼は早や一丁も先で優しい聲をはり上げて呼んだ『あぶり出しくく』とこう繰り返す、其の聲は遠い岸に反響していかにもあはれに聞えた。

○氣の毒　南豐　藤の家瑠璃子

去る八月に私は杵築の叔母の宅に行つて居ました、ある雨のそぼ降る夕方、二階から下の通りを見て居ましたら、向ふから二人の中學生が節を合せて呑氣そうに、吏官讀到日本王 相公怒裂明册書と吟じてきます。所に何處の老人か一人の婆さんが。着物をぬらすまいと油紙を肩に着て洋傘をさして通りました。行違ふ中學生實に失敬至極。大きな聲で「君大きな小包だのといふのです。婆さんは急用と見へて足早に忙しそふでしたら、あゝまてにくらしい二人の學生一二一二と號令をかけるのです、見て居る私は氣の毒で成りませんでした。

○富と貧　岡山縣　廣江壽子

道行く人をじつと見て居ると、二三人の女學生が急ぎ足に行く、あれは大方女子文壇でも買ひに行くのだらう、其後へ續いてあさぎのづぼんに尻切り襦袢で棒一本を荷ふて行く、中をエツエツと車夫が馴けて駈け行く、乘つた人は若い

紳士、吁々同じ人間に生れ同じ空氣を吸ひ同じ飯を食ひ乍らあの樣に俥に乘る人もある、あの樣に挽いて走る人もある、金と時とを費やして遊んで居る者もあるが、尻切のおじさんが一番富らしい、才智は俥上の人に、文藝はあの式部連に、然し俥の手を取つて走るあの人は何に富んで居るでしよう。

○風粧

和歌山　操子

緋の着物に海老茶袴は學生らしく、洋服に八字髭は官吏らしく、あつしの着物に紺の前だれは丁稚らしく、襟高き大學生と、額を沒せんばかり突出てたる廂髮と、肩を並べて喃々と語り行く、こよなういやらし。

○刹那の思ひ出

加賀　林美惠子

昨年の或る夏の夜、涼みがてら、親友の春江さんと、二人が行くともなしに、賑やかな市中に出て、道行く人を見た、書生もあれば、軍人もあり、商人もあり、行き來る人は、千差萬別の、うづ卷く中を、恥しそうに、夫らしき人に、後れつゝ歩む婦人を見た、刹那に過ぎつる日、都へ嫁入せし姉さんの事を思ひ出しました。

○感慨

豐後　加納豐子

何迄て會つて見ても氣持の好いのは青年學生てすが、それに反對て、浮世の限りなき道行に遂に目的の地點まで進みきれず、かくして徒に年老つた人生の敗北者が、天下の公道をも憚るかのやう小さくなつて片隅を往來するのを見る度に、私は何とも言へぬ一種異樣の感に打たれるのてす。

○職工

大阪　武田とし

年の頃、二十五六てあらう、身體の瘠せた、何となく疲ひのある蒼白い顏色の男が、汚れた小倉服を着て、不似合ひの木履を穿き、右手に白の風呂敷に包んだ、大きな辨當を持つて、人通りの疎らな河風の肌を刺すやうな、濱通りを急いて行く、胸に掛けてゐる徽章を見ると、砲兵工廠の職工てあることが分ります、此人は毎朝同じ時刻に、同じ風體をして、雨の降る日も、風の吹く日も、缺かさず此處を通るのてす。

○吹雪

備後　井上年子

ある冬の夕方てした。十二三の女の子と七つか八つか位の男の子と、可愛らしい二人の巡禮が向ふの畷道を鎭守の森の方へ、寒そうにすたすた行つて居ります。身を切る樣な北風が、雪を誘ふて強く吹いて來たので、冰るすげ笠の紐はぷつゝり切れて、飛ばんとするのをやつと止めた途端、男の子はパッタリ倒れました。女の子は直ぐと抱起して辿りましたが、互に顏を見合せてワッと泣き出しました。

あゝ無情の雪は、遂に二人の姿を包んて見えなくして了ひました。細い哀な泣聲のみ風のまにまにも聞えます。

○冷笑

神戸市　平林たつ子

今朝私が表口に立つてゐますとね、東の方から一人の老爺さんが參りました、さう都合の好い方てもないと見えて、衣服は汚染て、帽子など見るも氣の毒に堪へられないやうなのを被つて。杖を力によぼ／＼來るのてす、すると西の方から女學生らしい女の人が來て、すれちがひながらさげすんだ如な眼をして、老爺さんをジロリと見たのてす、而も其目許には溢るゝばかりの冷笑さへ湛えて居るてはありませんか、何故てすか、私はこれを見て他事とは思はれない程腹が立つたのてす、て老爺さんの復讐をする氣て其女學生をグッと睨みつけて通りましたわ。

○記憶

白百合

私が八歳位の頃てしたろう、丁度萩散る夕に私の家の前を通つた五人の少年が有りました、それは孤兒院の小供だそうてすが、其内の一人は片手が有りませんてした。私は其時少さい胸に感じました、此の片手のない少年を捨てた御父さんや御母さんはどんな人だろうと、そうして少年の身の上を氣の毒に思ひました、七年後の今日も忘るゝ事が出來ませんのよ、吁々彼の少年は今何所に。



旅行の歡迎

はしがき 文壇餘興として企てました記者の新年旅行は引つゞいて新春旅行も試みるつもりでしたが、時日の都合、否實は紙面の都合て一々參るわけにゆきませんから、茲に旅行の歡迎として諸孃のお作りになつた中から秀逸の分を文章其儘で載せる事にしました。(記者)

信濃　諏訪　あき草

あら、何處かお打ちなすつて？お腰をまあ。サア恁う云ふ風に這ろのです。エヽ、其通りてすけれど、何だかお腰の具合が變てすわ、ホヽヽ、まるて蛙が立つた時のやうアラご免なさいまし、お客樣に向つて隨分てすはね。サア最う少し向ふへ參りませう。……アラいけませんねえ那麼處に座つてらしては――恐くつて。――ては私につかまつてらつしやい。ホラ甘く這ろてせう。

新年旅行に氷辷も面白いてはありませんか。

記者曰。何だか危險らしいから此邊て御免蒙ります

武藏　入間郡　淺見波子

妾は記者樣がお出になりましたならばお恥かしうはございますが、新體詩の朗讀をしてお聞かせいたします。歌は日頃愛誦致します藤村詩集の中の『別離』と云ふので「あやめも知らぬしや身は苦しき戀の牢獄より罪の鞭責をのがれいて戀ひて死なんと思ふなり」の邊りになりますと妾の瞳の盈ろのをご覽になるのてせう。

記者曰。うたひ手がうまいと瞳が盈るてせうが記者のやうな棒讀みては一向平氣てせう

ひだち　石岡　今泉磯千鳥

「記者樣私の方へ仰入しやい。」そして私の家をあてヽご覽なさい。きたないあばら家ですが。もし當つたら石岡名產の酒と醤油とを一樽づヽ差上げます。だけど一寸ことわつて置きますが、酒はいくらお飲になつても宜敷うございますが醤油はお飲みになつてはいけませんよ。奥樣へのお土產てすから。

記者曰。家をあてろとはむつかしい事てす

青森市　米町　村林矢須子

この寒いによくまあ御いて下さいました、はい此處が合浦公園です、上野にくらべましたら、箱庭の樣てしよう、さあ海邊へ出てずつと右の方を御覽なさいませ、山の陰で僅に光かる屋根、あれが野内のタンクて、あれの少々向ふの島が湯の島てす、左の方のあれが棧橋て、ずつと彼方が沖館油川なんてす、後むいて南の方の高い山、あれが凍死て名高い八甲田て御ざいます、オヤもう時間てしか、まあ御名ごり惜しう御ざいまし事！あの記者樣これは當市の名產昆布羊羹てしが汽車の中て御あがり下さいませ。さようなら。

記者曰、時間てしか御ざいましなどとしとすのまちがひはお直しなさるやうに

羽後　平鹿郡　佐々木園子

記者樣新年旅行寡ばしう存じます。何卒妾の處に一番早く御出下さい。妾は秋田平鹿の里見村で奥羽線十文字停車場より僅に一里半てありますお暇を戴いて、御出の日を御通知下されば、お母樣からお許可を戴いて、妾と妹と二人で停車場まで歡迎に參ります。家に參れば、奇麗な座敷で、手製の寒餅をあげます。お土產には美しい林檎と香の好いまるめろとを澤山あげますから、大きい袋を忘れぬやうに。

記者曰。袋ても箱ても

根室　根室　寒國女

記者樣當地へ御着の頃には妾馬橇でお迎へに出ますの、第一に港内一面の厚氷の上へ御案内申して氷魚釣りの實景をお目にかけます、是は根室港獨占の風景と存じますよ、其氷の下から漁つたお魚を色々に御料理して差上げます、紀念のため記者樣と共に寫眞をうつしたう御座いますから是非お聞き届けを願ひます、次は何處かの廣場て町の人々の爲に何か有益なお話をして下さい、若しお話して下さらないと此次におい出下すつても、どなたも歡迎致しませんから其おつもりで。

記者曰。雪と文學のお話てもいたしますか

天鹽　天鹽　相原すみ

高さ一丈許りの雪達摩を作へてアーチに代へ、其頭から頭へウエルカムと書た小旗を連ね、私達誌友は其兩側に列んで、記者樣の御光來を御待ち申ます。達摩門をくゞつてから氷つた雪道をスケーチングで會場迄參りますの。其時私共の内で倒れた人は最新發明の不思議蓄音器の面白いのを一曲御きかせ致しますから、記者樣がおころび遊ばした時は是非共滑稽百面相をして頂きます。

(五等)

記者曰。雪達摩のアーチは奇拔

新年旅行懸賞當選者

新年號にて發表したる分と、本號の分と合せた中から文章構想共に優勝な作者五人を選び左の通り懸賞品を送附いたします

一等　兵庫縣西宮町　森井せい子
二等　佐世保市山縣町二七　淺田克子
三等　德島縣勝浦郡高鋒村大字紫　濃子
四等　傍示村堀田勘三郎方　あや子
四等　岡山市小橋町富岡豐吉方　相原すみ子
五等　北海道天鹽留萠村

賞品は一等金一圓二等七十錢三等五十錢四等三十錢五等二十錢の圖書切符を呈す



讀友俱樂部

婦人は其の愛する時にも恐怖に過ぐ　セーキスピヤ

讀孃と記者

○記者樣、私は昨年から本誌を愛讀して居りますもう面白くてどうしても止められません 私の兩親は投書しなければ取るかひがないと云ひますから 之からは一生懸命になつて投書します それはそれは幼ないですがお笑つてはいやですよ そして御教導下さいませ（靜岡縣黑田繁子）（記者曰、投書しないでも大いに讀む甲斐はあるとおもいます、然し投書して載れば猶ほ讀む甲斐があるでせう）○記者樣方には此の頃の寒さをいかに暮し遊ばされ候や 私事あつかましきことながら淺學なる身をもかへり見ず昨年よりの投書さぞかし お笑ひも候はんと萬々承知致し居り候て筆とるたびに我の身のはかなさをかこち候も生れついての文學好きはつい〱投書致し誠に申し譯なく候つとめはげみ終生女子文壇を友といたし勉むる意に候間何卒あはれみ給ひて御目御掛け下され度候（信濃川上愛村）（記者曰、なつかしみのある文章、好き讀友の一人を得たことを欣びます）○チー記者樣、ひどいじやあありませんか、私は此欄でエハガキ交換お願ひしましたのよ、だがあんまりですヮ、男子の方が名前だけ女子のにして、御寄こしになるのですもの、私しは、男子のお方との交際は御願ひしませんでしたから、筆法が男子と認めたら御返しは致しませんの、近頃は此の類が緞々ありますよ。そして、又繪はがき差しあげても、ウとも スとも御返事なさらないお方が女子にもありますが、隨分ですわチー。（磐城双葉の奕枝子）（記者曰、マアさう憤慨せずに交友して御らんなさい、澤山のなかですからいろ〱の方もありませう、其中から一人の信友を新しく得れば非常な幸福です）○投書規則に二十四字詰とか二十一字詰とかしてありますが、若し脫字がありました時には側に入れて置けば宜いですか、其とも書直さればなりませんか（紀伊みさほ子）（記者曰、傍に書いてよろしい）○記者樣方の御健康と女子文壇の隆盛とを朝夕神かけて祈ります 次に記者樣此の誌友の孃樣の内にづいぶん惡い方もありますのネー私も俱樂部を見まして 二三人に高價の本なぞ送りましたがなんの御返事もないのですよ 私今になるまで首が長くなる程待つて居りますが 實に殘念でたまりませんわ　（東京本鄕ニテ保延哀女子）（記者曰、惡い人には惡い結果があります、記者は彼の惡を懲すべく神に祈ります）○記者樣、又しても御邪魔ですが妾の撮影贈りたいのですが、都合で返して戴く時は先きに當方から郵稅を送らなければなりませんか、ちよつと御敎えを願ひます。（大和五條梁山英子）（記者曰、只寫眞の裏に乞返送と認め住所姓名さへ書いてあればよろしい、郵稅は本社で支辨します）○和歌は新派なら新派と明記するのですか（千葉縣、柳月女史）（記者曰、左樣）○記者樣作文和歌等を同時にして投書してよろしう御座いますか（仙臺文子）（記者曰、よろしい）○貴社直接の購讀者でなければ作文短篇小說などへ投書出來ませんか何卒御敎への程御ねがひ申上候也（大阪府津田かつ）（記者曰、直接でなくとも讀者でさへあればよろしい）○私は長らく女子文壇を愛讀して居りますが 兄は秀才文壇を愛讀して常に投書しますので 私も一つ投書が致たう御座います それに由りましては 金でも送らなくてはならぬのですか敎へて下さい（大隅、稻元かり子）（記者曰、投書には何も入りません、投書だけて結構です）○女子文壇に作文を出さんと思ひ居り候ふが如何になしてよろしく御座候哉 御たづね申上候（熊本、植村かれ）（記者曰、別にむづかしい事はありません、美文なら美文、短文なら短文和歌なら和歌と別々の紙へ書いて本社へ郵便でお出しになれば好いのです 別項、投書規則參考）○壇の浦の端葉書に「君と同じく脚疾ありて吾亦餘命を秋風に托す」とかいて贈られたる某君三葉の水彩畫を楣間に揭げよとて惠み玉ひしMK君、北日本海岸の茱々地より數十葉の端葉書を寄せし埋れ草の君、以上お三方の住所姓名を知りたし、親しくお知らせ下さらば本望なるべく候。（常陸、下妻、大寶村 横瀨虎壽）○初めて投書するからよろしくとの御挨拶、投書規則を見れば分るやうな問合せ、本誌に對する注意を記者の參考までに述べられたもの、など一々本文を揭ぐる程てもありませんから 其厚意は玆に鳴

謝し、返答申すまでもなくよろしい事なども其迴りて只御名だけを左に列記して置きます、新潟、田沼千代。周防、むらさめ女。元枝子。上總森ふみ子。川上靜江。備後、井上年子。シベリア野の三十女。本所、三森ゆき。磐城、登利子ぐ若狹、野菊。長門、紫雲女史。庾みゆき。尾張小幡丹彩。瀧澤さつき。備後、シーケー女。宮城、敏子。信濃、犀波子。千葉、遊星子。呉市賤ノ女。濱田、千鳥子。京都、隆女。岩代、菅野夏子。投書家。埼玉、調谷房子。深川、宮代子。ひさよ。綠。もと子。靜岡、増田靜子。神戶、水野てろ代。神奈川、花月女史。仙臺、藤井みつ子。

圖書換讀

○皆様。女子文壇第九號御送附下さいましてありがたう存じます。丁度今日迄十六册集まりました、それ〴〵夕すゞみ、花ざくろ、紅葉全集第五卷など て御返し致しました。尙今後とも宜しく繪はがきや お手紙の御交換なすつて下さい。失禮てすけれども 初めての御方は御住所だけ なるべく楷書て書いて下さいまし。さよなら。(大阪府泉北郡横山村善正、辻林芳子) ○諸姉様の御方にほとゝぎすの歌御欽へ下さるまじくや御禮は必ず致します (伊豫越智郡小部糸川とく子) ○私に左の不用書があります故最美なる 繪はがき八枚以上て申込めば添本いたします 御自分の寫眞を添へて下さる方には何册ても差上ます 食道樂春の卷より冬の卷まて全部四册(最新类本也)藤澤氏の算術敎科書上下、露伴氏選短詩集さわらび、小品文集踏沓、大槻文彦著日本文典、露風戀愛、露讚、新詩語さゝなみ、新不如歸、不如歸の歌、玉蟲、日本文典問答(新潟縣佐渡郡新穗村字長畝土屋木瀬子) ○諸嬢様の中に夢想兵衛源氏物語、竹取物語、平家物語、伊勢物語、古事記萬葉集、大鏡、増鏡、水鏡、或は詳解、言海、千草の錦、てにをは其他 國文に關する書と私の左記の書と交換して下さい可成速に新約全書、歸省、雄辯新法、庭訓往來、實語敎、商人の新天地、明治紳士物語、ベーレー萬國史直譯二册、十八史略二萬國歷史の一部、西哲叢談上、日耳曼國婚姻の事情濠洲及印度、幸福の種、世路日記、維新三傑、いろは文庫、大日本帝國史、支那帝國史、印度史 希臘羅馬史、記事尺牘文例、血達摩一代記、女子修身訓、女子乃修養、漢和學中辭典、算法記、銀行論、小說佳人の奇遇、海賊陸奥の松風、小藤の月、令孃と勇兵其他 (男子は斷る) (群馬縣碓氷郡磯部村東上磯部柳澤もと子) ○趣味九月號御送りの方には十月の新小說を差上ます (大阪上福島二の六三七吉岡みれ方生田さくら) ○妾のてもとに黃菊白菊、自然と人生、ハイネの詩集、文章世界などあります故露風戀風か小女の戀、夏子、維子どれにても一册と御望の書二册と御交換下さい(山城伏見竹田口小谷房子) ○親愛なる誌友の皆様私の所に新撰敎育學及敎授法並に修身學 講義次に高等女子讀本卷二三と 不要になつて居りますから新ばんか らふと地理學全地圖などが不要になつておいての方は右の中おいりの書物と一册に一册と云ふ様に御交換を下さい 交換して下さる人には羽織のひもを添へて上げます 但し先着二名へ(宮城縣栗原郡川口高梨敏子) ○諸嬢様の中て己が罪と云ふ小說御持の方て御 不用になりましたら送つて 頂戴な又繪葉書交換も澤山願ひます (岩代國安達郡和木澤村大字和田根本喜代子五女) ○慕はしき諸姉様の内て逍子、己が罪、青春、露風戀風、吾輩は猫である、錦子など お持ちの御方は何卒妾の手許にある平家物語、 綴千山萬水、硯海餘滴、すていし、子供のしつけ等と交換して下さりませ御禮として 長岡名物の越の雪、一箱宛つ差上ます、猶汪編物、造花、玉章の交換を望みます 妾しは決して良心に耻入様な事はしません 必ず相當の御禮は差上ます、越の雪は草子の名てあります (越後古志郡福道遠山方日下きよの子) ○繪葉書三枚以上若しくは和歌の本御送りし方には左のお望み本を送まります 太陽、秀才文壇、女子文壇、學生文壇、 少女界、少年世界、婦人世界、少年界、中學文壇、中學世界 等澤山ありますから御返事は郵に願つてよ (相摸國高座郡大和村下鶴間鍋田美代子) ○皆様の中て思出の記、自然と人生、天地有情、花紅葉、ハイネ詩集、新舊約物語、破戒 等御不用の御方は、御情を以て、私の、竹取物語、小說新社會、文明の大破壞、玉蟲、シルレル詩集、社會と新化、松蟲 鈴蟲等の内御好の本と、 御交換なし下さいませ、(周防國都濃郡久保村磯部まつよ) ○誌友の姉様よ妾の手許に、戀と死、三千里、東京苦學案內、 中學生女子文壇、ハガキ文學、秀才文壇、 浪花、などありますから姉様等の御寫眞か編物かりぼんて 申込み下さい屹度差上げます (秋田仙北郡黑澤村下延鈴木紅淚子) ○誌友の皆様どうぞ編物音樂のおもしろき諸小說を御めぐみ下さいな 小說はれたとへばホトヽギス、露風戀風、錦子、夏子の様なもの、御不用物を御めぐみ下さいな (東京市

麻布區新龍土町五番地福谷以智子）○諸姉樣の中に、藤村詩集、二十八宿、暮笛集、行く春、白羊宮、夢の華、黑髮、香川景樹翁全集、等の不用がありましたら、お讓り下さいまし、また私不用の書籍と御交換下さるも宜しう御在ます、私のは、花紅葉、實用造花術指南、裁縫道知るべ、女波男波、女子新用文、二十世紀女子美文の資料、此外に女學世界秀才文壇等があります、（神戸市御幸通二ノ一平林たつ子）○誌友の諸孃さまお讀み古しの女子文壇十二月號を御惠送下さいな相當の御禮は必ず致します（舞鶴局下字十倉小谷保太郎方きよ子）○私は田舍に一人さびしく唯文壇を友として居る者ですが何卒諸姉樣古き雜誌でも或は自筆の繪端書でも御惠み下さいませんか御禮に東宮殿下御行啓紀念繪葉書を必らず差上げます（大分縣東國東郡西安坂村小山富治方さだ子）○妾の手許に、作文大成、作文辭書、東京苦學案內、官費學校案內、二女子文壇數冊、第一懸賞文集、少年食パン製法等、ありますからどうか、外の本と交換願ます（奈良縣吉野郡上北山村東之川中彌三郎樣方中時枝）○妾の手許に小說其他雜誌類澤山ありますから入用の御方は御所持の書籍目錄を御送り下さい私も右書籍一覽を送ります（岡山縣兒島郡興除村大字曾根孝忠幾美）○誌友の姉樣こん年も相變らずお手紙や寫眞の交換お願ひ申ます先着十二名にはみぐるしき寫眞差上ます（丹波氷上郡和田五ヶ野村岸本宇能枝）○如かわらず繪はがき交かんを願ますよ妾はまだ見苦しい寫眞が十枚ばかりありますゆへどうかみな樣交かんして頂戴な送くつてくださつたらきつと送りますは妾のもとにホトトギス奇美人美人揃、黃菊白菊、百合子、化粧かゞみ其他たくさんありますから御入用のお方は上等繪はがきか俳句の多く書いた雜誌で申越しくださいすぐお送りいたします（山城國綴喜郡多賀村木原岩次郎樣方村田まさ子）○皆樣の內で俳句の書籍雜誌御持の方は妾發行の俳句雜誌と交換下さいませんか（西讃三豊郡和田村百十七十河春江）○皆樣私の不如歸、あさぱれ、おかめ八目、笹かに執念、倉橋幸藏、雁の浮巢、歸省、國民小說（五册）文華、文藝界、文藝俱樂部不用になつて居りますから皆樣の緣不緣、吉丁字（新聞切拔きにて宜し）伯爵夫人、天うつ浪、あゝ無情と御交換下さいませ又御寫眞や畫葉書に歌や俳句を書いて御惠送の方には御禮として小說雜誌を差上ます（岩代國耶麻郡熊川村仲町佐藤こと子）○私は今年十七になりました只今小說金色夜叉合卷世間前後廢區毬全四册、魔風戀風三册、吉丁字二册、思出記、金蒔繪、コブシ上中、爺子二册、嫁淵、富と愛愛火、少華族、月に立つ影二册、かこひもの、滋子緣不緣、妙な男上下琵琶歌其他雜誌數十部あります、皆樣の中で次の小說と交換して下さいな、少華族下、富と愛下、靑春全四册其他寫眞ひじつき紺しぼり（東京本所區番場町磯野すみ子）○謹白！諸孃に女子文壇のやうな文學雜誌で御不用のものあらばいくら古くとも又何雜誌でも宜いから御惠送下さい（羽前國西置賜郡南小國小學校內朝岡こう子）○妾は魔風戀風、天うつ浪、滋子、靑春、一葉全集、行く雲、寒鳥集、若菜集等の不用あります伯爵夫人、夏子、己が罪、女夫波（前篇）破戒、花守、藤村詩集、二十五絃、暮笛集、白羊宮御持合せの御方は交換して下さい編物を添へます其他高尙なる栞の交換も願ます（新潟縣見附町高野半之資方久子）○妾の手許に國民中學會の、正則中學講義錄が、第一學期の五號迄ありますから、何かと交換したし（愛知縣碧海郡矢作町橋目永田舞鶴子）○お姉樣方の中に小說己が罪、にせ紫、二筋道、靑春三部お持の方はいづれにてもよろしき故こゝ五六日間おかし下さい御禮には私のみにくい寫眞に美しいリボン繪はがきをそへて屹度おかへし致します（茨城縣東茨城郡中要村中山道江）○世の中のおなさけふかき諸姉上樣妾も女子文壇購讀の一人ですわどうぞお手ひきを願ます妾肉彈、不知歸、夫定め、書海其の外靑年少女に讀める書がありますのよ御望みなら繪葉書ブック、名所繪葉書等で申込みなさい妾男子の方でもかまいませんのよ（常陸國關本局區內山川村津加多きり子）○私の手許に言海、一葉全集、幻影、不如歸、不如歸の歌、萬朝懸賞短篇小說傑作集、大家短篇小說集、馬琴傑作集、謠曲評釋、宇宙と人生、小鼓、短詩集、白玉姬、黃菊白菊、多情多恨、中等敎育作文敎科書、日本文典、孔夫子傳、俳句修辭法、病間錄、煩悶記、慘風悲雨世路日記、小說神髓、食人國探險、百字文の栞其他文藝俱樂部、女學世界、新聲、明星、文庫、秀才文壇、等各澤山不用になり居り候間相當なる文學書籍と御交換なし下され度又繪葉書交換等も願ひ上げ候（筑後國大牟田郡橫須新町三丁目永松翠子）○皆さん御返事はキット致しますからどうか面白い雜誌や小說美文玉むし朝ばれなど御不用の方は惠んで頂戴な（京都府八木ステイシヨン西齋藤笑子）○諸姉樣の中に吾輩は猫である全部、天外著緣不緣、關根默庵著演劇

大全、伯爵夫人全部、夏子全部等御不用の方はいづれも私の日本葉書會上等繪はがきと交換を願ひます(大阪府東成郡黒江村大字殿辻山本慶行)○どなた樣「玉虫」お持ちの方は一寸おかし下さいな、お禮に美い繪葉書に網栞等をそゑてお返致ます(北海道後志國朝菜有戸村橋本千草子)○私は目下各地の新聞雜誌蒐集中でありますから何卒御寄送を願ます其御禮として趣味ある繪葉書一組宛送ります(富山市旅籠町林友月子)○誌友の諸姉上樣よ御不用の「日本新用文全」「新撰女子記事文」「作文資鑑」「古事記」の何れにても御惠み下さい御禮には妾の「女訓評釋」「女學生訓」「黄菊白菊」の内一册必ず上升よ(秋田縣河邊郡新屋町字中表町高島佐四郎内海風つや子)○妾の手元に玉蟲と朝晴が不用になつてゐますどなたか村井弦齋著の食道樂秋の卷と御交換を願ます(靜岡縣小笠郡上内田村岩井寺稲井道子)○第十五號の誌上で御ねがひ申ました處多くの姉上樣よりいろ〳〵の圖書御惠與下さいまして誠に有がたく其節それ〴〵エハがキで御禮致して置きましたが猶ほ誌上で厚く御禮申上げますまた西遊記東遊記鐵假面思出の記紅葉全集毛筆畫帳など御不用で被居いましたら何卒御送り下さいまし(近江大津市上堅田町十六番地疋田まつ)○誌友の御姉樣方よ妾は小說又は詩集などを讀み度いと思ひます皆樣の内不用のお方が有りましたら何卒御惠み下さい、妾の手本に在る書にて御禮致します(横濱市根岸町三二五七酒川方村田千代香)○皆さまの中に國民中學會講義錄の二三四學期の全部お持ちの方はございませんか、若し御座いましたら讓つて下さいませんか、それとも相當の本と交換にても宜しうございます。(茨城縣眞壁郡上妻村大木千代吉樣方君子)○諸姉樣よ先日御送り人に相當の御れいたしました皆樣の内に「言海」「いろは字引」「明治新玉篇」「明治卅七八年戰役陸軍凱旋觀兵式紀念スタンプ付繪はがき」「日本赤十字社紀念スタンプ付繪はがき右御持合の方は古物にても宜しいから御送ツて下さる方に左の本にて御禮します「天打浪全部」「心の浪全部」「松がうら」「己が罪全部」此外拾壹册に上等繪はがきにて拾人だけに私の寫眞はつて御禮します必ず(羽後國新屋町字愛宕町藤島さき子)○皆樣松風村雨天うつ波小說家やけ火箸和歌入門を御送りください御禮は相當の品を以て屹度々々御返し申します(新潟縣南蒲原郡見附町本町坂井傳次郞方松村芳子○お情ある諸姉樣よ、魔風戀風、夏子、敏子 融子夫人、乳姉妹、思ひ出の記、等お惠み下さいれ、私よりは、美人島探險、文藝俱樂部、呂宋助右衛門等に、栞か繪葉書かリボンか添へて差上ますよ(大阪川口本田三番町八九加藤琴子)○どなたか紅葉全集の第六卷御持ちの方は妾の樗牛全集第四卷及獨步集の二册と交換して下さいませ、又妾の手元にクラリオネツトがあります、圖書又は寫眞器械と交換して下さい。どなたでも往復ハがキで申込み下されば高山町の寺社の印影を御送りします。(飛驒高山日枝社内みつしま)○誌友の皆さん不如歸の歌、新體詩作法お持の方は私の自然と人生、婦人世界、女子文壇、秀才文壇等とお交換下さい(紀伊日方局區内安原村松原木下操子)○なつかしき諸姉媛樣方妾の手許に不如歸の歌、金色夜叉の歌、言海、千家物語、寒石、櫻の御所、白縫物語、里見八犬傳、春日の局等が不用になつて居ますから諸孃樣の內て肉彈、多情多恨、伯爵夫人、己が罪、吾輩は猫である其他面白き小說お持の方は何卒交換なし下さいませ(越後國古志郡福道遠山樣方日下きよ子)○皆樣何卒雜誌の交換を願ひます女學世界ムラサキ其他明星、新聲、新潮、文庫、詩人、ホトトギス、心の花等であります(周防小松局區内西之濱村谷芳子)○姉上樣方の御手許に女學生訓、女學生の栞、新撰女子作法書等の不用がございましたら私の家庭百生活、當世交際社會、女寶寶記、婦人衞報、仙臺名所繪ハガキ等御禮に差上ますから御惠み下さい(岩代安達郡小濱町大字上長折字仲之作佐藤什伎)○誌友の皆樣魔風戀風、黄菊白菊、天打浪、伯爵夫人、緣不緣、孝女白菊、雛子、百合子、青春、乙女の操、夏子、等御不用の方樣、妾の思出記、露子夫人、新家庭、十五少年不如歸、美文錦囊、中等作文資料、宇宙と人生、女子の本分、裁縫と編物、女禮と裁縫、雜誌は、新小說、中學文壇、女學世界なでしこ、文藝俱樂部、威功、秀才文壇、等有ります故是非交換して下さい(長野縣更級郡中津村桑原時子)○皆樣の内で嫁が淵雛子コブシ日の出島などもつていらつしやるお方は私の仇浪己が罪上中下金色夜叉全部と交かんしてちようだいな(神戶市中山手通六丁目水野てる代)○誌上の諸姉樣私の所に農業敎育五十八號から七十六號まで、新選女子書翰の栞旅行案内和洋料理遊趣味美文的日記文妙不可思議奇術婦人世界文藝俱樂部本誌少女世界少女界敎の光などが不用になつてますからひじつき(絹)絹ハンケチ小說夏子いづれなりお送り下

された方に幾冊なりお望みに應じて送ります（臺灣臺北農事試驗場官舍稗貫みつ子）○誌友の御姉様方よ皆様の內に不如歸、思出の記、靈光なぞ面白き書御持の方は妾の俳諧文集、文藝俱樂部、新小說、玉蟲、ムラサキ、女學世界、中學世界、婦人世界などと御交換して頂戴な（千葉縣長生郡日吉村鴇谷齋藤秀子）○誌上の諸姉上様の中で吉丁字。肉彈。みだれ髮。さんげ。ふた昔。玉手箱。多情多恨。伯爵夫人。心中くらべなどの書お持の方は妾の文明の大破壞。日本倫理學案。日本文典。狂歌一萬集附川柳。洋書。芭蕉翁發句集などと御交換成下さいませんか（千葉縣長生郡日吉村鴇谷高橋操子）○美くしい繪葉書に歌や詩を認めて交換して頂戴 先着三十名の方には白羊宮白玉姫玉蟲朝晴女學世界秀才文壇等くちびきて差上ます。（大阪府貝塚本町笠原春之助様宅辰井ふみ子）○皆様の中に夢の跡、靜夜、萬葉評釋、獨步集、透谷全集、子規小品文、風流線、佛敎聖典、舊約物語、新小說昨九月度其他の新著御所持の方は妾の藻草、黑髮、玉川集、一葉全集、女性觀、死生觀、天人論、人情觀的日本史、戀愛の精神天才の發揮 動中靜觀、新體詩學、自然と人生、早稻田文學大部其他色々一冊或は數冊と御交換ください。（熊本縣玉名郡高瀨町猿渡與佐子）○私の許に不如歸、濱子、女夫波、已が罪、乳姉妹、女學生、伯爵夫人、露子夫人、やどり木 夏子、にせ紫など不用ですから皆様の內で文藝俱樂部、新小說、婦人世界、女學世界、衣裳かゞみ、婦人畫報等御不要のお方は御交換ねがひます（北海道函館區音羽町七十八番地富下藤子）○妾の許に野荻集、ハイネの詩 彈片、青年處世法、小說覺風

戀風が只今不用ですが源平盛衰記、平家物語、言海、暮笛集、藤園氏のわがおもひ 御不用のお方は何卒御交換下さいまし（長崎市館內二三、一瀨みどり）○只今妾の手許に女子文壇を初め女學世界、少女界、ハガキ文學、文章世界、婦人世界 其他不用の雜誌、新小說が澤山ありますの 御望の方は御手許にある不用本か又は舶來、紀念（スタンプ附）名所、繪葉書（但未使用の分にて三枚以上封入）外國切手、リボン等で申込て下さい（大阪府三島郡三宅村大字藏垣內竹原菊枝）○明治才媛文集第二編第一集第二集の二册 下名迄御送り被下御方には妾等三人の寫眞 三枚添へて外に御禮します（千葉縣山武郡成東町字宮前吉原政江）○「岸うつ浪」「不如歸」「金色夜叉」「はなれ小島」いずれも歌をお送り被下 れた方には日本の少女を御送りしますから何卒御惠み被下いな（埼玉縣秩父郡小鹿野町田端はな子）○諸孃様妾は小說道樂ロビンソン絕島漂流記萬物滑稽合戰記國性爺合戰風流志道軒傳山 家集己が罪海底軍艦松姫浮沈失戀瓊白玉姫初子集聚寶盆 動中靜觀懺悔いざさらば其他數種の不用書あります 何卒浮雲其面影新曲浦島女夫波銀鈴一葉全集ふた昔 獨步集バイロン海賊藤村詩集はるさめ集 即興詩人等と交換して下さい猶二葉亭著浮雲と交換して下さつたお方へは御禮として伯爵 夫人の繪葉書一組差上ます（越後西頸城郡根知村山本やす子）○誌友の姉様たちよ 妾も本誌の一週に倣ひて頂きます。 昨年の中學文壇、九年三集、八集、九集、十一集、十二集お持ちの御方は、私の新小說、文藝俱樂部、女學世界、青年等と御交換下さい、又寫眞が五枚ありますから早く御申込み下さい。（近江國犬上郡平田村別院前にて平田道子）○皆様の內に御不用の小說な御持の方は何でも鬪ひませんから一册宛御送り下さい 御禮には上等繪葉書に先着拾名へは婦人世界女學世界文藝俱樂部染書文學の何かなも差上げます（越後國岩舟郡村上字細工町河島伊與子）○妾しの手許には女學世界、中學世界、婦人世界、少女界、女鑑、むらさき、露子夫人、新學士、不如歸、言海、新小說、思出の記、不如歸の歌、歡師の妻、橘英男、玉手箱等不用になりて居りますから皆様の內で新夫人、にせ紫前篇、己が罪、婦人畫報、孝女白菊、夏子、天打つ浪、花枕、母の面影、錐子等御持ちの方は交換遊ばして頂戴 御禮として栞、寫眞掛、肘突其外香水製法教へてあげますわ（茨城縣眞壁郡河內村字藤ケ谷貝ゆう子）

寫眞編物交換

○諸姉様妾の所に九十九里濱大漁光景寫眞廿一枚あるのよ皆様の中でお望の方は繪葉書で申込み下されば 即日妾の寫眞を添へて發送致します（千葉縣長生郡豐岡村字茅場にて古山香花子）○誌友の諸姉さまの中でひじつきその他の 編物御存じの御方はどうぞお教下さいませ御禮 はきつと致しますよそしてハイカラ令孃とにせ紫が御座いましたら私の佐賀錦や文藝俱樂部化粧かゞみその 他少女界少女世界等澤山ありますからどうぞ御交換を願ます。（大坂北區西野田十六町七〇四槻木悅子）○誌友の皆さん美人繪葉書又は御寫眞を御送り下さい 先着者五名には御返禮として 絹地のハンカチーフに日出に鶴や梅花の縫を入れたのに不束者 な妾

の影を添へて必ずく〱（岡山縣上道郡玉井村若本機明様方墨貞女）○妾にひじ付組寫眞掛栞等御送りの方へ吳の枝折 吳繪葉書日本海第二回紀念繪葉書等と御交換を願ます（吳市二川町四本通二丁目百〇二碓井松枝）○御交際や交換を願ます、寫眞もれ、先きだつ十五名の方には見苦しのですが妾の寫眞に當地の中尊寺繪葉書を一組添えて御禮致します。 後着の方には厳美村五串天狗岡のエハガキと組製の編物とを差上げます（岩手縣西磐井郡一關町四ノ一一小野寺卷子）○私は編物が好きでたくさんもつてゐるのよ皆様の中でヒジツキ、リボン、エハガキ、ハンカチと交換して下いな神かけて送ります（神戸市中山手通六丁目水野てる代）○私の寫眞が二十三枚ありますからみなさん雜誌繪葉書て申込下さい其外には 繪葉書及女子文壇て御禮します（千葉縣長生郡新治村吉井大谷市太郎方井內津加子）○妾は千葉縣の中部なる本納女學校に通學する不束者ですがどうぞ寫眞や 玉章シォリ繪葉書の交換を願ひます 妾は上總の名高き太東岬の繪葉書四組妾の見苦しき寫眞三組あります（千葉縣長生郡豐岡村弓渡高山保方 高田うた子）○玉章の御交際を願ひますよ 又寫眞を御送與被下ば御返禮は必ず致しますよ（長野縣下伊那郡下條村陽澤たけ子）○私事見苦しき寫眞三組と描き繪葉書五組有りますから 先着十四名の御方へは速に差上ます（千葉縣長生郡關村關山中谷高山露一方高山縫子）○美しき繪葉書四組と、妾の見苦しき寫眞三組とがありますから、繪葉書、若しくは寫眞などを御送り下さる先着九名のお方に差上ます（千葉縣長生郡豐岡村弓渡高

山千代松方同かれ子）○何卒御手紙や繪葉書又はあみもの等を御惠み下さいまし 先着五名の御方には組製のしほりと當地の繪葉書を以て御返禮申し上げます（青森縣弘前市田代町七番地竹中善榮久）

繪葉書交換

○妾のところに有名な八幡神社の繪葉書五組と妾の寫眞三組とがあります から中込み先着七名のお方には必ず差上げます（上總長生郡豐岡村萱場北谷稗田鈴木うめ）○何卒美しい繪はがき交換を願います又玉章や編物も交換して頂戴な（京都四條御旅町明岡寫眞にて森山百合子）○諸縣の皆様よ、妾は今度英文の御交換を願ひますわ繪葉書は永田 矢口神社の三組あるのよ（千葉縣山武郡白里村四之宮あき子）○繪葉書、寫眞、編物等御送り下さい御返禮に韓國風景 風俗繪葉書、寫眞、ハクライ葉書等御望の品で送ります（韓國釜山港幸平町三丁目二七二向操）○何卒繪葉書の御交換を御願いいたします英文ものぞみます 函館區青羽町二三高橋方加藤靜枝）○姉上様始めて繪葉書御交換ねがいます上等繪葉書にて御返事だします（京都四條御幸町東入赤井方中川久子）○皆様、御自詠の和歌を御認められし玉章を送て下さい、趣味ある繪葉書を呈します（越後大野屋傚柳十三丸岡孤羊子）○誌友の皆様どうか發句和歌繪端書玉章の交換を願ひます（新潟縣南蒲原郡見付本町坂井健次郎方淺野濟子）○美しき繪葉書に自作の歌又は俳句なり書き御交換を願ひます（大阪市西區阿波座中通り弍丁目卅番地 寺脇愛

柳

諸嬢の交際

○諸上の姉上さまよ私は冷たき霜と交はり淋しく月日を送つて居りますから なにとぞ御見すてずに 末永く御交際を願ます（秋田縣雄勝郡稻庭町石川美那子）○肌吹く風いと寒き折から皆様如何に御暮してすか 片山里に悪き日を送る哀の身を憐れて 思さば何卒永久につきぬ御交りを願ひます。（埼玉縣入間郡仙波村船津千代子）○兄上姉上様どうぞ御自筆の水彩畫を送つて下さい御禮は是非共致します 又繪葉書もね（鳥取縣西伯郡賀野村縱指菊子）○末ながく御交際を願いますもし一時的の 御交際は前以て御斷り申しますよ 又繪はがきの御交換も願ひます（長崎市舘内一六平田すみれ）○私しは女子文壇愛讀の諸嬢様に一枚宛哲方を書いてもらいたいと思ひます そして多く集つたらこれを筆蹟帳として保存しておくつもりてす どうかどしく〱送つて下さい（岡山縣邑久郡豊村五明十七番地岡實榮鶴）○叔父の許に食客するの身何とぞ境遇御憫察の上繪葉書、地方雜誌、菓など御惠贈下さいませんか（遠江國小笠郡加茂村八木嶋那方菊笠みつ子）○誌友の皆様繪葉書や玉章お送下さいまして有難うよ 猶此後も一層親密な御交際を願います（長野縣下伊那郡座光寺村今秋伊智子）○親愛なる皆様よ淺學なる妾を御導き下さいませ術めのいたつきに 希望も何も滅茶々々にされて淋しく世を送て居ります者あはれ妹とも思ぼして（靜岡縣濱松町下垂岸次子）

文壇餘興　好きな音樂（課題）

未だ皆さんに音樂の事に就いて聞きませんてしたから次のやうな方法で承らうと思ひます、方法を御らんの上て例の通り山のやうに御投書をねがひます

▲音樂とは日本西洋どちらも言ふので琴、三味線、笛、太皷、琵琶、皷は勿論ヴアイオリン、ピアノ、風琴、ハーモニカの西洋樂、淸笛、明笛又は學校の唱歌、讃美歌、踊、義太夫、ドラ、チヤハチ何でも彼でも一切の音樂を言ふ▲其内て皆さんの好きな音樂は何か、嫌ひな音樂は何か▲聞いて居る時の感想▲自分が演奏する時の心持▲各地音樂會の事▲好きな曲の名▲音樂といろ〳〵の聯想▲其外凡て音樂に關する事なら何でもよろしい、題は假に好きな音樂として書きましたけれど音樂一切の事を含んてあるのです▲文壇餘興の四字は必ず書添える事▲〆切は本月二十日▲原稿は十六字詰十行まて▲懸賞は一圓、七十錢、五十錢、三十錢、二十錢の五等に分ち圖書切符にて呈す

雜　報

○文壇の花

本誌臨時增刊として來る四月『文壇の花』と云ふのを出版します、空前の大懸賞は、諸孃の手に落るのです、振つて傑作を投じたまへ、小說文章和歌俳句項目は幾個にも分れてゐます、投書の方法は何の面倒もありません、〆切の三月五日と云ふ事を忘れないやうにどし〳〵奇思妙想を寄稿あらんことを願ひます、なほ別項の詳しい豫告を御らん下さい

○各女學校の生徒募集

女子大學を初め都下の各女學校は生徒を募集し初めた、大抵は三月に入つて入學願書を出し、四月から入學の事になつてゐる、此際女子一通りの學問技藝を修めやうとする諸孃はそれ〴〵自分の入らうと思ふ學校へ入學するとよろしい

○東京の晴天

東北地方は近年稀な大雪て汽車が雪に埋まると云ふ大降りであるが、東京は新年來の快晴續きて雨は降らず、雪は降らず、只霜解のぬかるみに辟易する位ゐなものである。

懸賞呈品

（甲種）

▲壹等	金拾圓	賞金贋品
▲貳等	金參圓	與服物
▲參等	金八拾錢	小間物
▲四等	金五拾錢	圖書切符
▲五等	金四拾錢	圖書切符

（乙種）

▲壹等	金五圓	絹張洋傘
▲貳等	金壹圓	帶止半襟
▲參等	金六拾錢	文房具
▲四等	金三拾錢	圖書切符
▲五等	金貳拾錢	圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回（二月、五月、八月、十一月の十五日發行））

一　册（大判百頁）	前金拾錢	郵稅共前金拾壹錢
八　册（半年分增刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二册（一年分增刊除ク）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓貳拾錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六拾錢

振替貯金又は爲替に限る事

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料何もいらぬ安全の送金法（此の「拂込用紙」は何處の郵便局ても申出あれば何度ても無代て呉れます）◉此方法にて送金の節は登記料二錢算入を乞ふ

明治四十一年二月十二日印刷
明治四十一年二月十五日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

紀念發賣は空前の大安賣

小森松風著

美文作法

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　本書は總論に於て美文の起原名稱種類を說明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

小森松風著

言文一致文範

全一冊洋裝大判並製　正價四拾錢

廉賣金貳拾錢　郵稅四錢

▲中央新聞評　言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり、斯道研究者の歡迎を受くるものならん

●詩と美文　玉むし　河井醉茗君著　價六十錢

●諸大家選評　懸賞文集　第一　價廿五錢

右兩書とも發行元は賣切れに付當分增刷いたさず候

●第二懸賞文集の特賣廣告は別項にあり

（鄕内製本）

○本社創業滿三年紀念特賣廣告

▲發兌元　東京市京橋區大鋸町十、十一　振替貯金口座第一七二九番

女子文壇社

中村報知新聞記者著

實地精査 女子遊學便覽

全一冊洋裝校長肖像入並製　正價三拾錢

廉賣金拾五錢　郵稅四錢

▲萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば、調査は善く行屆けり、尙は職業案内及學資の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風著

小說美文 朝ばれ

全一冊本綴彩色畵入美裝　正價四拾五錢

廉賣金貳拾五錢　郵稅四錢

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない靑春の女の幽情を寫したものです。

各書とも殘本僅少なり賣切れると增刷しませんから、早く御愛讀を願ます。

これほど安い本は天下にありません

明治四十一年二月十五日増刊（毎月一回一日發行）

女子文壇

第四年第三號（春日影）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

（東京秀英舍印刷）